

語りつぐ関東大震災

横浜市民84人の証言



横浜市

横浜市

横浜市民84人の証言

語りつぐ関東大震災

大正十二年（一九二三年）九月一日。

その日の横浜は、朝まで雨が残ったもの

台風一過の澄みきった秋空が広がっていた。

正午直前、いきなり地響きとともに縦揺れが

始まり、次いで横揺れに変わった。

地震が続いたのは約四分。

この四分の間どこにいたかが、

人々の最初の生死を分けることになった。

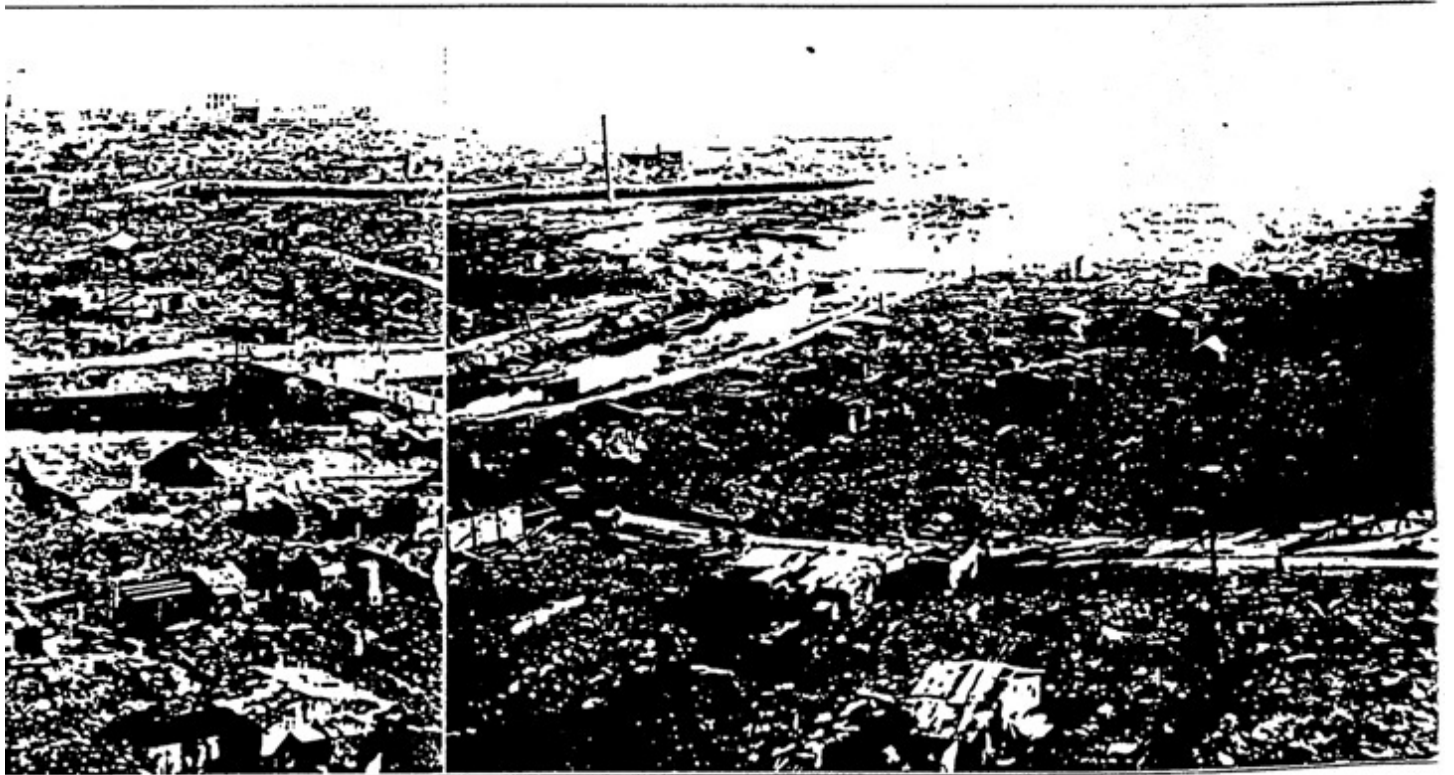
倒壊した家屋の下敷きになった人が

たくさんいた。

しかし、激震の四分間を生き延びた人も、

二度目の災害でまた生死を分けることに

なった。地震直後から上がった火の手に囲まれ、



逃げられずに死んだ人の数はもつと多かつた。

この本で体験を語ってくれた人たちは皆、

その時少年や少女だった。

父をなくした、母をなくした、兄弟をなくした

という人もいる。

一日中火の海を逃げまわつたという人もいる。

つらい思い出なので、子や孫にも

あまり話さなかつたという人もいる。

惨禍^{ましか}を生きた人たちが、何十年も胸の奥に

鮮烈^{せつれつ}に持ち続けてきた記憶。

それを語る言葉は、

関東大震災というひとつの歴史の証言に

ほかならない。



廃虚と化した横浜地蔵坂下より撮影

語りつぐ関東大震災

横浜市民84人の証言

目次

その時、横浜は

火の粉のなか、にぎり水で川のようになった道路を必死で逃げた	市川菊治郎さん	15
船のなかで一週間過ごしてから横浜脱出	高橋正三さん	18
竹やぶのなかに蚊帳をつつて一カ月暮らす	中川又吉さん	22
方々から「助けてくれ」という悲鳴が	佐藤順平さん	26
異常時に出てくるのが人間の本性	小川名丁さん	28
「助けて！お金はいくらでも出すから」と下敷きになって叫ぶ人も	石川鉦市さん	30
屋根瓦で頭を打ち、意識不明に	金子富男さん	34
朝鮮人約百名を日本人の襲撃から守る	川畑孝成さん	37
線路づたいに八時間、東京から歩いて戸塚の家にもどる	河原利助さん	40

市民に何が起ったか

- 人々がパニック状態にあつたとき、うわさはすぐ味をもつて広まつた 稲葉佐吉さん……………43
- 熱い空気を吸い込んで窒息死する人が多かつた 矢作親治さん……………46
- 草ぶき屋根のひさしが地に着くかと思うほどの揺れ 岩崎 肇さん……………50
- 横浜駅の車両のなかで一夜を明かす 高橋順蔵さん……………54
- 東京都心も炎の風にあおられて被害続出 小松宇兵衛さん……………58
- 深い割れ目に向かつて叫んでいる人も 瀧美徹弥太さん……………63
- 庭のつげの木に一家でつかまる 持田二郎さん……………63
- 地球がどうかなくなつちまつたかと思つた 新井泰蔵さん……………64
- 山の上から下まで一メートル幅の縦割れ 河原 章さん……………65
- 電灯がぶつかり合つてパンパン割れ、
じつにこわかつた 山本吾一郎さん……………65
- 庭に飛び出した大人が 深原亥太郎さん……………66
- 犠牲になつた母を着のみ着のまま土葬 岩崎家寿子さん……………66
- 気がついたら階下の中庭にいた 加藤まさ子さん……………66
- 線路の上で一夜を明かす 小出シツ子さん……………67
- 病院の二階の瓦がドカツと落下 笠渡卓英さん……………67
- 川の小舟に夢中で乗り込む 熊倉トミさん……………68
- 石油タンクが爆発、三週間燃え続けた 渋谷清太郎さん……………68
- 青い砂がスースーという音とともにわき上がる 岩本喜平さん……………69
- レンガづくりの建物は全部倒壊 石橋勇六さん……………69
- 無事だつた瓦せんべいの型 日中全次郎さん……………70
- はね上げられるような上下振動 原千代松さん……………70
- 一メートル以上盛り上がった海面 相田倉松さん……………71
- 倒れた家は「地震の道」に沿つていた 安西正治さん……………71

ワツと吹き上げられ四つんばいに	徳久 芳さん	72
山の上砂が崩れ、木がなぎ倒された	三浦 豊さん	72
わらわら根がゆさゆさ揺れて	言原朝次さん	73
二階建ての家が崩れた		
線路が一本ブラインと宙にぶら下がって	菊池道之介さん	73
殺倉の収穫物が心配のタネだった	大須賀 清さん	74
三面の焼け野原、弘明寺から横浜港が見えた	福島秋好さん	74
うれしかったアメリカからの救援物資	吉野一雄さん	75
家でとれたナス二百キロを寄付	天野一雄さん	75
港の税関倉庫から食料品を盗む人もいた	斎藤 豊さん	75
水と一緒に地上に吹き上げられた祖父	池田嘉代さん	76
建ててしまわない校舎が傾いた	渋谷 将さん	76
漁師のホラ貝が配給品の合図	岩崎伊三郎さん	77
間一髪、危機をまぬがれた弟	平本政文さん	77
うわさによりまわされるのを戒めた巡查	日辺清太郎さん	78
余震がひどくて竹やぶに寝た	高橋六三郎さん	78
うわさ(デマ)を信じて自警団に	小松良雄さん	79
ウスを並べて梯子を渡した上で寝起き	岡本新太郎さん	79
惨殺死体を多く見た	福井光治さん	80
市電のなかには	北見新六さん	80
焼かれて骨ばかりになった死体が		

つぶされた友人の上を合掌して踏み越えた	山田浅造さん	81
竹ヤリを持って押しかける	福田逸朗さん	82
路上をイモムシのようにころがる	柳下タマさん	82
近所が助け合ってあと片づけにあたる	塚本定雄さん	83
裏山からひいた水に助けられた	関 ナカさん	83
今でも霧がかかると地震が心配に	小山竹松さん	84
臨機応変のサバイバルセンスも大事	金子三郎さん	84
母を心配した親父は自転車で都内の九段へ	矢沢友治さん	84
地震の教訓から縄梯子を用意	佐藤 達さん	85
馬を洗う大きな桶に飛び込んだ客人	酒井才一さん	85
いとこの足が地割れにはさまれた	吉村太市さん	86
気がいたら一階にころがっていた	内田辰雄さん	86
石ウスのかげに隠れて助かった	山田秋平さん	87
落ちてきた瓦で祖母がけがをした	成田新太郎さん	87
集落の全部の家がつぶれなかったヒミツ	小川好忠さん	88
渚に近い砂地の家々がいつきにつぶれた	加藤兼吉さん	88
建てかけの家を懸命に守った	鈴木 潤さん	88
つぶれた家から「助けてくれ」の悲鳴	小山兵衛さん	89
消防車はたった一台、男たちは消火に必死だった	榊原秀義さん	89

腐っていく指から指輪が抜け落ちていく 石黒徳衛さん……90
使っていた七輪にとっさに水をかけた祖母 土屋重雄さん……90

わらぶきより被害の多かった瓦屋根の家 杉山新一さん……91
黒煙立ち込める空にモクモクとキノコ雲が 小野一郎さん……91

大地震の教訓を次世代に生かしてほしい「トーク&トーク」

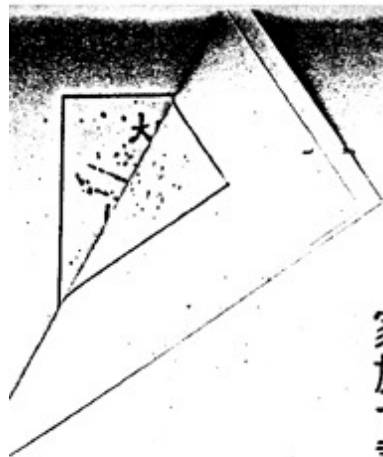
地震の何がこわかったか

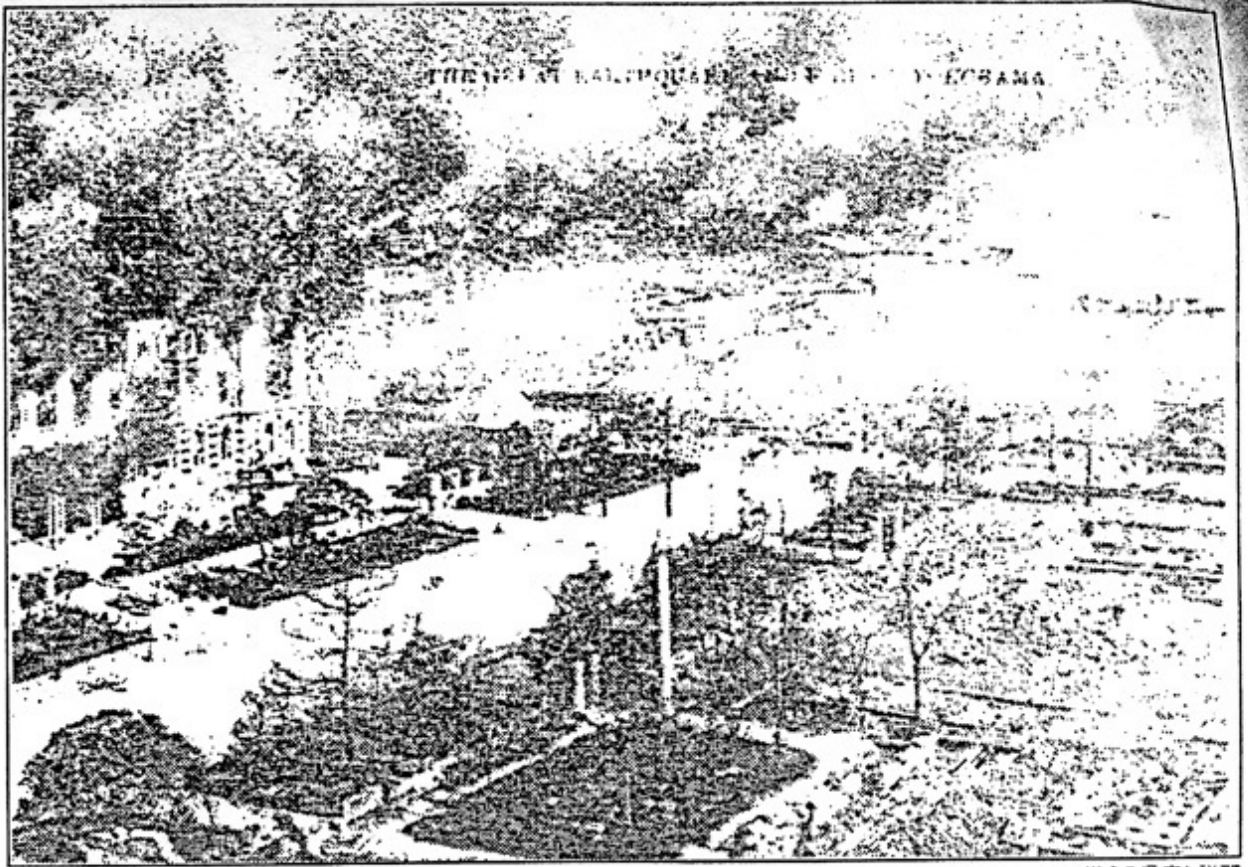
座談会その1 南区のみなさん 岩田栄一さん 相澤シゲさん 95
山下鶴次さん 阿部倉之丞さん……

座談会その2 神奈川区のみなさん 島根東吉さん 小林時松さん 101
大久保喜八さん……

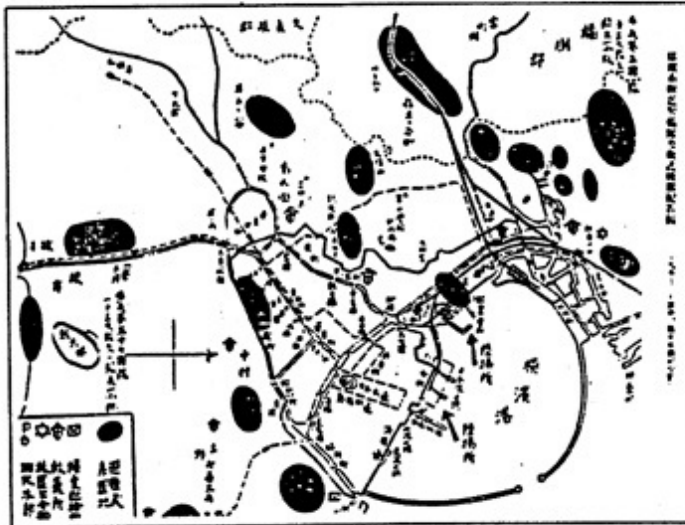
もし、いま地震が起きたら 並木憲司さん 森竹啓子さん…… 107

家族で話し合おう、地震のこと 富沢実さん 富沢さださん 111
富沢孝さん 富沢和子さん
富沢泰子さん 富沢一也さん……





燃える県庁と桜田



焼失地(灰色部分)と避難民集団地(黒色部分)



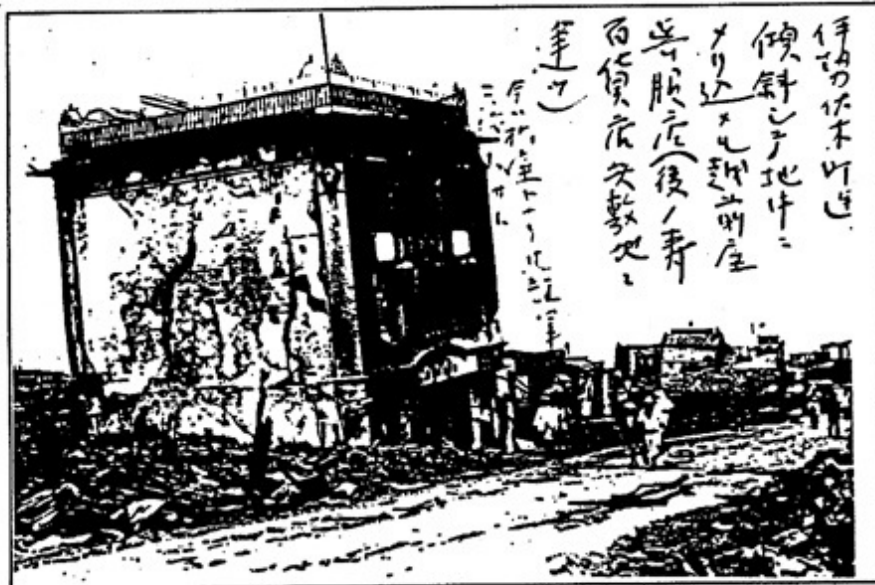
港町

関東大震災により、横浜の街は一瞬にして廃墟と化した。震災時、九万九千八百四十戸あった市内の住宅のうち、六万二千六百八戸は



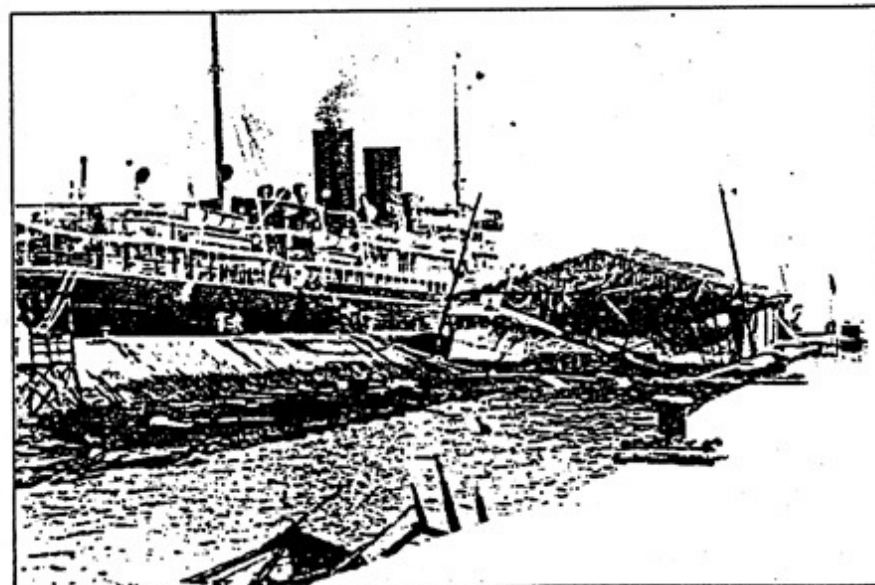
大正12.9.1 横浜大震災
横浜吉田橋の馬車道

馬車道



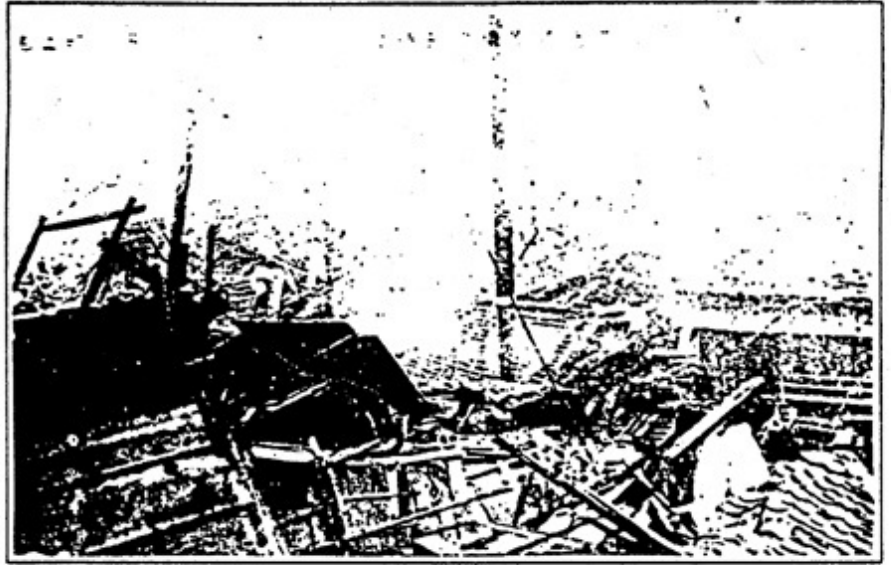
伊勢の佐木町
傾斜して地中
ノリ込メし建前屋
等販店(後ノ弄
百何店又敷地
筆マ)

伊勢佐木町



大根橋

地震のあと起きた火災により、全焼。二万五百三十二戸が、全半壊。何らかの被害を受けた戸数は、実に九万四千八百八十二戸にのぼった。もちろん、学校や病院などの公共施設のほとんどが使えなくなった。建造物だけでなく、道路にも大きな地割れが走り、山や崖が崩れるといった被害も続出した。



地震直後、焼失前の尾上町

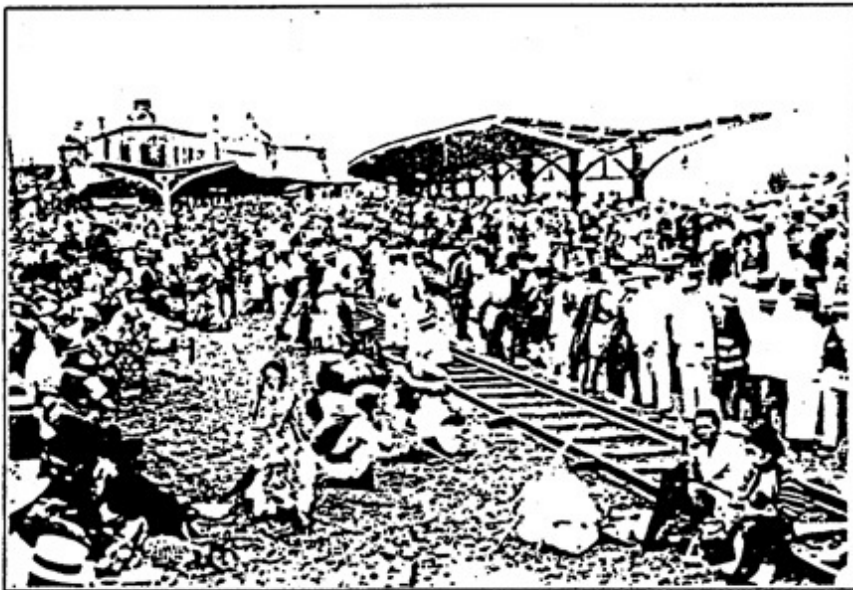


火焰に追われ避難する人々

災害による被害は建造物だけでなく人、つまり市民にも非常に多くの犠牲者がでた。当時の総人口、四十四万二千六百人の九十三%



梅ヶ枝町(現伊勢佐木町)の惨状



焼け残った横浜駅

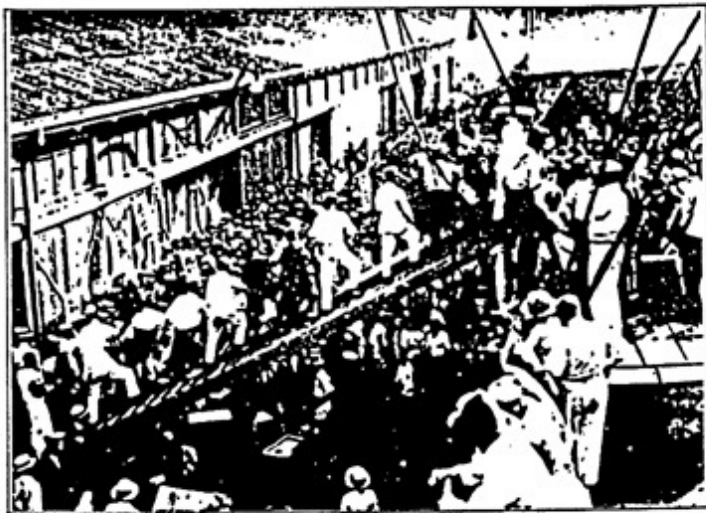


山下町の避難民

四十一万二千八百九十六人が家を
焼け出されたり、けがをしたり、
死亡したりしている。死者の数は
二万一千三百八十四人にのぼり、
重軽傷者合わせて一万二百八人。
行方不明者が一千九百五十一人で
あった。罹災者の多くは、地震の
被害は免れたが、その直後の大火
で家や生命を失ったのだった。

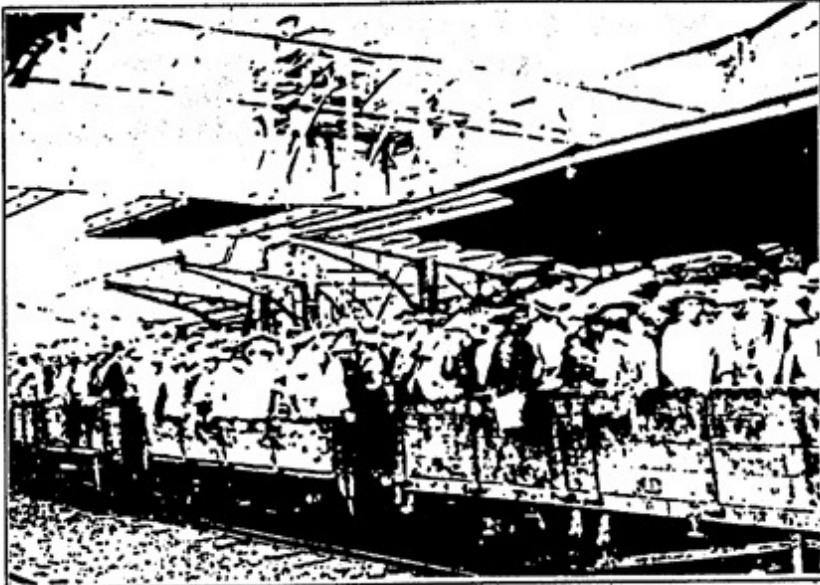


戸部尋常小学校の青空教室

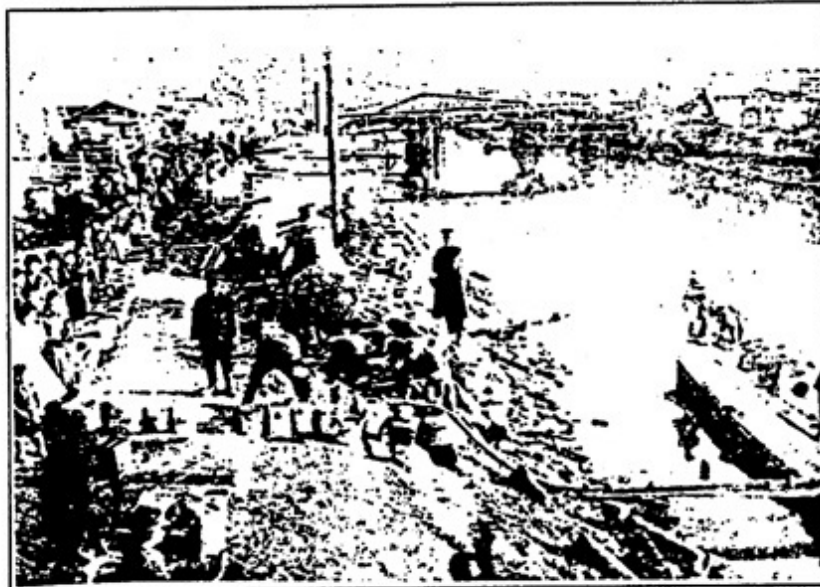


大阪港に着いた避難者

大きな被害の出た関東大震災だったが、その復旧も市民の生活レベルでは困難を極めた。何よりも大切な生活の場である住宅を失った人は多かったが、それぞれが公設や自設のバラックと呼ばれる小屋に住んだ。しかし、住宅の復旧はなかなかはどらず、市を離れ、近郊の農村地帯に避難する人があとをたたなかつた。水道の復旧も大幅に遅れ、飲料水の確保は市民にとって重大な問題となった。そのため市では、給水車などを出した。市内ではチフスやペストなどの恐ろしい伝染病が発生した。結局バラック住まいは地域によっては二年以上も続いた。そんななかであって、校舎のない青空学級ではあ



避難列車



翁町河岸の給水



戸部のバラック

つたが、十月の十五日には市内の小学校が一斉に授業を再開した。校舎の復旧にはやはり時間がかかり、その年の冬には酷寒のなかテントやバラックで授業を行なった。鉄道の復旧も早く、東京―横浜間は、九月五日には開通した。このことは、地方へ避難する人たちにとり、大きな救いとなった。東海道全線が開通したのは、十月の二十八日だった。

第一章

その時、横浜は

横浜駅の火災



火の粉のなか にぎり水で川のようになつた道路を 必死で逃げた

市川菊治郎さん

西区
当時8歳

祖母は家の下敷きに。逃げる途中で焼け死んだ人を目撃。

あの日はちょうど夏休みが終わり、二学期の始業式がありました。小学生の私は家に帰って、家族みんなと昼ごはんを食べていました。そのとき突然、ゴゴツともうれつな揺れがきたわけです。ドカンと下から突き上げられ、お膳や茶わんがひっくりかえり、子どもの私は畳の上に投げ出されてしまいました。生家は町のなかでカゴづくりをやっていて、仕事場を兼ねた土間は広く、みんなが食事をしてたのは、その土間に近い部屋でした。

親や兄弟たちが裸足で通りへ飛びだしたので、私も夢中でそれに続きましたよ。初期の揺れがひと段落した折、「ばあちゃんはどうした!」と親が叫びましたね。祖母のいた裏の離れはつぶれ、下敷きとなって、もうだめでした。今振り返ると、お年寄りがいる家庭は万一の場合を考えとく必要がありますね。



カゴづくり
竹や籐を細く裂き、編んで器物を作る仕事。家の土間などに座って作業をした。

そうこうするうち、まわりから火の手が上がって、はやはやしていられなくなりまして。おやじが「みんな川のほうへ逃げるんだ」と叫び、私の家から海側にある川へ必死で走りました。

その途中、つぶれた家があつて主婦が下敷きになつていたのを見かけました。落ちた梁はりにはさまれ、まだ生きているのにどうしようもないんです。その家はすでに燃えはじめていて、自分にかまわず逃げおくれという奥さんと、泣き叫ぶ家族とで、そりやもうたいへんな場面でした。火はどんどん燃え広がって、下敷きになつた主婦は、結局焼死したわけです。目の前で肉親が焼け死ぬのを見るなんて、まったく地獄絵ですよ。

私らが川に着くと、ちょうど岸にハシケハシケがつかないであり、それに飛び乗りました。水の上なら火はこないだろうし、揺れても地面よりは安全だろうと私の親は判断したようです。けれど現在よく考えてみますと、海に近い川というのは決して安全じゃないわけです。もし高波とか津波が発生したら、もろにその影響を受けてしまうからです。

ハシケに飛び乗ってほつとしたのもつかの間、上流の少し離れたあたりで、突然ドドンと音がしましてね。油類をしまった倉庫に火がつき、ものすごい爆発がはじまつたのです。やがて、火のついた油が川を流れ出し、ハシケが危険にさらされたため、枕木まくらぎのある線路なら安全だろうと、鉄道のほうへ逃げました。枕木とレールの組み合わせは、いわば竹やぶの地下茎ちかけいみたいなもので、余震にはだいたいお役立ちましたけれど、付近の駅が燃えだして火の粉が飛んできて、そこにもいられなくなりました。私ら子どもをつれた両親は、そのつど本能的と申しましようか、安全なところへ、少しでも安全そうな場所へと逃げたわけですが、町なかにも暮らす人は日頃、どこにどんな建造物があるのか、それは安全か危険をとまなうのか、といった点を頭に入れておきたいものです。何かのときに役立ちますよ。

梁

家の上部に水平にわたされた材木。屋根の重みを支えたり、柱を固定する役割を果たす。



ハシケ

岸と沖に停泊中の船の間を、荷物や乗客を乗せて運ぶ小型の船。



母が道路の地割れに片足をはさまれた！

川もだめ、線路もだめとわかって、私たち家族は、火の粉をかいくぐりながら、こんどは海と反対のほうへ走りました。しかし、どこかで水道管が壊れたのか、それとも川の堤防が崩れたのか、私らの進む道に水が出はじめましてね。にごった水がどんどん流れてきて、たちまち路面がかくれちゃったんです。ざぶざぶ川のなかを行くようですね。

ところが、だいぶ進んだとき、「アーン！」と母親がすごい声を発したんです。泥水のなかにつくりと片膝をついたようなかつこうで、顔がゆがみました。先頭を進むおやじが、「おい、どうしたんだ」と血相を変えて引き返しましてね。「足、あしが動かないんだよう」と母親。初期振動のとき道路に割れ目ができ、そこに片足が落ち込んだとたん、余震でこんどは割れ目がふさがっちゃった。母親は割れ目に片足をはさまれてしまったのです。

にがり水はどんどん増水してきますし、かといって足は引き抜けない。地震ではよく地割れができますけど、道路が泥水で冠水していなければ、避けて逃げることもできません。しかし、あの場合はそんなわけにはいかなかったんです。今日もし地震が起き、何らかの原因で道路が冠水したような場合は、避難するにあたり、よくよく気をつけなくっちゃいけません。

顔色を変えたおやじは、母親を助けたくても、どうにもならなかったんです。何しろ大地がガバツと足をくわえこんじゃったわけですから。自然界の力つてのは、とにかくすごいですね。私が今になって思うには、この瞬間には両親ともども覚悟を決めたんじゃないかな。倒壊家屋の下敷きとなり、焼け死んでいく主婦を見たばかりですし。ところが幸運なことに、ちよつと大きめの余震があったとき、閉じていた割れ目がもう一度

開いて、スポツと足が抜けたんです。まことにラッキーでした。

私の母親は、震災のあとだいたい長生きしましたが、冬場だとか梅雨どきに冷えたりすると、はさまれた足を痛がりましてね。そのつど大地震のこわさを口にしていましたよ。

船のなかで

一週間過ぎしてから

横浜脱出

高橋正三さん

保土ヶ谷区
当時10歳

つぶれた家から一髪で飛び出す

震災のころ、私が住んでいたのは長住町です。三菱の横浜ドックがあんなに大きくなかったころ、おやじが、そこのお抱えの人力車屋でした。隣の自動車屋とうちの二軒だけが御用商人で、横浜ドックの敷地のなかに住んでいたんです。うちは、若い衆を十人ぐらい使っていました。

地震の日は、学校から帰ってきて、うちの前の靴屋くつやさんに遊びに行っていたんです。昔の靴屋は今とちがって、販売ではなく、修理専門でした。その店先で友達と遊んでいたら、グラツときた。そこのおやじさんが「ほらっ、逃げろ！」というので、外へ飛び出しました。外に出て振り返ると、もう、靴屋の家はつぶれていました。

揺れたときは立っていられず、あっちこっちへころがったんですが、はっきり覚えて



人力車

客をのせて、車夫が引く二輪車。一人乗りと二人乗りがある。明治二年に発明された当初は、車輪が木製で乗り心地が悪かったが、大正時代にはゴム車輪が使われていた。

いるのは、目の前に、地割れがピツピツと走っていたことです。

そのうちに、年寄りがどこからか、梯子はしこを二つもつてきて、その上に戸板を敷き、「子どもはこの上に乗っかれ」といったんです。地割れがふさがったら、もう足が抜けなくなってしまうって危ないですからね。十五センチぐらいの幅の地割れでしたが、その長さは見える範囲まで、一本線に走りました。

家が倒れたから、ほこりがもうもうと舞い上がったんですが、私の家はつぶれていないのが見えました。

隣の自動車屋が、「子どもたちは、みんな集まって自動車に乗れ」というんです。それで子どもは乗れるだけ乗用車に乗って、海岸に行きました。海岸には、いかだがかなり沖までたくさんあつたんです。今でいうところの貯木場を兼ねていたんでしょう。

いかだはつないであるから、その上を歩けるんです。五十メートルぐらい歩いて行ったら、沖にだるま船が着いていました。船頭さんが上がれとってくれたので、その船にみんな収容されたんです。近所に大きな倉庫がたくさんあつたから、だるま船は荷揚げしたりするために、そこにいたんでしょう。家族で船のなかで生活しているんです。ほかに、何隻ななもありました。

その船で、一週間ぐらい過ごしました。子どもは、五、六人いたし、ほかに大人もいたから、たちまち船の食料がなくなりました。食料に困って、船頭さんたちが倉庫に行つて、なかから米をたくさん担ぎ出してきました。それでごはんには困りませんでした。船頭さんは、べつに知り合いでもないのに、子どもたちの面倒を見てくれたんですよ。

あとで、船頭さんは警察に呼ばれて米のことで調べられたんです。それで、当時お世話になった人たちが集まって、「子どもたちのためにやってくれたのだから」と嘆願書を出したといういきさつがありました。



だるま船
西洋型の機軸の広い小型船。使用
目的は、ハシケと同じ。

ちようどお昼どきだったので、どの家でも食事のしたくで火を使っていたわけですから。地震のあとすぐ町じゅうから火が出たので、近所の人はみな、空き地がいっぱいある横浜ドックのなかに逃げてきました。たくさんの人が火に追われて、いかだや船のほうに避難してきました。

当日の夜、船の甲板かんばんの上から、町のほうを見ていたら、町が真っ赤に燃えて、ときどき火柱が立ち、トタンが舞い上がる。竜巻も起きている。「花火みたいできれいだな」といったら、大人にコツンとやられたことを覚えています。東京も横浜も、どちらを見ても火の海でしょう。私はまだ子どもでしたから、日本全国がだめになったと思っていましたよ。それに、油が海に流れて、海も燃えている。火がこっちへきたら、自分の乗っている船も焼けてしまうと思つて、こわかつたですね。

脱出しようにも船も貨物も人であふれていた

私の家族は高島町の貨物駅に逃げて行つたんだそうです。あそこは操車場そうしゃじやうですから、火はだいじょうぶだったようです。貨車のなかに酒樽さかだるがいくつもあつたので、親父は酒で顔を洗つたそうです。やわらかい翁飴おきなもちが入つた箱もいっぱい積んであつたので、それを出して食べたと聞きました。

家族にも、子どもたちが自動車で逃げたことはわかつていたから、兄がのほりみみたいなものを立てて、「高橋正三はいないか」と、だるま船のほうに探しにきました。そのあたりをずっと探し歩いたみたいです。それでやつと会えました。

近所の人が「関西のほうへ行く船が出る。それに乗りたい人は新山下に行くように。汽車も貨物だけど、東海道線がだめなら中央線に行くから、それに乗りたい人は高島町の駅に行くように」といつてきました。

操車場

列車の停車場で、各車両を分解・編成する場所。



酒樽

日本酒の保存用に杉でつくられた樽。四斗入りの大樽はコモ披りといって、ワラで編んで樽の外側を縛つた覆いを被せてあつた。



親父の田舎が愛知県だったので、そこに行くことになって、家族の者が私を迎えにきたんです。自宅にはもどらず、そのまま新山下のほうに行きました。

新山下まで歩いて行きましたが、横浜は全部燃えつきていて、残っているのはビルクらいでした。空き地みたいなところには、死体がゴロゴロしていました。途中で正金銀行（現・県立博物館）の横を通ったら、建物と塀との間にたくさんの人が折り重なって死んでいましたよ。火に追いつめられたんでしょね。

いまだに印象に残っているのは、山下公園の海岸通りを歩いているときに、赤ん坊を背負った女の人が、裸で海にプカプカ浮かんでいたことです。それが腐乱していたから臭くてね。その親子も火に追われて、水のあるところに逃げてきたのでしょうか。泳げなくても飛び込むから、焼け死ななくても、溺れ死んでしまう人が多かったですよ。

船に乗ろうとして、新山下に行ったら、すごい数の人が四列にズラリと並んでいました。みんな着たきりすずめで、荷物なんか何も持っていません。一日並んでいましたが、結局、乗れませんでした。待っている人たちはみんな布団ふとんもないところで寝て、食べるものは、高島町の貨車のなかから持ってきていましたね。

船がだめなので汽車で行こうと、高島町の駅に行きました。あっちへ引つ張られたり、こっちへ引つ張られたり、やっこの思いで貨物列車に乗り込んだんです。集結するところまで、貨車に乗って行き、そこからは客車で中央線を行きました。はつきり覚えていないけれど、それが一週間ぐらいたってからですかね。

汽車は、避難民専用の列車のようで、焼け出された人が大勢乗っていました。食べものがなかったんですが、途中の駅では、みなさんが食べものや着るものをいっぱい持ってきてくれました。兄の嫁さんは赤ん坊を抱いていたから、気の毒がられて、赤ん坊に着るものをずいぶんもらいましたよ。そんなふうにして父の実家の幡豆郡はすづぐんに行き、年内に横浜にもどるまでそこで過ごしました。

翁飴

柔らかい飴、水飴をさらして寒天とみじん粉（モチ米を蒸した和菓子材料）を混ぜ合わせてつくったもの。



竹やぶのなかに 蚊帳かやをつつて 一カ月暮らす

中川又吉さん

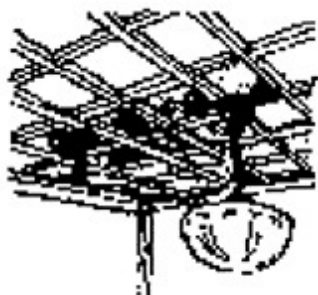
金沢区
当時7歳

「地震には通り道がある」というのは本当だった

大震災の日は、両親は畑に行っていて、家には小学校一年生の私と祖母と、それに二歳の弟がいて、お昼ごはんを食べ終わったところでした。地震がグラツときたとたん、大きな家が、あつという間につぶれてしまったんです。台所にいた祖母は自分で庭に出ましたが、座敷にいた弟は、二つのたんすが「人」の字に倒れた間にはさまれました。私は、天井の井げたに組んだ梁が落ちてきて、その梁と土間のすき間に閉じ込められてしまいました。弟と私がワンワン泣いていたのを見つけて、一時間ぐらいたってから、近隣の人たちがトビ口などで屋根を壊して助けられました。おかげで二人ともけがもなくて、本当によかったと思います。

表に出てみたら、家がみんなつぶれていたの、びっくりしました。洲崎神社すざきじんじやの石灯ろうは三段に折れていましたし、幅一メートルくらいの地割れが、龍華寺りゅうわじのほうまで百メートル以上の長さで続いていました。大人がすっぽり入るくらいの深さでした。

地震には通り道があるといいますが、洲崎神社から洲崎郵便局の反対側までの家は、



井げた

材木を組むときに漢字の井の字に見える形にする。

全部つぶれました。でも地震の通り道以外の家はつぶれなかったんです。近所でも、つぶれた家の下敷きになって、何人か亡くなりました。あれで火でも出たら、家は茅ぶきなので、全滅だったことでしょうが、幸いなことに火は出ませんでした。

余震がひどかったので、村中みんなで龍華寺の竹やぶに避難しました。台風の時期でしたが、ありがたいことに雨が降らなかったので、竹やぶのなかに蚊帳をつつて、一カ月ほど過ごしたんです。年寄りたちは今でも、「天の神様がかわいそうに思って、雨を降らせなかったのだらう」といっていますよ。夜は真っ暗になるので、ロウソクをつけて、まるで、原始生活でしたね。バラックが建つまではこの竹やぶ生活が続きました。

龍華寺の井戸水をふだんから飲んでいたので、その井戸が枯れなかったので、水の心配はありませんでした。

食べものは、横須賀の海軍の鎮守府から兵隊が船できて、支給してくれました。食べものでうれしかったのは、乾パンとか、金米糖などの支給があったことです。食事はほとんど漬物ぐらいでしたから、みんな大喜びでした。家が農家でしたから、野菜はありましたが、どこの家もつぶれてしまっていて、かまどで煮炊きすることができなかつたんです。食べものの支給は助かりました。落ち着いて、ここで煮炊きができるようになってからは、もう海軍もこなくなりました。海軍だけでなく、地震で災害がなかった他の村からも救援にきてくれていたようです。

家族全員の無事がわかったのは半月後

姉は当時、横浜の女学校に行っていて、ここからは通えないので、西区の岡野町の叔母の家に下宿していました。ちょうど二ツ谷で酒問屋をやっていた祖父のところに、おこづかいをもらいに行つたとき地震にあったそうです。

トビロ

五十〜六十センチくらいの棒の先に、鉄の鉤をつけた道具。この鉤がトビロのくちばしに似ているため、この名前がつけられた。消防士が柱を引っ掛けて引き倒したり、物を引っ掛けて運ぶのに用いた。



蚊帳

蚊を防ぐために吊り下げて寝床を被う布。麻や木綿でつくられていた。四畳半や六畳の部屋全体を覆う大きなものもあった。



今のように高い建物が無いので、洲崎からも、横浜市内が燃えて、もうもうと煙が上がつているのが、よく見えました。

翌日、父と親戚の者が歩いて、横浜市内まで祖父と姉を探しに行つたのですが、道には死体がゴロゴロころがっているし、八幡橋やわたばしのあたりも、川のなかに火が入って、みんな焼け死んでいたそうです。現在の横浜プリンスホテルの上の山あたりから、大きな岩が落ちて来て、市電の通りにゴロゴロしていたという話も聞きました。

途中の被害がひどかったのです、横浜市内に着くまでに三、四日かかったようです。でも、とうとう祖父と姉は見つからなかったのです、父たちもあきらめて帰ってきました。もう死んだものと思つていたら、それから十日ぐらいたつて、ボロボロをまとつたようなかっこうになって二人とも帰ってきました。九月の半ばになって、やっと家族全員がそろつたわけです。

小学校がつぶれてしまったので、しばらく家にいましたが、先生から通知がきて、称名寺なまなせの境内で青空学校が再開されたので、弁当を持って通いました。板でつくつた椅子いすだけが残り、そこで授業をしました。

そのとき、先生が「これは、みんなが地震で困っているので、アメリカという国が送つてくれたものです」といって、子どもたちに、コンビーフ缶とか、ハム、ソーセージ、チョコレート、キャンディーなどを分けてくれたんです。アメリカという国がどこにあるかも知らなかつたし、田舎なので、そんなものは食べたこともありませんでした。それどころか、見るのも初めてでした。これが、食べてみるとおいしいんですよ。うれしかったですね。学校に行けば、おいしいお菓子をもらえるというので、みんな喜んで通いました。青空学校なので、雨が降ると休みになってしまうでしょう。本当にがっかりしました。この青空学校は、新しい校舎が建つまでですから、大正いっぱいぐらいいま

井戸

生活用水にする地下水を汲み上げるために地面を掘つたもの。ポンプを使って吸い上げる物が多かった。



鎮守府

明治以降、横須賀や呉、舞鶴などにおかれた海軍の機関。

金米糖

水砂糖を溶かした物に、小麦粉を混ぜ、かき回しながら熱してつくる菓子。小さな粒のまわりに小さい突起ができる。

流言飛語

根拠無く広まるうわさ。デマ。

で、つまり二年以上続きました。

子どもだから、これがどんな大きな地震か、よくわかりませんでした。あとで被害の状況や、朝鮮人が殺された話など聞いて、本当にこわくなりました。当時は、新聞、電話などはふうの家にはなかったので、東京も横浜も全滅したなどの情報は、みな兵隊から入りました。朝鮮人の暴動は、流言飛語だったというのも、兵隊から聞きました。

現在は、当時とくらべて、地震予知の技術が発達しているのですから、もつと費用をかけて、東海地区など一地域だけでなく、全般的に予知できるようにしてほしいですね。ある程度、予知できれば、対策をたてられますから。



方々から「助けてくれ」という悲鳴が

佐藤順平さん

磯子区
当時19歳

五百メートル歩くのに三時間もかかった

ドーンと空気が避けるような音がして、積んであった生糸かいとの箱がガタガタと落ちてきました。なにしろ、一箱四十キロもあるんです。

私がエレベーターのほうに向かったとたん床がバウンドするように上下して、崩れ落ちました。私がいたのは、三階の倉庫でした。建物は倒壊し崩れましたが、一番上の階にいたおかげで、建物の下敷きにならずにすんだわけです。一階と二階には百人以上の社員がいたはずで、方々から「助けてくれ」という悲鳴が耳に入りました。しかし、私にはどうすることもできず、とにかく外へはい出しました。

そこから五百メートルのところには横浜公園があり、私はそこへ向かったんです。路面のいたるところに亀裂かれつが生じ、とても歩くことができません。それでも行きつ戻りつ、なんとか公園にたどりつくまで三時間近くかかりました。

公園にはすでに大勢の人が避難してきていて、水道管が破裂し、水びたしになっていました。ふと見ると、公園に植わっている大木の上に若い人たちが鈴なりに登っています。「どうして木に登っているんですか」と私はそばにいた人に聞いてみました。「津波がくるというんでね。木の上にいれば安全だと、若い元気のいいのが登っている

かまど

煮炊きをするために土や石などでつくった台所の設備。下部に炊き口があり、そこで火を燃やし、上部に鍋や釜をのせて使用した。



市電

街路を走る電車。特に市営のものを市電と呼んだ。自動車が少なかった当時の、市民の重要な交通手段。横浜では昭和四十七年まで走っていた。



らしいですよ」とその男の人はいいました。なるほど、ちょうど今の横浜スタジアムの土手がじわじわと揺れている。これを見るとさすがに不安になりました。

どれくらいだったのでしょうか。東神奈川にいた友人がおにぎりを持ってきてくれました。「いやあ、どうもすまん。こんな夜中に遠いところから」と、私が感激して礼を述べると、「何いってるんだ。ポケちゃ困るよ」と、その友人はキョトンとしていったんです。実に鈍くかすんだ月が出ていて、時計も二時を指していました。しかし、私が夜の二時と思っていたのは、実は昼の二時だったのです。そして月だと思っていたのは太陽だったというわけです。それほど黒煙で覆われた空は灰色で、太陽はまるでかすんだ月のように黄ばんで見えたのです。

会社周辺で残ったのは二軒だけ

とにかく、私が助かったのは、奇跡のようなものだと思います。なにしろ、私が地震発生時にいた会社周辺で残っていたのはたったの二軒しかなかったのですから。

こうして九死に一生を得たものの、復興には時間がかかりました。私は勤め先の社長の家にとりあえず身を寄せていました。

十月になり寒くなってきたころ、「おい、八王子に行つて反物たものをもらつてきてくれな
いか。君は若いんだから」と社長からいわれました。依然、鉄道は不通の状態。私は横
浜から八王子まで線路をたどつて歩きました。片道だけで八時間かかりました。帰りは
反物をしょってきました。今から考えれば、自分でも信じられないことです。しかし若
かったですし、地震という異常事態に陥ったとき、人間には考えられない生命力が備わ
っていることも事実でしょう。

さて、こうした経験を生かし、私は現在住んでいる地区で地震時の訓練を常時おこな

っています。にぎりめしの炊き出しをしたり、すいとんをつくったり、町内会を組織し、大地震が起こった場合を想定して、きちんと役割分担して訓練を続けているんです。

地震対策はやはり地域の協力なしに効果は期待できません。また、区役所などの自治体との連携を密にして万全を期さねばならないでしょう。

たとえば区がいくら食料や水などを備えていても、私の経験から、果たしてそこまでたどりつけるかどうか疑問です。地割れが起きた場合、歩くことはきわめて困難です。だからこそ、自分の身近なところに必需品を保管しておくことが必要なんです。

異常時に出てくるのが 人間の本性

小川名 丁さん

旭区
当時21歳

家の前を通り過ぎる被災者

夏休みも終わり、二学期の始業式の日でした。教師をしていた私は子どもたちを帰し、職員室で先生方と夏休みの出来事などを話していました。故郷の山梨からもどってきた女性教師がもってきたぶどうを食べながら雑談に花を咲かせていたのです。「ドーン」と突然、突き上げるような揺れがきて、物が落ちる音や女の先生の悲鳴などを耳にしたと思うのですが、とにかく玄関に無我夢中で飛び出しました。気がついてみると、校庭と隣り合って建つ農家の石垣につかまって立っていました。土ほこりが立ち込め、

すいとん

小麦粉を水で練って団子大にした
実の入った汁。手軽につくれ、空
腹を満たすことができる。



傾いた農家やベしゃんこになった民家などが目に入ります。余震は続いており、生きた心地もありません。「おじいさん、出てこいよ」とつぶれた家の前で叫ぶ悲鳴に近い男の人の声がいまでも耳に残っています。

学校は高台にあり、黒煙のこもった空や街並みがながめられ、大きな地震がきたことがわかりました。しばらくすると、地震もやっと落ち着いたので、まさきに理科の実験室に足を運びました。理科の副主任を任ざれていましたから、化学薬品のこと気がなつたのです。爆発でも起こせば大変だと思いました。幸い、壊れた薬びんもなく無事でしたので、ほっとしたものです。

地震後、授業再開のメドも立たず、私はしばらく農業をしている実家に帰っておりました。そのころ、私の家の前を大勢の被災者たちがつらなつて通り過ぎて行きました。ほとんどの者が着のみ着のまま。おそらく何も食べてなかつたでしょう。けがをした人も多くいました。なにしろあまり多人数ですから、援助の手をさしのべたくても、それができない。とても歯がゆく、情けなく思いました。

あるとき、被災者のなかに交じっていた外人が私のところに近づいてきました。「ハロー」とほこりにまみれた金髪の青年が、私に笑顔を向けてきました。「ハロー」と私も言葉を返しました。「ジャガイモを一つくれませんか。そうしたら生でかじってみせますよ」。こうたどたどしい日本語なのです。なかなか愛嬌あいせうのある表情をして、大きなジェスチャーをまじえて、一生懸命にいうものだから、私は家にもどつて特別大きなやつを持ってきて、手渡したんです。ところがこの青年、じゃがいもを受け取り、「どうもありがとう」というと、すばやくズボンのポケットにそれをしまい込み、また被災者のなかにもどつていきました。なぜかその外国人のことは強く印象に残っています。なかなかの機転です。あんな状況にあつて、日本人にはまねのできないユーモアが

あります。一杯くわされたけれど、むしろ愉快的な気持ちでしたものです。

とにかく、地震で痛感したことは、異常時には人間の本性が出てくるということです。私の父が役所に勤めておりまして、届いた救援物資を配給したのですが、焼け出された人を対象にしているにもかかわらず、災害にあつていない裕福な人たちがこれを受けているんです。若かったからよけい人間の醜さを感じ、腹が立ちました。

地震に備えて物を準備しておくことの大切さはいうまでもありませんが、心の準備も忘れないことです。大地震を経験した私としてはこの点を特に強調しておきたいのです。

それからもう一つ。地震のような災害時には隣近所の助け合いがとても大切なことだと思います。現在のように隣近所の顔も知らないということでは、いざ、ことが起こったときに非常に困ったことになるだろうと心配になります。ですから、町内会組織などをつくって、協力して地震に備えることが、現在最も必要なことだと私は考えるのです。食料や水、その他の災害時の必需品も共同で準備しておくことが、いざ非常時になったときに必ず役に立ち、被害を少なくする効果的方法だと確信を持っています。

「助けて！・お金はいくらでも出すから」と
下敷きになつて叫ぶ人も

石川鉦市さん

港北区
当時16歳

荷台に四ダースのミルクが入ったケースを積み、自転車で配達に出かけていました。神田の万世橋にさしかかったとき、グラツときて、自転車もろとも地面に放り出されたんです。わけがわからない。自転車で乗ることの上手な私は、両手を放してもころんだことなどなかったのに。立ち上がって、上を見てびっくりしました。市電の架線が切断され、垂れ下がって私の自転車に当たり、ショートしてパチパチと火花を上げているじやありませんか。自転車をあわてて引き起こし、民家のほうへ逃げ場を求めましたが、逃げ込もうとしたとたん、目の前のでんぶら屋から火が吹き上がり、背後にも火が燃えていて、私は逃げ場を失いました。とにかく必死で火のないほうへ自転車を捨てて逃げました。あちこちで激しい爆発音が起こり、建物は傾き、倒壊し、黒煙に包まれ、町の様相は一変してしまいました。どこをどうやってすり抜けたのやら、やっと火の手から逃げました。

私は奉公に出ている日本橋の酒問屋にもどりました。押し合いへし合いの大混乱で、日本橋を渡るのにずいぶん時間がかかりました。店はかなり傾いていましたが、火はまだそこまでは達していませんでした。「おーい、早く逃げろ。ぼやぼやしてたら焼け死ぬぞ」。主人や小僧さんたちの姿は見えませんが、残っていた一番番頭に声をかけられました。私とその言葉に従って行こうとすると、「食料を持っていけ。そうしないと大変なことになるぞ」と忠告され、あわてて荷車にミルクや缶詰などを積み込み、店を後にしました。

追ってくる火の手を背に、人々の群にもまれながら私は荷車を引いて進みました。途中馬が荷車ごとひっくりかえり、道をふさいでいたので、私もなかに入って数人の男と力をあわせ、それを脇にどかせました。人々はそれぞれ勝手に逃げていきましたが、多くは新大橋に向かったようです。私は最初から宮城(現皇居)に逃げるつもりでした。

奉公

商家などに住み込んで働くこと。年少の者は丁稚と呼ばれ、年少時に奉公することを丁稚奉公といつた。

荷車

荷物を運ぶための四輪車。人や馬が引いた。



広くて建物もないからと思っただけです。新大橋方面に向かった人の多くが焼死したことを思えば、まだ十八歳だった私の判断としては上出来だったと思います。

宮城に着いたときは日が暮れかけていました。ずいぶん時間がかかったものです。とりあえず、シートをテント代わりにして、松の木の間にも張りました。宮城は比較的避難してきた人が少なかったように思います。それでも私は「食料を見つけれられないようにしなければ……」とまず考えました。食料を持っていることが知れたら、何をされるかわからないと思っただからです。

テントに入り、どれくらいたった頃でしょうか。老夫婦がきて、「テントのなかに入れてほしい」と頼まれました。銀座で花屋をしているというなかなか品のいい夫婦だったので、かわいそうで、断ることができず、なかに入れました。

さて、困ったのは、腹がへってきて、何か食べようと思ったときです。まさか一人で食べるわけにもいかない。「絶対いわないでくださいね。そうすれば食べものをあげますからね」と、私が食料を持っていることを他言しないことを条件に、食べものを提供しました。二人ともミルクがいいといって飲んだように記憶しています。

こうして、三人で夜を過ごすうち、今度は若い娘さんがきました。「助けてください」と哀願され、たった一人で、年も私と同じくらいだったので断れず、彼女もテントに入れました。何も食べていないというので、また、「絶対にいわないでくださいね」と念を押して、木立の繁みにかくしている荷車から食料をとってきて食べさせてあげました。この娘さんは、芸者になる前とかで、なかなか器量よしでした。

しかし、三日目になって軍隊がきて、撤去命令が出されたので、私は二重橋から芝公園近くの松林に避難して、そこで玄米のおにぎりをもらえるようになりました。

ここで野宿している間、私はむしろように実家に帰りたくなくて、九月六日、東海道の

線路を歩いて東神奈川に向かいました。あたりは暴動などに備えて警戒中で、手ぬぐいの鉢巻はちまきと細い鉄棒を一本持っていたことを覚えています。

まる一日かかって、実家に着き、傾いているが焼けずに残っている家を見たときは、目を疑いました。東京のうわさでは横浜が全滅だと聞かされていたからです。

父も母、弟も無事でした。私を見ると「幽霊じゃないか」といって驚いてました。それにしても、このときほどうれしかったことはありませんでした。

ところが、家では落ち着いて寝ることはできませんでした。食料も底をついてきました。私はその夜から、海岸線の線路の上に戸板を敷いて眠ることになったのですが、落ち着くと空腹がおそってきて、東横浜貨物駅にあった貨物から南京豆と塩鮭を盗み出して生き長らえました。

こうやって生々しい体験をふりかえると、さまざま記憶がよみがえってきます。

避難の最中、つぶされた家の間から「助けて！お金はいくらでも出すから」と下敷きになりながら、手だけ出して叫んでいた中年の女の人。はさまれた手には、お札がしっかりと握られていました。お金はともかく、助けようと思っても、一人、二人の人間の力ではどうなるものでもありません。また、死体の指を切って指輪をはずしている光景も、どす黒く記憶に残っています。

最後に災害のなから得た教訓。

- 一、食料の確保。水がなかったらどうにもならないことを忘れるな。
- 二、火災予防、ガスのこわさ、薬品の取り扱いに注意すること。
- 三、女性の服装、混乱のなかの犯罪に気をつけること。
- 四、常に正しい情報を得て行動すること。

屋根瓦で頭を打ち 意識不明に

世界があつという間に変わつた

その一日は照り降りの日、おてんとうさまが照っているにもかかわらず、雨が降るといふ妙な日でした。

地震のときは、母と妹は食卓についていて、私は食卓に向かって座敷を歩いていました。その部屋はたんすが並んでいて、取っ手が全部金具でした。昔は薬屋が薬箱を天秤棒でかつぎ、金具をガタガタ鳴らして呼び歩くのを定斎屋ていさいやといつたんですが、たんすの金具がガタガタ鳴つたときに、その定斎屋を思い出して、揺れている最中なのになんたかおかしくなりましたね。

家族が早くこつちへいらつしやいというのに、私は縁側のほうに行つて、すべつたのか、庭に落ちてしまつたんです。その瞬間、二階の屋根瓦が落ちてきて頭を打ち、苦しさも何も感じないうちに、意識不明に陥りました。だけど奇妙なことに、ニワトリが悲鳴を上げて、倒れている私の頭をけとばしながら、背中の上を走つて行つただけは、覚えてるんです。

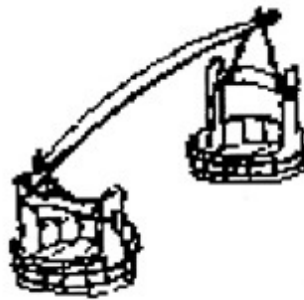
瓦に埋まっている私を家族が助け出してきて、気がついたら、家の塀はないし、前の家は二階建てが一階だけになって傾いている。うちは山の上ですから、下の本町あたりの倒れた家から煙がもくもくと上がっているのが見えるし、なんだか一瞬のうちに世

金子富男さん

栄区
当時8歳

天秤棒

天秤ばかりのように両端に荷物をつけ、中央をかつぎ、重心をとりながら荷物を運ぶための棒。



定斎屋

主に夏の夏バテの薬を売り歩いた薬屋。天秤棒に小さな引き出しのたくさんついた箱をつけて、売り荷を運んだ。引き出しの金具が歩くたびにガチャガチャと鳴り、それが売り声の代わりになった。



界が変わってしまったように感じました。近所の人などは「なむあみだぶつ」を唱えて
いるんです。もうこの世が終わるのかと思いましたね。

家は伊勢山の皇大神宮のそばでしたが、その続きのところは横浜正金銀行の支店長の
社宅があり、その上のほうがかなり広い芝生になっていて、まわりに梅の木がたくさ
んあるのを知っていたので、身のまわりのものを持って、そこへ避難することにしまし
た。前の家のおばあさんが家をつぶされて少しけがをしていたので、一緒に行きました。
けがをしていた私とおばあさんを置いて、家族は家に荷物をとりにもどって行きまし
た。

近所の人も、みんなそこに避難してきましたが、そのうちに火の手があらからもち
ちらからも上がってきて、風が渦をまいてくるんです。立ち木は燃えてくるし、火のつ
いたものは飛んでくるしで、じっとしていなさいといわれたけれど、「どうしよう」と
おばあさんとうろろしていました。

そうしたら、母たちと会い、会社から帰った父とも一緒になれて、みんなで崖みたい
なところを滑り落ちながら、掃部山に逃げたんです。そこで一晩過ごしたんですが、高
台ですから、横浜の街並みが燃えているのがよく見えました。

市電は黒こげ、死体が散乱する光景に出くわす

翌朝になると、神奈川の御殿町の母の実家から、心配して使いの者が迎えに来てくれ
たので、御殿町に移りました。幸いなことに、御殿町は焼けなかったんですよ。うちは
結局、焼けました。

はき物をどうしたのか覚えがないんですが、私はいつのまにか裸足になっていて、足
に釘を刺してしまっていました。痛いなんて感じませんでしたね。

母の実家へ行くのに、横浜駅あたりから青木橋を通って行ったんですが、途中、市電が真っ黒にこげていたし、焼かれたままの死体があちこちにありました。まだ、残り火が、あっちでボーボー、こっちでボーボー、燃えていましたよ。

御殿町に移ってから、余震がありました。こりたのですぐには外に飛び出さず、柱のそばとか、机の下にいました。電線とか木などが揺れるのを見て、また大きくなるのかと不安でした。余震がくると、近くの権現様ごんげんさまというお寺の竹やぶに避難しましたが、お墓に女の人の死体は何日も置いてあるので、臭いがひどくて、息をつめながら通ったのを、今でも思い出します。

あと、印象に残っているのは、朝鮮人が井戸に毒を入れたという話でした。たまたま、十人ぐらいの人が、火消しのとび口を人の体に突き刺して連行しているのを見ました。悪いことをしたかどうかもわからないのに、朝鮮人だということ、そんなことをする人もいることを知って、がく然としました。ただただびっくりしました。そのことは気持ちのなかに、あとあとまで残りましたね。

軍隊が出てきて、いちばんありがたかったのは、妹がすごい熱を出して、そのままでは死ぬところだったのを、軍医さんが手当てをしてくれて助かったことです。

母の実家は町内会長をするような大きな家でしたから、全国から慰問袋いもんぶくろがたくさんきました。配給米なども、一時預かりました。食べ物に関しては、恵まれていたらしくて、あまりつらかった記憶がないんです。ただ、慰問袋のなかに衣類と一緒にノートなどが入っていて、それをもらうのが楽しみだったのを覚えています。

地震がきたら、建物とか地盤を考えて、飛び出さずか飛び出さないか判断すべきだと思います。ただ、ドアを開けておくことは必要だと思えます。今地震に備えて用意しているのは、缶詰の水ぐらいです。

慰問袋

震災見舞いの食料品や日用品を災害地に送るため、布の袋に入れたもの。



朝鮮人約百名を 日本人の襲撃から守る

川畑孝蔵さん

鶴見区
当時23歳

朝鮮人が井戸に毒を流したというデマが飛びかう

私は鹿児島の桜島の噴火で命からがら助かって、ちょうど震災の年の三月に、鹿児島から一人出てきたんです。鶴見の友だちの家に住んで、カスケードビール工場で働いていました。

震災のあった九月一日は、鶴見川に浮かべた約五トン入りのビールのタンクの上に乗って、さび落としをしていました。タンクはビールを発酵させるためのもので、直径十メートルぐらいありました。

揺れたとたんに、タンクの上から川のなかにまさかささまに落ちこみました。何とか地面に上がってから見ると、みんな立っていられずはっていました。大きな地震だとは思いましたが、桜島の大噴火を経験して災害慣れしていたためか、たいして驚きませんでした。

当時、鶴見は工場建設が相次いでいたため、労働者の朝鮮人がたくさん集まっていた。朝鮮人のほかに、日本全国から労働者がたくさん集まってきたていてね。この辺には、当時会社は浅野造船所と旭硝子の二つがあっただけで、あとは一面の原っぱだったんです。旭硝子の社宅は百軒長屋でしたが、それが全部横倒しになりました。市

百軒長屋
何軒も長くつながった家屋。集合
住宅。



場から水道を引いていましたが、その水道も壊れてしまいました。

震災のあつた当日に、すぐ戒厳令が出ました。流言飛語がひどく、とくに朝鮮人が井戸に毒を流したというわさが広まりましてね。このままでは朝鮮人が襲われるから、全員避難させるようにと、鶴見の警察署長から、労働者の親方に指示がありました。この親方は朝鮮人をたくさん使っていたんです。親方からいわれて、私も避難させるのを手伝いました。

扇島に避難して助かった

朝鮮人家族たち

朝鮮人は、家族も含めて百名ぐらい。大部分がまだ独り者で、みんな飯場の寮住まいでした。仕事先から寮にもどってきた朝鮮人を急いで集めて、三時ごろから全員一緒に扇島に向かいました。家財道具を持つ暇もなく、五十人乗りの船二隻に分乗して扇島に避難したんです。扇島なら、船でこないと襲えませんかからね。

その日から毎日、食料は親方の子分が、麦やサツマイモを船に積んで扇島に運びました。



しかし、その船を日本人が襲撃したり、妨害したりするんです。そこで、私と、ほかに若い者四人が見張りをしました。こん棒を持って、夜も警戒しました。朝鮮人たちはみな、おびえて震えて、眠るどころではありませんでした。

四日たつてから、井戸に毒を入れたという話はデマだとわかり、朝鮮人を襲う人もいなくなつたので、朝鮮人はやつと寮にもどれました。鶴見は流言飛語への対応が早かつたから、朝鮮人は助かりましたが、川崎のほうでは、たくさんの朝鮮人が殺されたようです。こういうときのデマというのは、本当に恐ろしいものだと感じました。私はのちに朝鮮連盟の顧問を務めたのですが、それもこのとき助けた縁で、ずっと朝鮮の人たちと仲良くしてきたからですね。

町では、あちからもこつちからも火が出るし、土橋の鶴見橋も落ちてしまいました。みんな大騒ぎで、あちちへ行く人もあれば、こつちへくる人もある。だれもどちらへ逃げたらいいのかわからないといった混乱状態でした。鶴見の大本山・総持寺に逃げた人が多かつたようです。

荷物は、位牌いはいを持っている人がいちばん多かつたように思います。米を持っている人なんかいませんでしたが、水筒を持っている人は何人かいました。

飯場

工事仕事に従事する労働者が現場の近くに住むための合宿所。

位牌

死んだ人の俗名や戒名を書いた木製のタテのようなもの。家族のものは各家庭の仏壇に安置した。



線路づたいに八時間 東京から歩いて 戸塚の家にもどる

河原利助さん

戸塚区
当時21歳

道路の地割れにあつという間に飲み込まれた消防車

昼に、会社近くの東京・新橋の高架下の食堂に入つて、ごはんを一口食べたとたんに、ガタガタツときたんです。それで表に飛び出しました。でも、あのへんは、屋根瓦がガタガタ落ちるぐらいだったんです。

だから、「たいしたことはないから、明日になれば家に帰れるだろう」と思って、その日は家に帰らなかつたんですよ。皇居前広場に仲間と火事見物に行ったら、帝国劇場がボンボン燃えている。そこへ消防自動車きたら、道路の地割れに、あつという間に飲み込まれてしまった。深い地割れでしたね。

それで、すぐに引き返し、会社の重要書類を金庫から出して箱に入れ、大八車に積んで芝公園まで運んだんです。公園はまだ人が少なかつたので、車の番に一人だけ残して、私と同僚らは会社のほうに、どんな具合か見にもどつたんですよ。

しかし、三時ごろから、だんだん燃えてきて、夜七時、八時ごろになったら、まわりがひどく燃えだしました。帝劇から東京駅前あたりが盛んに焼けていたから、その火がきて、芝公園の広い通りが煙でいっぱいになってしまい、道路も火から逃げる人であふ

大八車

人が引いて使用する大きな二輪の荷車。大八は代八とも書いて八人の仕事をするという意味。



れ、身動きできない状態になってしまったんです。

煙がサーッとくると、後のほうの人は、煙を吸ってバタバタ倒れていく。でも、それを助けに行く人なんかいませんよ。倒れた人はみんな焼け死んでしまったんでしょうね。

私は芝公園の五重塔の下で夜を明かしたのですけれど、軍隊が出動したからか、割合に静かでした。食べものは、夜中に軍隊が車の上から乾麺^{かんめん}を投げました。

当時は汐留^{しおどめ}駅という貨物専門の駅がありましたね。そこではマッチ、火薬、ガスなどの危険品扱い日が決まっています、たまたまその日が危険品の扱い日だったんで、一つのホームがずらつと、そういうものばかりだったんです。そのガスボンベに火がついて、夜になると、次々に破裂していました。

翌日の朝七時半ごろ、自宅に帰るために線路を歩きはじめたんですが、田町では、慶応義塾前がひどく燃えていました。おなかがすいたなと思っていたら、大井まできたときにお菓子屋があったので、せんべいを五十銭分買って、それをかじりながら歩き続けました。

蒲田^{かまた}では、子どもを一人おぶって、もう一人の子の手を引いて歩いている若い奥さんに会いました。横浜から歩いてきたそうですが、親子とも、胸まで泥まみれになっているんです。横浜公園の水道管が破裂して、水を浴びたから、焼け死なないで助かったんだといってました。私が、持っていたせんべいをあげたら、親子で大喜びしてね。何も食べていなかったんでしょね。

六郷まできたら、橋なんか落ちてしまっなくなってしまいました。代わりにはしがが並べてあるんですよ。

そういうところは、枕木の上を渡って行きました。レールが曲がったり、下の地盤が落ちてしまった線路の上を、ぞろぞろ歩いていくんですが、みんな着のみ着のまままで、

乾麺

小さな四角形の乾パンのこと。



手荷物ぐらいしか持っていないませんでしたね。

横浜駅のホームにはそこらじゅうに焼死体が

十二時すぎに横浜駅に着いたんですが、ひどいものでした。そこらじゅうに、焼死体がゴロゴロしているんです。駅のホームなんか、見られたものじゃなかったですね。それに、人が竹やりで刺されているのを見ました。あのとき、朝鮮人が騒ぎを起こしたというデマ宣伝がありましたからね。

戸塚から矢部町のあたりまできたら、建っている家が一軒もない。全部つぶれてしまったんです。やっと自宅に着いたのは、三時ごろでした。家は板ぶきの二階屋だったんですが、一階がつぶれて、二階部分が一階の座敷になっていました。

女房の話では、家を飛び出してから庭のモチの木まで、立っていけなくて、四つんばいになって、あっちへコロコロ、こっちへコロコロころがりながらたどり着き、その木にかじりついていたそうです。

近所に住んでいた私の友達の家では、お母さんが落ちてきた梁にはさまれて、「助けて」と叫んでいたそうだけど、みんな自分が逃げるのに夢中でね。しばらくしてもどつてみたら、もう亡くなっていたそうです。

二、三日は、軒先に置いてあったテントを張って、そのなかで過ごしました。水は近所の井戸がだいじょうぶだったので、そこへもらいに行きました。自宅がまんじゅう屋で、メリケン粉もち米もあったので、食べものには困りませんでしたよ。

夜になると、朝鮮人騒ぎがあったので、大変でした。刀でもなんでも、護身用のものを持って、ない人は竹やりをつくって持っていました。

一日の夜から、道行く人が「何かありませんか」と店先に買いに来るので、つぶれた

家から、いろいろ引っぱり出してくると、すぐ売れて、せんべいなどは、翌日にはなくなつたそうです。四日ぐらいたつてから、たい焼きをつくつて売りはじめたらいくらでも売れましたよ。

一カ月ぐらいたつてから、砂利を運ぶトロッコがやっと走りはじめて、それで震災後、はじめて会社に行きました。

地震がまたあつたとしても、何も持ち出せないでしょう。あのときも、持ち出そうとした人はつぶされてしまいましたからね。避難袋などを用意することは大事ですが、それを持って逃げられる人が、どれだけいるでしょうかね。

人々がパニック状態にあつたとき、うわさは すご味をもつて広まつた

積み上げられた製品が、なだれのように落ちてきた

当時私は、海に近い東京製線という会社で働いてたんです。ロシア向けにつくつた電線が売れ残つて、工場内には製品が山積みとなつていた。庶務係だった私は、カスリの着物に袴はかまというかつこうで、たまたま石造りの倉庫に入つて在庫調査をやつてました。

稲葉佐吉さん

港北区
当時15歳

トロッコ

線路を利用し、工事用の資材を運ぶために使う小型の荷車。



カスリ

とところどころかすつたような模様
のついた布。織つたものと染めた
ものがある。



倉庫の二階で調べをすませ、ハシゴを降りたとたんグラツときて、足をすくわれちゃった。無我夢中というか、必死ではいましてね。とにかく石造りの倉庫を抜け出し、次に木造の倉庫を通り抜けねばならなかった。その倉庫には、中央の通路をはさんだ棚にいっぱい電線が積んであり、左右からなだれのように崩れ落ちてくるんですよ。しかたないから、棚の下をはつてくぐり抜けてね。外に出るために、やむなく「突撃」をやったわけですが、地震のときは、ものが積んである場所に近づいちゃいけません。

いかだへ逃れたものの、津波を恐れて山へ

ようやく戸外に脱出したものの、大きな余震が続けざまに発生して、足もとから二、三メートル先の地面がガバツと開きましてね。地割れですよ。思わず立ちすくんでしまいました。そういつた地割れを避けて工場の門を出ましたが、あいかわらず激しい揺れが続き、立っているのが容易でなかった。道ばたの木製の電柱に抱きつきましたけど、その電柱もグラグラ揺れましたね。そうこうするうち、「おい、いかだの上に逃げる」と声がして、海を利用した貯木場へたどりついたんです。水の上だったら、揺れもないし、地割れの危険もないと工場の人は考えたようです。

いかだに飛び移ってやれやれと思ったのもつかのま、こんどはだれかが「津波がくるかもしれない」と叫びました。ふだんなら、頭のなかで地震と津波がピタツと一致するのにも、気が動転していた私は、そんなことは考えもしなかった。「いかだに逃げる」という声が耳に入った瞬間、なんの判断もないまま、貯木場へと走っていたわけです。大地震などが発生し、頭が混乱しているときは、他人のちよつとした言動にも左右されやすいから、特に気をつけなくちゃいけません。あくまでも自分の目で状況を見きわめ、冷静に行動することが大切じゃないでしょうか。

いかだを捨て、津波の心配のないところへ行こうと、浦島山めがけて走りました。結局そこで野宿するはめになりましたが、会社で庶務係だった私は、上司から手さげ金庫を託されていました。「おい、稲葉君、こんな状態じゃ銀行に入金どころじゃない。君、一つ頼んだぞ」とね。なかに大金が入っており、野宿しながら、襲われたり盗まれたら大変だと眠るところじゃありませんでした。

私が逃げた浦島山には、たくさんの人が津波を心配し、あるいは火災を避けて押し寄せていました。みんな野宿をしたわけですが、地肌の露出した山で一番問題となったのは飲み水です。食べものは一日や二日くらいなくても人間どうにかありますが、のどの渇きだけはがまんできません。このため、ふもとの掘り井戸からみんなが手桶でかわるがわる水を運んで、大事に使いました。

ところが井戸に毒を投げ込むやつがいるらしいと、どこからともなくうわさが流れてきて、びっくりするやらこわくなるやら、まったく落ち着けませんでした。パニック状態に陥ると、いつの場合もなんらかのうわさがパッと広まるもので、しかも一人ひとりの神経がピリピリしているから、うわさの内容がいちだとすご味をもちます。ああいうときは、うわさの内容と自分の置かれた状況をよく見きわめ、できるだけ冷静になることが大切ですね。

はじめの揺れがきて倉庫から命からがら脱出し、私は浦島山へと逃げたわけですが、両親はその間どうしていたかといいますと、漁師だった父親は小船に乗って漁に出ていたんです。大震災で横浜の海はいくらか水位が上がったようですけど、津波というほどじゃなかった。もし本格的な津波でも発生していたら、とても助からなかったと思います。一方母親は、まもなく昼どきだったので、長屋の台所でてんぶらを揚げていたそうです。七輪に炭を起こして惣菜をつくっていたのです。グラツときた瞬間、たまたま

手桶
把手がついた木の桶。



七輪
土の素焼きの炊事用コンロ。木炭や練炭を燃料とした。熱効率がよく、たいていの家庭で使われていた。



近くに座布団があり、とっさにそれで油鍋を覆ったと、あとで話していました。炊事に油を使っているところに地震が起きると、火災をエスカレートさせるので、特に冷静にならなくちゃいけません。油鍋の上に座布団をかぶせるとか、手近に青菜があつたらそれで覆うとか、昔の人は常日頃教えられていたんでしようね。

父は焼け跡から祖父母の骨を拾い出した

そんな両親が二日目になって浦島山へ逃れてきて、私たち親子は十日ばかり山で一緒に過ごしたのです。当時、祖父母は桜木町でんぷら屋をやっている、地震発生から四日目におやじが心配して見に行つたところ、家はつぶれて全焼してたんです。もちろん、二人は助からなかった。親父は焼け跡から祖父母の骨を拾い出し、それを抱えて帰ってきたのです。

熱い空気を吸い込んで 窒息死する人が多かった

矢作親治さん

保土ヶ谷区
当時15歳

横浜公園の大きな水たまりに逃げ、飛んでくる火の粉から身を守った

高等小学校を卒業して、中区の弁天通りの輸出入商に勤めてました。当時は十五歳。育ち盛りですから、おなががすくでしょ、早く食事に行きたくて、ちょうどその時刻は

店先にいたんです。店から出ようとしたのと、揺れで出されたのと両方でしょうね。気がついたら店の前にあった大八車にしがみついていたわけです。はがれた壁土などで土煙がモウモウと立っていて、前が見えないほどでした。上を見たら、太陽が真っ赤に見えたのを覚えています。店はベシヤンコにつぶれて、奥に女主人と番頭さんがいたんですけれど、二人とも死にました。私は運が良かったんですね。

そのうちに余震がきました。それがまたすごかったんです。こわいし、どこにも行くところがないから、つぶれた店の屋根に登って、様子を見ていたわけです。そうしたら一時間ぐらいたって、近くで火が出た。「危ないから、公園に逃げろ」と、だれかがいうわけです。まだ子どもですから、大人の後にくっついて行きました。つぶれた家が倒れたりしているから、道路は一人か二人しか通れなくなっていました。みんな先を争って逃げましたよ。なかには道路がまったくふさがれているところもあるから、そういうところは上によじ登ってね。それでそこをやっと出て、横浜公園に逃げて行ったわけですよ。私はスリッパをはいてたんですが、いつのまにか脱げちゃって、裸足。ひどい目にありましたよ。

なんとか公園にたどり着いて、野球場のそばに噴水があるでしょ、あそこに避難しました。公園に逃げてからが大変なんです。まわりは火事だから、火の粉がどんどん飛んできて、着ているものに火がつく。横浜公園には、野毛の貯水場からくる太い水道管があつて、それが破裂して、大きな水たまりができていました。膝ぐらいいまで水がありましたよ。私はそこにいたから助かったわけです。あとから公園に入ってきた人は火にあぶられて、バタバタ倒れていくんです。熱い空気がプアーとくるでしょ、その空気を吸ったら、もうだめなんです。窒息死ですね。やけどをしなくても死んでしまうんです。

夜中になって軍隊がきました。どこから、どうやってきたのかわからないけれど、馬

に乗ってきて、「安心しろ」と。それでみなひと安心したんです。だけど、まわりは火ですから、外に出られないんです。のどが渇くから、なんとか出たいわけです。すると、大人が公園から出ていくんですよ。今の地方裁判所の近辺は焼けなかったから、そのあたりまでは行けたんです。日本大通りを海のほうへ行くと、三井物産の四階建てのビルがありました。今でもありますが、ここへみんな行くんです。何だろうと思ってくついで行ったら、そこに井戸があったのです。夜中の二時か三時ごろでしたかね。あの水のおいしさは今でも忘れることができません。

翌朝、千代崎町の実家にもどろうと思ったんですが、そっちの方角は火事で行けないので、小港の親戚の家に行ったんです。その途中、海岸通りを通ったときに、自動車のなかで運転手と外人が死んでましたよ。やけどもない、きれいなものです。おそらく火であおられて窒息したんでしょう。親戚の家でおむすびをこちそうになって、その後、南区の中村町に姉の嫁ぎ先があったので、そこまで歩いて行きました。

姉のところへ行ったら両親の居所もわかったんですよ。山手に山手公園という小さな公園があるんですが、そこにいるということでした。親父が知らせてきたらしいんです。姉のところは一晩泊ってから、そこに行きました。うちは家族全員が勤め人で、親父は山手の外人の家のコック、お袋はやはり山手の代官坂にある会社に勤めてました。山手は案外焼けなかったんですね。お袋の会社の建物はつぶれたんですが、幸い腰を打った程度ですんで、親父がおぶって公園まで連れてきたそうです。すぐ上の姉は山下町の弁護士事務所に勤めてましたが、やはり無事だということがわかりました。

うちの親父は変わってまして、震災から二週間ぐらいたってから、私を連れて東京に行きました。被服廠ひやくしやうや吉原など、とくに被害がひどかったところを見せて、地震のこわさを教えようというわけです。桜木町から新橋まで電車に乗って、それから両国の被

服廠まで歩いて行っただけです。死体が山のよう
に積んでありましたよ。臭くてね。でも、親父
は「これをよく見ておけ」といいました。吉
原に行ったら、池のなかに死骸がいっぱいあり
ました。苦しいもんだから飛び込んだんでしょ
う。人間が焼けて水に浸かると体が倍ぐらいい
なっちゃう。足なんか馬みたいになるんです。
すごかったですよ。

前日には横浜港からイワシの 大群が川を上る異変が

いざ地震が起きたらどうするか。まず、火を
使っていたら消すこと。そして必ずはきものを
はく。サンダルはだめですよ。脱げちゃいます
からね。それから水。水さえあれば、一日二日
食べなくても平気ですよ。帽子をかぶることも
大切ですね。火の粉が飛んできますから。

もう一つ大事なことは、地震の予知。地震が
発生するときは、必ず前兆があるんですよ。震
災のときもありました。震災の前の年に横浜で
かなり大きな地震があつて、中華街の広東料理



店がつぶれて死人が出ているんです。これが一つ。もう一つは、震災の前日の夕方に、横浜港からイワシの大群が川を上ってきたんです。水が見えないくらいで、手ですくえる。なかにはザルですくって、夕飯のおかずにした人もいるくらいです。腹を上にして、全部死んじゃいましたけどね。東京湾にイワシはいるけど、川を上ってくることはない。「不思議なことがあるもんだな」と大人たちは話してましたが、異常現象ですよ。「これはおかしい。何か起きるな」と、朝のうちにでも気がついていたら、被害の程度はかなり違っていたと思います。

草ぶき屋根のひさしが 地へ着くかと 思うほどの揺れ

岩崎肇さん

瀬谷区
当時9歳

半年くらいはどんなに寒くても家のなかでは眠らなかつた

当時は十三歳くらいだったからよく憶えています。ちょうどお昼ごはんを食べはじめたところだったんです。そうしたらゴォーッとという地鳴りがして揺れはじめただけで、最初は確かに上下動だったよ。上下にずいぶん揺れたね。裏庭に飛び出して大きな樫かしの

木にしがみついたんだけど、それから先は動けないんだ。すごい揺れでね。子どものほうがバランスをとるのがうまいんだけどね。

目の見えないひいおじいさんがいてね。みんなが「はやく外に出ろ、出ろ」というんだけど出るに出不れない、助けにもいけない、あのときはほんとに長く感じたよ。草ぶきの屋根だったけど、まるでひしが地へ着くかと思うほど揺れたね。よくつぶれなかつたと思うよ。地震が治まってみると蔵の壁は落ちて心棒しんぼうだけ、養蚕室はつぶれて母屋は傾いていた。それ以来どんな小さな地震でも目がさめて外に飛び出たもんだ。二十五年ほどそうだったね。それまでは「地震」なんてもんは知らなかったよ。あんな恐ろしい思いをしたことはまずなかったね。

瀬谷では倒壊した家が多かったけど、死人は出なかったんだよね。火災も起きなかった。ただ一人横浜へ行っていた人が行方不明になったね。みんな農家だから食料や水に困るということもなかったし、かえって被害のひどい地域に義援金を九百四十八円贈ったというので表彰されたくらいだね。

あのときは地震に加えて朝鮮人騒ぎがすごかったんだ。東京、横浜のほうは煙が真っ黒く見えるし、本当にものものしかったねえ。当時は小田急も相鉄もない、テレビはもちろん新聞もない。ただ歩いていくだけ。この辺は田舎だからさ。保土ヶ谷あたりは家もなかったしね。今の新市街は農村で、被害も少なかったんじゃないかな。みんな生まれた土地で働いているから、横浜が焼けてもあんまり関係ないんだよね。ただ、焼け出された親戚が縁を頼って田舎にくるわけだ。だから、町の子がずいぶん転校してきてたよ。あのあと一年くらいは村の人口が増えたね。

子どもの生活も大きな影響を受けましたよ。おそらくこの家でも半年くらいは家のなかでは寝られなかった、どんなに寒くてもね。秋冬だよ、寒かったねえ。起きたら露

養蚕室

絹糸の原料となる蚕の繭をつくらせるための部屋。



でびしょぬれさ。これは特別な人かどうか、地震におびえちゃって、三、四年も外に寝てた人がいたんだよ。食べものや水は田舎のことだからありました。水は井戸なんだけど出なくなっただってことはないですね。不思議だね、あれほどの地震で地盤によく影響が出なかつたもんだ。外国からはずいぶん援助があつたんだよ。アメリカから粉ミルクがきたね。洋服もあつたんだけど外国人サイズだから大きくて、われわれが着たら外套がいのうになつちやつた。

そのころは、小作だつたりして、どこでもぎりぎりの生活でしょ。ぎりぎりの生活に慣れてるから強かつたんだね。豊かな生活に慣れてたらこれはえらいことになつちやう。子どもたちは、こままわしとか、めんこ、はねつき、まりつきなんかして遊んでたね。たいがい自分でつくるんだよ。みんな着物を着て、はきものは、たいがいぞうり。竹の皮ぞうりが最高だつたけど、買えない家ではわらぞうりを自分でつくつたね。雪でも降ろうもんなら、足袋を懐に入れて学校へ裸足でふつとんで行くんだよ。着いてから足袋をはくとあつたかくなつてゐるんだ。そんな生活をしてるから、今の子どもなんかてんで話にならないよ。

今なら何に気をつけるかつて？ あの当時浅草に十二階建ての建物があつたが、地震で真ん中から折れちやつたんだよな。今は高層ビルが増えて、理屈ではだいじょうぶだつていうことになつてゐるけど、なつてみなきやわからないことが多いからね。そんな生やさしいものじゃないんだから、あの揺れ方は。高い建物には住みたくないね。火事を出さないことが一番大事だけど、あの揺れではどうかなあ。身一つが外に出ればいいほうじゃないかな。耐火耐震の家が増えてゐるから、飛び出さないほうがいいのかもしれないね。



外套
寒さや雨を防ぐ為に一番外側に着るもの。オーバーやコートのこと。

新聞も電話もないのにまたたく間に広がるデマ

あのときの朝鮮人騒ぎね。地震より大きかったくらいだよ。朝鮮人の暴動があつて、それがこつちへ襲ってくるといつて、大人はみんな竹ヤリをこしらえて、「きたらこれでやっちゃえ」って大変だったんだよね。ああいうときには冷静さを失っちゃうからな。ちよつとしたことからすごく大きな問題になる。この近くでも、言葉が東北なまりで朝鮮人とまちがえられて、もう少しで殺されそうになった人がいたね。朝鮮人に対する差別偏見は実際あつたね。一九一〇年の朝鮮併合から十年ちよつとでしよう。属国だという意識があつたし、向こうでもなにかという、面白くないという感情は確かにあつたんだよ。それに加えて震災のおびえから、「朝鮮人が日本人の子どもを火事の火のなかに投げ込んだ」とか、デマが飛ぶんだよね。

でもそのうわさの広がりの速いことといつたら、どんなにがんばつたつて、あんなに速く広がることはないだろうと思うほど話が速いんだ。一日に地震があつて、その次の日にはもう朝鮮人騒ぎ、速いんだよね。それも関東一円なんだ。当時は新聞も電話もなく、歩いて行くしかないのだよ。なんだか知らんけどすごい騒ぎだったね。今になつてみると、なぜこんな騒ぎになつたんだろうと思うよね。村長さんまで刀をさして本気になつてやつてるんだから、しずめようとか、打ち消そうとか、そんな気はないんだよ。ああいう恐ろしい目にあうと冷静じゃなくなっちゃうんだね。

横浜駅の車両のなかで

一夜を明かす

高橋順蔵さん

緑区
当時19歳

貿易新聞社から火が出て、火の粉がどんどん飛んできた

桜木町駅の出札係をやってまして、そろそろ交代して昼食を食べようと思ったところなんです。そうしたら揺れはじめた。しばらく様子を見ていたら、だんだん揺れが大きくなるので、「これは危険だ」と思って、外に飛び出したんだけど、揺れがひどくて体思うように進みませんでした。駅前広場のほうに逃げて行くと、大八車が置いてありました。引いていた人が捨てて逃げちゃったんでしょね。

その車につかまってしばらく見ていたら、まわりの建物の壁土が落ちて暗くなって、悲鳴や怒号どごうが聞こえる。地割れはするし、水道管が破裂してガバーツと水が噴き出す。「ここも危ない」と思って、近くにある大江橋のほうに逃げました。そこに大きな樫かしの木があつて、根も張ってるから大丈夫だと思つたわけです。そのうちに落ち着くだろうと思つて、木につかまっていたところ、川向こうの貿易新聞社から火が出ました。だんだん火が大きくなるし、火の粉がどんどん飛んでくるんです。

「ここにも危ない」というわけで、今度は横浜駅方向に逃げました。横浜駅はレング造りのがっしりした建物だから、火事も大丈夫だろうと思つてね。高島町のほうは危険なので、線路の海側を通って行きましたよ。横浜駅は無事だったけど、線路はアメのように曲がっちゃってる。「実家へ帰ろう」と思つたんですが、「今、平沼方

面は道路に火がなびいていて通れない」と駅員が教えてくれたので、帰りたくても帰れませんでした。

そのうちに駅のまわりが燃えはじめてきました。「ここも危ない」と思って、私は東海道の線路のほうへ逃げました。両側はすっかり焼けちゃっていたので、焼けた後なら、もう火が出る心配はないだろうと思って、焼けた方へ逃げたわけです。歩いていくと、そこに東海道を上ってきた列車がありました。三両ぐらいあったかな。客も乗務員も誰もいませんでした。子どもの死体の一つあるだけ。親が連れてきて、そこへ置いたんでしょね。他の車両で一晩寝ました。あときは風がすごかったですね。何でも巻き上げたりして危ないんですよ。私は列車のなかですから安心して寝られましたけど。

翌朝になったら、横浜はすっかり焼けちゃって、地藏坂が丸見え。野毛山も丸焼けでした。焼け出された人が線路に続々と避難してきましたよ。線路は幅が広いし、まわりに家はないから、みんな逃げてきたわけです。線路の上に枕を並べて休んでました。桜木町駅の様子を見に行ったら、駅がきれいに焼けちゃってる。「これではしかたないな。家に帰ろう」と思って、焼け野原となった高島通りを歩いて行きました。その途中でこういうふうな話を聞いたんです。私の前に三十五、六歳ぐらいのご夫婦が歩いていて、「あなた、貯金通帳は持ち出しましたか」と、奥さんが聞く。「持って出たよ」と、ご主人が答えたら、奥さんは非常に喜んでいました。「なるほど。いざというとき、頼りになるのはお金だな」と、そのときしみじみ思いましたね。

高島通りをずっと歩いて、東神奈川駅に行くと、駅の売店がやっていました。あそこの駅はほとんど焼けなかったんですよ。そこで牛乳を飲んで、六角橋のところまできたら、兄にばったり出会いました。「生きてるかどうかわかんないけど、弁当を持ってきた。もし死んでいたら、形見に髪の毛でも拾ってこようと思ってきた」というわけで

す。実家の様子を聞き、みんな無事だということがわかりました。二人で弁当を食べて「せっかく出てきたんだから、横浜の様子を見てくる」という兄と別れて、私は実家へ急いでもどりました。

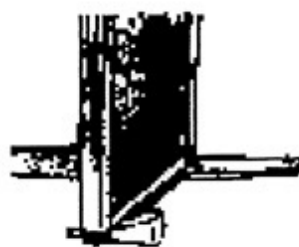
実家へ帰ったら、みんな大喜びでね。心配してたんでしよう。家は大丈夫でした。火事さえなければ、木造というのは強い。というのは、くさびで留めてあるでしょ、だから揺れてもなかなかつぶれないんですよ。実家の近辺には農家が百軒くらいあって、つぶれたのは三軒くらいでした。余震があるから家のなかには入れませんでした。その晩は竹やぶのなかで寝ました。横浜のほうを見ると、空は真っ赤でね、火事のものすごさが手にとるようにわかりました。

翌日、私はお米などの食料品を持って横浜駅に行き、みなさんに差し上げたら、とても喜ばれましたよ。焼け出されて、ろくに食べものを食べていない人が多かったですからね。その日から私は横浜駅に詰めることになりました。そのとき、鉄道省から一人あたり六十円貸してくれましたよ。生活のことは心配せずに働けるように、という心配りですね。

線路の取り替え工事は、軍隊が出動して、四、五日ぐらいでやっちゃいました。割に早かった。線路さえ直れば鉄道は動きますからね。一週間後ぐらいには、桜木町にもバラックの駅舎ができて、今度は桜木町の駅の準備をしなくちゃならないということになりました。

私は出札係だから乗車券の準備で大忙しでした。開業したのは震災後十日ぐらいたってからです。再開すると、今度は田舎に帰る人と田舎のほうから出てくる人とで、客扱いが大変でしたね。

地震が起きたとき、一番こわいのは火ですね。まず火を消すこと。二番目に、さきほ



くさび
V字型の堅い材木や金属で、ものをつなぎ合わせるために使う。

どの話じゃないけど、預金通帳などをいつでも持ち出せるように保管しておくこと。三番目は安全な逃げ場所の確保。どこに逃げれば一番安全か、常に考えておくことです。それから、非常用の水と食料を用意しておくこと。マツチも忘れずにね。大震災みたいな大きな地震だったら、文明の利器は全部使えなくなる。電気はだめ、ガスはだめでしょ。水道管は破裂しちゃいますからね。昔と違って井戸はないから、水は特に困りますよ。地震が起きたら、とにかく一度外に出て、揺れが治まったところで、必要なものを持ち出せばいい。できれば、毛布を四、五枚持って逃げる。野宿するのに必要ですからね。



東京都心も 炎の風にあおられて 被害続出

小松宇兵衛さん

保土ヶ谷区
当時15歳

船に避難して焼死した十二人

大震災のとき、私は東京市芝区新橋（現東京都港区）で紙問屋を営む家にいました。中学生で、その日は始業式だけだったので帰宅しており、父は店に、母とお手伝いさんは昼食の準備をしていました。

急に耳が圧迫されたようになり「変だな、耳鳴りかな」と思った数秒後、ドスンドスンと尻を突き上げられたかと思うと、今度はすごい横揺れです。立ち上がったものの歩くことができず、何回もころびながら、やっと外へ出ました。

問屋街にあった家は、塗りこめ式という土蔵づくりで、つぶれなかったものの、外壁は崩れ落ち、家のなかもまるで白煙が立ち込めたようになり、目もよく見えません。そりゃあ恐ろしくてね。そんななかで、まず火を消した父母は、たいしたもんだと思いません。安政の大地震を体験した年配の者が伝えていた「火のこわさ」の教訓が、頭にこびりついてたんでしょね。

父は住まいのあった新橋のほかに、日本橋小網町でも紙問屋を営んでおり、そっちが心配になったらしく、私に日本橋店を見に来るように命じました。途中、赤レンガで

きた丸善の三階建てビルが倒壊しているのを見ました。

ようやく日本橋に着くと、みな元気で、店の横を流れる日本橋川に浮かんだ伝馬船に避難していて、「水の上だから大丈夫」といわんばかりに、安心しきっている様子でした。私はすぐに新橋にもどり、父に日本橋の様子を報告すると、「船は絶対にあぶない」というので、再び日本橋へ行き、陸へ避難するよう父の命令を伝えましたが、聞き入れてもらえませんでした。このことが、伝馬船にいた親せきの者十三人中、川にもぐって助かった一人を除く十二人の焼死という、いたましい結果を招いてしまい、今でも残念でなりません。

船に逃げるといっても、海に出られるわけじゃないんです。狭い運河に重なり合わんばかりに船がひしめいているところを火がなめれば、次から次へと、あつという間に延焼したでしょう。船へ逃げた川沿いの住人数百人はほとんど死んで、水面はすき間の見えぬほどの死体で覆われました。浮遊死体に小エビが群らがつて吸着しているのが実に異様でした。また、浮遊死体の指輪をはめた指を切り取っている男も見ました。死体の収容作業がすっかり終わって五、六年たっても、悪臭は消えませんでした。風向きによって臭ってくるんです。

陸のほうでも大地震の直後から、人家の密集地域のあちこちが火事になりました。夕方から夜にかけての、ものすごい火の手に包まれて、新橋店も日本橋店も全焼してしまいました。延焼の速さといったら、これはすさまじい勢いでしてね。「火が火を呼ぶ」とでも申しましょか。立っていられないほどの「炎の風」が吹き荒れ、風向きはしょっちゅう変わるんです。

それから、新橋店の前は、市電も走るような三十メートルほどの大きな道路だったんですが、うちの側の家が燃え上がると、やがて向かい側の家がパァッと燃え始めるのに

伝馬船
櫓(ろ)や櫓(かい)で漕ぐ甲板
のない木製の小舟。荷物を運送す
るのに使った。

は驚きました。「三十メートルも離れているのに？」と思われるでしょうが、延焼ではありません。「引火」するんです。

当時の商家は、夏になると強い日射しを避けるために、店の前を大きなもめんの布で覆うところがありました。今でも、ビニールで日除けや雨除けをしている店があるでしょう。ああいったものです。道路を隔てた片側の家が燃えると、その副射熱が反対側の家を熱して可燃ガスが吹き出します。それが「引火」して、布製の日除けがいきなり燃え始めるんです。風上、風下なんて関係ありません。これには本当にびっくりしました。

戸外・屋内のどちらが安全かが、これからの課題

炎の風にあおられながら、二日の午前四時ごろだったでしょうか。家じゅうで申しあわせておいた避難場所の芝公園に、ようやくたどり着きました。広い園内は人であふれんばかりでしたが、午前九時ごろには、市（現在は東京都）から一人当たり一個のおにぎりとお水の配給があり、とても助かりました。大混乱のなかで、よくあれだけの炊き出しができたものだ、今でも感心しております。

いろんな光景を思い出しますが、丸の内もひどかった。皇居の堀端にほとんど完工間近の内外ビルというのがあったんですが、これが崩壊しましたね。八階建てが三階建てくらいにつぶれてしまって、どうも変な臭いがあるのでよく見ると、あちこちから人間の手足や頭がのぞいているんです。すぐそばを大勢の人が通っているのに、セメントの粉まみれになっているから、よく見ないと気づかないんですね。対岸の皇居の石垣の上には、着物が焼けたため全裸の男女が何人もいて、食料としてお堀の鯉なんかをとってました。

一、二カ月して、横浜に行きましたが、そのとき見た様子からすると、横浜のほうが

東京よりも強い揺れだったんじゃないでしょうか。東京では、それほどの地割れも見ませんでしたし。

あの頃と今とでは、都市の事情がずいぶん違っていますから、教訓といってもむずかしいでしょうが、つねづね疑問に思っているのは、今、学校などでは生徒さんたちに、地震がきたら机の下などにもぐるよう指導していきましょう。しかし、今みたいにコンクリート建築が多いなかで「戸外に逃げるよりも屋内にいるように」とか、「とにかく頑丈なものの下に身を隠せ」との指導は、いかがなものでしょうか。私個人としては、まず火を消して、外へ出て様子を見るほうがいいように思っています。余震が続くにしても、最初の数分間の揺れがなんといってもすごいですから、身軽なまま外へ逃げたほうが、まだしも安全なんじゃないでしょうか。

「まず火を消して」ということでは、各戸に一個の消火器はほしいですね。ただ、強制しにくいことなので、各戸での設置がむずかしいのなら、せめて、いざというときのための自主防災組織ごとでもいいから、消火器を設置してほしいと思います。

とにかく今は、大震災当時とは比較にならないほど自動車は多いし、家のなかにも有毒ガスを発生させるものが多い。引火物に囲まれて暮らしているんですね。橋が焼け落ちる心配はないでしょうが、タール系の舗装道路は燃えるでしょう。いくら広域避難場所を指定しても、そこにたどり着けない人だって出てくるでしょう。

だから、公の情報が本当に大切です。人が落ち着いて行動できるよう、また、デマに惑わされないためにも、公的機関はしっかりした情報を流してほしいものです。これだけでも、ずいぶん多くの命を救うことができると思います。

第二章

市民に何が起つたか



船に避難した人々

深い割れ目に向かつて

叫んでいる人も

渥美徹弥太さん

戸塚区・当時13歳

当時私は関東でも特に被害のひどかった埼玉県の春日部カサハベにいました。始業式の日で、昼食を終え、友だちの家に遊びに行く途中グラグラ揺れだし、歩くことはもちろん、はうことも寝ていることもできませんでした。犬がびっくりして跳ね続けていました。あの揺れは話しても理解してもらえないでしょうね。道はひびわられて水が吹き出し、深い割れ目に「〇〇、いるのか」と叫んでいる男の人がいました。揺れが収まって帰ってみると家がつぶれていました。年寄りと二人きりだったので、火を使っていた場所を聞いて掘り返し、火を消しました。東京の京橋にいる両親が心配でしたが、四日目、東京から春日部まで歩いてドロドロになった両親がたどり着きました。電話もなく、本人が歩いて行くしか連絡の取りようがなかったのです。

春日部の町はほぼ全壊でしたが、地震の道すじか



大正期の元町
土埃を上げて自動車走っているのが見える。左手前はカスリの雑物姿で遊ぶ子ども達。右側の商店の看板が英語で書かれているのが港街横浜らしい。

はずれていた学校はつぶれませんでした。みんなが顔をそろえるには一カ月ほどかかりましたが、みんな無事でした。教科書もなく、本を見せ合って勉強しました。幸い火事が出なかったので、二日目には土のなかから掘り起こして制服を着て行きました。大事にしていた時計やカメラも無事でした。しばらくは余震が続き、学校ではその話をするが多かったです。すごい揺れで、外で風呂に入っていたら、裸のまま風呂桶から放り出されたとか、川の水が陸にはね上がって川底が見えたとか。本当の話ですよ。

庭のつげの木に
一家でつかまる

持田一郎さん

泉区・当時13歳

「ドーン」と激しい揺れ。トイレに入っていた私は地震のショックで開かなくなった戸の隙間を夢中ではい出し、縁づたいに庭に飛び出しました。気がつくとき庭のつげの木に一家でつかまっていました。

茫然として口をきくものもいませんでした。そのとき目にした、庭の土蔵が水をかけられた犬のようにブルブルと土煙を上げて揺れている光景が今でも忘れられません。

幸い、家は少し傾いただけでしたが、家の前の道はV字型に裂けました。そこへ木が突き立ったりころがったりしているのです。なんと、向こう岸の木が地震でなぎ倒され、川を越えて飛んできたのです。さすがにこのときは、子ども心にも地震はこわいなあと思いましたよ。それと、長者町に叔父に連れられて行ったとき、死体があるところがあった端で、屋台で天井を売って商売してた人のことが、なぜか記憶に強烈に焼きついているのです。

地球がどうかなくなっちゃったか かと思つた

新井忞藏さん

戸塚区・当時15歳

千天続きの八月で、三十一日は久しぶりの雨でし

御神酒銭

当時、雨で農作業ができない大人達が、地域の集会場でもあった神社に集まり、お金を出し合つて酒を買い飲んだ。このとき集めたお金のことを御神酒というのは本来神仏に捧げる酒のことだが、神社で酒を飲むところからこの言葉を使ったもの。

た。翌日は農家のしきたりで、おしめり正月でした。仕事を休み、二十銭くらい御神酒銭を出してお宮で飲むんです。農家の休日ですね。大人はお宮に集まつて、子どもの私は自宅の縁先で新聞を見ました。そしたらガタガタツときて、最初の上下動でガラスが全部割れ、それから長い横振れがきて、そのまま表に飛び出したんだけど歩けないの。四つんばいで樺の木にしがみつきました。ふと家のほうを見たら隣のはい小屋（ものおき）がべしゃんこ、土蔵は十五度くらい傾いてすごい砂ほこり、地球がどうかなくなつちまったかと思いました。

名瀬町はそのころ二百五十世帯くらいで、ほんとの田舎でした。火災はなかったけど、道路はひびだらけ、川の土手が全部崩れて川が埋まりましたね。揺れる前にゴオーツと、吸い込まれるような、なんともいえないいやな音が地面の底から聞こえてきました。地鳴りつていやなもんです。

農家ですから、食べものや水に困るということはなかつたね。横浜から、おおぜいの人達が身寄りを頼つてこの辺にきて、炊き出ししたり、食べものをだしてあげたりしたの。新聞もこなかつたけど、山越しに火が見えたりして横浜のほうは大変だという

のがわかりました。だんだんひどくなっていきま
たね。

山の上から下まで 一メートル幅の縦割れ

河原 章さん

緑区・当時21歳

地震のとき、家は大丈夫だったんですが、土蔵の
土壁が崩れて井戸に落ちてしまったんです。飲み水
は近所からもらって、風呂の水などは川から汲んで
くる。井戸替えをするまでは苦心しましたよ。それ
に、近くの山が崩れて、うちの田んぼに泥が入って
しまった。早稲の品種なので、もう刈り取りにかか
っていたわけです。それが、ほとんど全滅ですよ。
大損害でした。

地割れもひどくて、国道二四六号線などはずっと
地割れが続いていて、その道路普請も大変でした。
現在の東名横浜インターの近くに芝山という山があ
って、その山の上から下まで一メートル幅ぐらいの

縦割れができたんですよ。これにはびっくりしまし
たね。

電灯がぶつかりあって バンバン割れ じつに怖かった

山本甚一郎さん

西区・当時18歳

私は横浜ドックという会社で設計の仕事をやっ
ており、グラツときた瞬間、あわてて机の下にもぐり
込みました。そばに暖房のパイプが通っていたため、
それにつかまっていたね。設計部の部屋ってのは電灯の
位置が低く、ゆらゆら揺れる電灯がぶつかってバン
バン割れて、じつにこわかったですよ。地震がきた
ら机の下にもぐろうと、日頃考えていましたが、電
灯があんなふうになるうとは、まったく想像もでき
なかつたですね。

庭に飛び出した大人が 一本の木に抱きついた

漆原亥太郎さん

旭区・当時12歳

近くの川で私は釣りをしてたんです。川の水が突然、タライの水をゆすつたように、盛り上がってバシバシ岸にあたってたね。対岸に一軒の農家があり、その家の人が右往左往しているのがよく見えました。家の主らしい人が庭に出てきて、木に抱きついたりしてね。見てて子ども心に、実にこっけいだったよ。今でもあの光景は忘れられないね。大地震が起きたら、どんな人だって、正常な行動をとることとはまず無理だね。

犠牲になった母を 着のみ着のまままで土葬

岩崎家寿子さん

中区・当時19歳

家の造り

民家の屋根は、瓦、トタン、板がき等。農家は、わら、茅ぶきなども多かった。家の出入口などは、引戸が使われていた。各部屋の間仕切りには横や障子が使われ、そのため、上部には梁が巡らされ、鴨居、欄間がつくられていた。障子や横の下部には引戸の滑りをよくし、戸が外れるのを防ぐための溝が掘られた敷居がある。部屋と庭の間には縁と呼ばれる廊下があり、庭側には硝子戸が入っていて採光や風通しがよくできるようになっていた。たいていの家では縁の北側の角が便所になっていた。入り口は引戸で、水洗はまだほとんどなく、汲み取り便所が普通だった。風呂は木の桶で、小型の手桶等と同じように木の板を太い針金を



よったタガで外側から縛るようになっている。大正前には丸型だったが、大正期に入り小判型が主流になった。下部に鉄製の釜がついていてそこで薪を燃して桶のなかの水を暖めた。台所は土間になっていて、へつつい、かまどがつくりつけられていて、これも薪を燃料として煮炊きをした。七輪もほとんどの家にあり、

地震の日、私はフェリス女学院の夏休みで、近くの髪結いに行っておりました。歩くことができず、しばらくは柱につかまっていた。しばらくして家にもどりましたが、家はすべてつぶれてしまい、はってなかに入ると母が梁と敷居の間にはさまれ、舌をかんでいました。そのときはまだ息があり、兄と一緒に母を助け出しましたが、手遅れで、息をひきとりました。六十歳でした。今でも唯一残念なのは、母を着のみ着のまままで土葬せざるをえなかったことです。私の家は、蔵だけ残ってすべて壊れましたので、海のほうへ逃げました。海はビール瓶の色をしていました。

現在の家には井戸があり、いつでも使えるようにしてありますし、梅干しも役立つのではないかと用意してあります。

気がついたら 階下の中庭にいた

加藤まさ子さん

保土ヶ谷区・当時13歳

あのころ、東京の大崎にある製薬会社に勤めておりました。工場の三階で仕事をしておりまして、お昼ちよつと前でしたから、「手を洗って昼食の支度をしてもいいですよ」と、年配の男の方にいわれた瞬間にガタガタときました。五階建てのビルでしたから、その揺れかたつてなかつたですね。大きな台があつて、その下にもぐりました。そこまでは覚えていますが、後は無我夢中ですね。気がついたら、階下の中庭にいました。

社員食堂は別棟べつどうになつていて、それがつぶれてか
りの人が亡くなりました。もし地震が二、三分遅
れていたら、私もどうなつたかわかりません。亡く
なつた方に申しわけありませんが、運が良かったと
思います。

線路の上で一夜を明かす

小出シツ子さん

西区・当時10歳

はじめての地震で、とにかくびっくりしました。
家から逃げるとき、姉が階段にはさまれて出られな

木炭や練炭が燃料として使われていた。上水道はあつたが、井戸水を利用している家もまだ多かつた。下水道の整備は進んでいず、家庭排水は道路の端のドブとよばれる側溝に流されていた。

くなり、近所の人に助けられました。母も瓦で頭
けがをしましたが、なんとか家族全員無事に逃げる
ことができました。荷物はほとんど持ち出せません
でした。家はつぶれてしまつて、地震の直後数時間
で焼けてしまいました。私の住んでいた平沼地区は、
水天宮すいてんぐうとお寺のところをのぞいてほとんど焼けまし
た。家族全員で線路づたいに逃げて、線路の上で一
夜を明かしました。その後、知人の家で世話になり、
焼け跡にもどつたのは半月ぐらいたつてからで、そ
こにバラックの家を建てて住みました。今後、もし
大きな地震が起きたときは、荷物はあまり持たずに、
身軽で逃げるのがよいと思います。結局途中で捨て
ることになると思いますから。

医院の二階の瓦が ドカツと落下

埜渡貞英さん

泉区・当時14歳

朝方、雨が降ったけれど十時頃から晴れ上がり、

カッと日が照りつける暑い日でした。昼ちよつと前、私は母親の目を盗んで、川に水浴びに行こうと砂利道を歩いていました。すると、突然変な振動がきました。そのときには、そんなに大きい地震とは思いませんでした。ドーンと音がしたようでした。ただ、川の水がまるで魚がはねるように上下しているので、奇妙でした。すると、向こうに見える医院の二階の瓦がドカッと落下するのが見えました。さすがの私もこわくなって家にもどったわけですが、家は傾いていたものの、家族全員無事でほっとしました。けれど、母親にひどく叱られたことを思い出します。

川の小舟に 夢中で乗り込む

熊倉トミさん

磯子区・当時13歳

「船に乗ってる！」という父の声で、家の前の川に浮かべてある小舟に夢中で乗り込みました。地震

後の津波を父は心配したのです。船に乗っていると、水かさが増す上がつてきました。ウナギやハゼなどが水面にはねるのを不安な気持ちで眺めています。不思議なことに川の向こうに広がっている海面は水がどんどん引いていくのです。それにしても、父は偉かったなあと思います。うちは蕎麦屋で、父はそのとき、てんぶらを揚げていたんですが、どうやって火が入るのを防いだものか……。あとで見ると、油の入った鍋が座敷に置いてあったそうです。父の脇にいた私は、気がつくとう路上にころがってしまいましたものね。

石油タンクが爆発、 三週間燃え続けた

渋谷清太郎さん

西区・当時12歳

地震が起こる前、浅間下方面から生暖かい南風が吹いてきて、外を見ると保土ヶ谷方面が暗くなつて、なんともいえない地鳴りみたいな音がしました。そ

れからしばらくして食卓に座ってから、グラグラつとききました。いろいろものが落ちてきたので、裏の原っぱに逃げました。一番印象に残っているのは、横浜駅の西口にライジングサンの石油タンクが一基ありまして、それが爆発し、三週間ぐらい燃えていたことです。その石油が川に流れ出し、鶴屋町が燃えました。石油は現在の三越の向こうにある福祉総合センターから横浜駅の西口までの広い範囲に流れ出しました。ライジングサン石油というのは確かアメリカの企業だったと思います。

もろみ
醸造してまだ粕をこさない酒、または醤油。

青い砂がスースーという音 とともにわき上がる

岩本喜平さん

鶴見区・当時32歳

当時、私は八百屋をしておりました。市場に荷を仕入れにいつているとき地震が起きました。ゴーという音とともに地震がやってきて、どうしても立っていることができませんでした。鳩が十羽ぐらい地

震とともに舞い上がったのですが、すぐに下へバタバタと落ちてしまいました。地面は割れて、青い砂がスースーという音とともにわき上がってきました。鉄道の線路の上を歩いて、やっとの思いで家にとどり着きました。家は多少傾きましたが、壊れないうですみました。食料は近くにお米の倉庫と日清製粉があつたので、そこからわけていただきました。横浜の親類が私の家に避難をしてきましたが、食料がなくて醤油とらふのもろみを食べていたと聞きました。

レンガ造りの建物は 全部倒壊

石橋寿六さん

中区・当時13歳

地震が起きたのは、学校から帰り昼食を食べようとしたときです。大きく揺れている間、家の太い柱にしがみついて振動が止まるのを待ちました。父親の事務所が中華街にあつたので、父親が無事かどうか心配でした。幸い、建物の外に出ていたので助か

りました。付近の建物はレンガづくりで、全部倒壊しましたが、自宅は竹やぶの近くにあったので被害はありませんでした。学校が再開したのは翌年の一月でした。

無事だった

瓦せんべいの型

田中金次郎さん

中区・当時15歳

家業の瓦せんべい屋を手伝う菓子職人をしていました。毎月一日と十五日だけ仕事が休みだったので、その日も家にいたんです。地震が起きたとき、まず商売道具の瓦せんべいの型をまとめて、水のない下水の下三カ所に隠しました。ここなら地面より低いので、火がまわらないと思ったからです。祖父が一人で逃げてしまったので、祖母と二人で、たんす二さおを本町小学校まで運び出し、掃部山へ逃げました。やがてここも危なくなったので、伊勢山皇太神宮の足場のしっかりした石段の上に避難しました。

そこから下を見ると、一面火の海で、火事から起こる風が竜巻のように散って、トタンなどを舞い上げていました。やがて家族とも再会し、家にもどって見たけれど、あとかたもありませんでした。ところが、下水に隠した瓦せんべいの型だけは、何の被害もなく無事だったんです。今でも当時のまま残っています。

はね上げられるような

上下振動

原 千代松さん

港南区・当時14歳

地震のときは自転車屋にいましたが、つるしてある自転車、揺れた瞬間に全部落ちました。やっと家までもどりましたが、ひどい余震で、大きな音がしたあと、何秒もしないうちに、とうてい立ってはいられないほどの、はね上げられるような上下振動がきました。

目の前の約十五メートル位の高さの崖が、数本の

松の木ごと崩れた音が聞こえないほど、地震の音が大きく、ゴーツという風のようななりと、ドロドロ口という、おなかにひびくような音が続きました。

二メートル以上 盛り上がった海面

相田倉松さん

金沢区・当時16歳

^{ふとこし}船越（現・田浦）の海軍工廠造兵部に勤めていました。昼食を食べているときに地震がきたので、無我夢中で表に出ました。工場の敷地内に運搬用の汽車があったのですが、こわいので伏せて、そのレールにしっかりとしがみついています。ふと気がつくと、レールのところまで海水が盛り上がってきているんです。工場の前は二メートルぐらい下が海でいたから、海面が二メートル以上盛り上がったことになりました。

十日ほどして工場に行ったら、台の上に並べてある五、六メートルの魚雷の発射管が、全部落ちてい

子ども達の生活

義務教育は、尋常小学校六年生までだったので、卒業後は働き始める子もいた。尋常小学校の上には二年制の高等小学校（無試験）や四年制、五年制の中学校、高等女学校、商業学校（入試有り）があった。大正期には高等小学校に就学する子どもが増えたので、高等小学校の拡充が進んだ。当時の学校はすべて男女別クラス。なかには門や校舎まで男女別になっている学校もあった。横浜では、大正十年に小学校が三十六校、生徒数は四万七千六百四十八名。大正十一年に高等小学校が十九校、生徒数は五千二百六十六名だった。震災時には三十六校あった小学校のうち十七校が全壊、三校が全壊、残る十六校も何らかの形で大きな被害を受け、無事なものは一校もなかった。当時の小学生の通学時の服装はカスリの着用に下駄や草履が大多数だった。



た。そのために体操服の発案が協議されたりした。中学や女学校等には制服があり、男子生徒は現在と同じ詰め襟姿。現存する当時の小学校視察の記録には、歩幅を定めること、とか、衣服のはころびを上級の女子生徒に繕わせること、などという記

ました。こんなところをよく逃げられたなど、あとで思いましたよ。

倒れた家は 「地震の道」に沿っていた

安西正治さん

泉区・当時12歳

当時、私は小学校の高等科の一年生でした。グラツときた瞬間、すぐに家を飛び出したものの、揺れて歩けないので、はいずってようやく畑まで行き、そこで様子を見ていました。

落ち着いてから見ると、道路はどこどころ亀裂が走っていました。よく地震の道といいますが、倒れた家は、やっぱりその道に沿っていましたね。当時の泉区は今よりもっと山林が多かったのですが、地震の道の途中にある山は地割れがひどく、こわくて山には入れませんでしたよ。割れ目の上が草でおおわれていて、どこに割れ目があるかわかりませんからね。

子どものころから、地震のときは竹やぶに逃げろといわれていたので、地震の後も、みんなで近所の竹やぶに集まっていました。

ワツと吹き上げられ 四つんばいに

徳久 芳さん

栄区・当時15歳

その日は、座敷に私一人でおりました。すると、遠いところから押し寄せてくる津波のような轟音ごうおんが聞こえてきて、空気を揺るがすような感じのなかに、ポカンと置かれたようでした。地面が動くのと一緒に、空気全体も動いたんじゃないでしょうか。それから、ワツと吹き上げられ、体がもてあそばれて立ってられないので、四つんばいになりました。

まわりから、額ぬでや砂壁などがはがれてドサドサッと落ちて、ほこりでもうもうとなりました。目も開けていられないし、口にも砂が入るようで開けていられませんでした。

述が残っている。一方遊びについては爪上げや竹馬、お手玉やゴム飛びなどがポピュラーなものだった。駄菓子屋ではいか煎餅やふ菓子、飴玉などのお菓子和共に、ペイゴマやお面、めんこ、ゴムのパチンコ、ロウ石、誘物のピストルなどのおもちゃも売られていて、放課後の子ども達の集會場のようになっていた。男の子に兵隊ごっこが大流行という当時の世相を反映した話も多い。お祭りのときの紙芝居も子ども達の大きな楽しみだった。この時期の紙芝居は絵物語ではなく、紙人形に竹ぐしをつけて動かす形式だった。



少し大きくなると、小さな子の子守や、井戸水を汲んだり、おつかいに行ったり、大人の手伝いもよくした。

当時、家の前は国道をつくるため、測量がすんで土台の大きな石を入れているところでしたが、その晩は、国道で寝たんですよ。

山の土砂が崩れ 木がなぎ倒された

三浦 豊さん

磯子区・当時19歳

国学院の学生であった私は、夏休みの帰省中で、ちょうど近くの海岸を散歩していました。グラグラツと揺れ、気がついたら端のドブ川に落ちていました。ドブにつかっただけで顔だけ出して、目にした光景は忘れることができません。すさまじい轟音とともに、前方の山の土砂が崩れ、木がなぎ倒されていくのです。空には黒煙が立ち込め、飛んでいた鳥は落下して海面で羽をばたつかせているのです。なにやら恐ろしい映画のシーンを見ているようでした。

私の家は神主かんしゅで、木造の相当大きな建物でしたが、べっしやんこになっていて、あとかたありません。

とりあえず、テントを張って露をしのいだんですが、その間、多数の被災者が境内に集まってきました。赤ん坊を抱いた婦人もいましたが、乳が出ないんで、赤ん坊が泣き叫ぶのがなんとも哀れでしたね。

わらぶき屋根がゆさゆさと揺れて三階建ての家が崩れた

吉原朝次さん

戸塚区・当時18歳

当時、東京電灯の池子変電所に勤めていた私は、その日は夜勤明けで、自宅で休んでいました。まず、ガーツというものすごい振動音が聞こえてきて、ガラガラガーツと突然大きく揺れました。すぐに庭に飛び出しましたが、立ってられないほど激しい揺れでした。

家のほうを見ると、両脇に孫をかかえた父がいて、孫を落したりして、なかなか外に出られない。数分たって、ようやく外に出たあと、わらぶき屋根が

ゆさゆさと揺れて、三階建ての家が崩れました。ずいぶんすごい音がしたと思いますが、それがわからないぐらい、地震の音が大きかったんですよ。

もし、あんな地震がまたきたら、逃げるのに精一杯で、何も持ち出せないうね。

線路が一本ブラインと宙にぶら下がって

菊池道之介さん

鶴見区・当時17歳

揺れたとき、地割れに落ちないように工場の大きな鉄板に六、七人で乗ったんですが、みんなで肩を組んでいても、よろよろと酔っ払いのようになりました。揺れが治まってから見ると、鉄板の下の固い地面が、とろとろのぬかるみようになってしまい、地割れから水がどんどん吹き出ていました。でも工場は鉄骨造りだから、つぶれないですんだんです。

家にもどる途中見ると、大師鉄道(現・京浜急行)の仲木戸から反町までは、線路が一本ブラインと宙

にぶら下がっているだけで、その下は地面よりへこんでしまっていました。あの盛り土はどこにいつてしまったんでしょうかね。

穀倉の収穫物が 心配のタネだった

大須賀 清さん

磯子区・当時13歳

私の家は地主だったため、穀倉には収穫物がたくさんありました。大震災のとき、町なかじや家がつぶれ、焼けたりして、食べものに困る人も多かったようですが、その点、私どもの家族は恵まれていました。食べもののたくわえがあったわけですから。ただあのとき、食料が余分にあるところは襲われるかもしれないっていうので、親父とか兄たちは、そっちのほうに気を配らなければならず、ほんとに大変だったようです。

交通

日本最初の鉄道の開通は新橋―横浜間だった。横須賀線は明治二十二年に完成。横浜線は明治四十一年に私鉄として開通。大正三年十二月に、横浜―東京間で電車の運転開始。当時の横浜駅は現在の桜木町駅だった。京浜急行は明治三十八年には品川―神奈川間が開通していたが、東京急行と相模鉄道は震災前にはまだ運行していなかった。横浜市街地では明治三十七年七月に、神奈川―大江橋間に開通した横浜電鉄が市民のもっぱらの交通手段だった。大正元年には尾上町―八幡橋間、西の橋―本牧間、弘明寺線が開通し、大正十年に市が買い上げ、十一年には市営となり、市電と呼ばれた。道路が舗装されていなかった当時は、土埃を防ぐために荷車に水のタンクを積んで、水をまきながら走る散水車もあった。震災時にはこれが給水車として大活躍した。チンチン電車として親しまれた市電も、昭和四十七年三月、大勢の市民に惜しまれつつ六十八年の歴史を閉じた。その他の公共の交



通手段としては、乗合馬車があった。大正中期の全盛期には神奈川県内

一面の焼け野原、 弘明寺から横浜港が 見えた

福島秋好さん

港南区・当時6歳

地震で家はつぶされたんですが、その前に逃げ出したので家族は全員無事でした。一週間ぐらいしたときに、「放出米を出すから取りにこい」というので、兄と一緒に大八車を引っ張って、山下町の税関の倉庫までもらいに行きました。弘明寺まで行ったら、横浜港が見えるんですよ。一面の焼け野原。市電の線路はグニャグニャに曲がっていて、焼けこげた死体がそこらじゅうにありました。男女の区別もつかないぐらいです。それだけ日にちがたついても、片づける余裕がないんですね。そういう状態が弘明寺から本町までずっと続いてました。その光景が今でも脳裏から消えません。

うれしかった

アメリカからの救援物資

吉野一雄さん

港北区・当時10歳

昼食のあと、寝ころがっているとグラツときて、私は立てなくなりました。はって外に出ようとしたら、祖母がひっくりかえって、食いかけのトウモロコシを手放さず、畳の上を転がりながらうなづいてるのが見えました。あれには驚きましたよ。余震が治まってだいぶたつたころ、毛布や乾パンなど救援物資がアメリカから届きました。うれしかったです。戦時中、召集されて南方へ行きましたが、そのアメリカと戦うことになるだなんてまったく皮肉でした。

家でとれた

ナス二百キロを寄付

天野一雄さん

鶴見区・当時14歳

百台以上の馬車が使われていた。自家用自動車の台数は非常に少なく、大正八年に施行された自動車取締令では、自動車の最高速度二十四キロ制限とされていた。バスの運行は明治三十七年に厚木―平塚間を走らせたのが神奈川県第一号だが、あまり利用客がなく、わずか一年で廃業。その後大正に入り、箱根の富士屋自動車定期路線網を駆け、バス事業は定着した。利用者獲得のため車体を赤色に塗り替えたところ大成功、全国のパスが車体を真っ赤にしたという逸話も残っている。横浜で市バスが走り出したのは昭和三年十一月になってからだった。

地震のあと、家の近くの二メートル幅の小川は、両側から土が崩れ落ちてきたために、一メートル幅ぐらいになってしまい、水が土手の縁まで上がってきってしまったんですよ。

うちは、野菜をつくって市場に売るのが商売でしたが、横浜駅前にできたばかりの新しい市場は地震でつぶれてしまいました。でも、その日の午前中には雨が降って、作物はほとんど育っていったんです。そこで、荷車にナスを二百キロぐらい積んで、親父が引き、私が後押しして、神奈川警察に持って行きました。町の人は食べものがなくて困っているからと、寄付してきました。神奈川通りは、手前がずつと焼けて、警察だけ建物が残っていましたね。

港の税関倉庫から

食料品を盗む人もいた

斉藤 豊さん

旭区・当時10歳

震災のときは、道路や鉄道など輸送手段がだめになり、食べものがなくなって困った人も多かったよ。

港にある税関の建物が壊れ、そこへかけつけて食料品を盗んでくる人が、けっこういたんだよ。背に腹は代えられなくてね。いざつてときは人間、なんでもやらかすもんだ。井戸に毒を投げ込むやつがいる、なんてうわさがエスカレートしたのは、そういった異常心理も手伝っていたようだね。混乱がひどくなつて、ついに戒厳令がしかれたんだよ。

水と一緒に地上に 吹き上げられた祖父

池田嘉代さん

栄区・当時2歳

祖父は港で美術工芸品を売る商売をしていました。地震のあと、家にもどる途中、一メートル幅ぐらひのひどい地割れがあり、そこに祖父はすつぱり落ちてしまったんです。落ちたところに揺り返しがきて、地割れが閉まってしまい、死んでしまった人もいるそうです。祖父が落ちた地割れの下には、ちようど水道管の大きなパイプがあつて、それがパイプと破裂して、水が勢いよく吹き出して、そのとき、



大規模の賑わい
洋装の人達のなかを人力車が走る。
横浜ではこの頃から洋館が数多く建
てられていた。

祖父も水と一緒に地上に吹き上げられたそうです。本当に運が良かったんですね。

建ててまもない 校舎が傾いた

渋谷 将さん

中区・当時20歳

当時私は磯子小学校の教師でした。地震が起きたのは、始業式の日で、生徒たちはすでに帰宅し、私たちは職員会議をしているときでした。座っていた椅子が下から持ち上げられるようになり、急いで外に出ようとしたけれど、まっすぐ走れませんでした。窓ガラスが碎けて飛び散り、まだ建ててまもない校舎が傾きました。校庭で四つんばいになっていた記憶があります。小学校が平常授業にもどれたのは、翌年四月ごろでした。講堂などを使つての二部授業でした。

漁師のホラ貝が 配給品の合図

岩崎伊三郎さん

中区・当時8歳

揺れがひどく、家の土間をころがりまわるほどで、恐ろしかったね。そのままではいつ家がつぶれるかわからないので、隣の家の竹やぶへ家族全員が避難しました。大きな揺れがくるたびに竹につかまっていたんですが、竹やぶは決して地割れなどせず安心できました。私の家は少し傾いただけで、たいした被害にもあわなかったけれど、家にもどるのは不安で、しばらくは近所の広場で野宿をしました。食料は、父が漁師だったので、税関の倉庫へ取りに行きみんなで分けあったので、ひもじかった記憶はありません。漁師がホラ貝を吹くのが配給品が着いた合図で、外人の古着や日用品などをもらいました。

在郷軍人会

職業軍人とは違い、普段は民間の仕事をしているが、いざ戦時体制になったとき、召集され国防の働きをする予備役、帰休兵などの軍人の集まり。

間一髪 危機をまぬがれた弟

平本政文さん

瀬谷区・当時7歳

家の母屋はなんともなかったけど、蚕室がつぶれました。ちょうど弟がなかで遊んでいました。親父は当時けがをして松葉杖をつけていたのですが、それに気づいて、はいつて行って「外へ出る」と叫び、弟は飛び出したのです。一瞬の差でした。崩れてきたのと三〇センチはなれてなかったのです。弟は本当に運のいいやつだとずっといわれています。瀬谷では火事もなく、倒れた家が百二、三十軒くらい。農家ですから食料や水に困ることもなく、被害のひどい地区への義援金が九百四十八円も集まって表彰されたくらいです。

地震よりこわかったのは朝鮮人騒ぎで、夜になると朝鮮人が二、三百人で襲撃してくるといってデマです。町内会、青年団、在郷軍人会などが集まって自警団をつくりました。今の藤沢信用金庫のところまで警備してましたね。親父が何かの責任者でそういう

情報がいっぱい入ってきたんです。子ども心に「親父は足が悪いし、自分は長男だから代わりに戦わなきゃいけないかな」と心配でした。

長野からきた先生で、顔が長いからと朝鮮人に間違えられて、竹ヤリで殺されかけた人があるんです。ちよほど下宿先の人が通りかかって「これは学校の先生だ」と証明してくれたんで助かったそうです。

うわさにふりまわされる のを戒めた巡査

田辺清太郎さん

鶴見区・当時19歳

大森のガス電気工業に勤めていまして、お昼で手を洗おうとしたときに地震が起きました。外に出ようとしたら、工場の建物が倒れかかってきたので、またなかに入りました。工場の建物でレンガの部分は壊れてしまいました。レンガの下敷になって即死した人もいましたし、ケガ人も多く出ました。工場はしばらく休業状態で、私は警備にあたりました。

白い腕章をつけた人が自転車に乗って、朝鮮人のことを触れまわっていました。工場の巡査は「君らの仕事はこれからだよ」といって、うわさにふりまわされず、被害にあった人たちのために働くように戒めていました。

余震がひどくて 竹やぶに寝た

高橋六三郎さん

瀬谷区・当時15歳

小学校二年だったのであまり覚えていないね。そのすごい揺れかただけは、口ではいえないけど体では覚えているよ。一番印象に残っているのは、余震がひどくて竹やぶに寝たことだね。子どもだからいつもと違うキャンプか何かのようで、大騒ぎしてたね。朝鮮人がせめてくるというので、みな戦々恐々としてたね。集落で触れ歩いたような形跡もあったね。今思うと、疑心暗鬼ぎしんあんまを生み出しておもしろがるような人がいたんじゃないだろうか。地震そのもの

の印象は薄いですが、朝鮮人襲撃のデマ騒ぎははつきり覚えているよ。

うわさ(デマ)を信じて

自警団に

小松良雄さん

西区・当時11歳

私の家は、瓦は全部落ちましたが、幸い家は壊れませんでしたし、付近では火災も起こりませんでした。山下町、黄金町はすぐ火の手が上がりました。浅間町から歩いて中華街まで見に行きました。時計屋の店先では、金属がドロドロに溶けてしまっ、それを少し拾ったりしました。途中、すいとんを五錢で食べた記憶があります。朝鮮人のうわさが流れたのは翌日だったと思います。共同水道と井戸に毒を入れたといううわさです。そのうわさのため、家の前に竹で柱をつくって蚊帳をつつて、外に寝ました。父親は竹ヤリを持って自警団に入って「山」「川」を合言葉に行動しました。



伊勢佐木町

当時は賑町と呼ばれていた。芝居小屋や寄席の立ち並ぶ大歌舞街。林立するのぼりには出演中の一座や人気役者の名前が書かれている。手前の雑物で自転車に乗る男性の姿が、いかにも和洋折衷のこの時代らしい。

ウスを並べて梯子を渡した上で寝起き

岡本新太郎さん

金沢区・当時19歳

その日、上大岡の祭りに行くため、自転車の整備をしていました。実は午前中横浜にいて、祭りのため早く帰ってきたので、命拾いでした。想像もつかないガタツがやってきました。縁側から放り出されて、はっついて、やっとお茶の木の根元につかまりました。家が上下に揺れてすごい砂ほこり、物置がべしゃんこになりました。苦勞してなかに閉じ込められた馬を救い出し、裏の竹やぶに避難しました。

安政の大地震を知っていたおじいちゃんが、「今度も七日七晩続く」といったので、まさかと思っただけで本当でした。老人の知恵で地割れに落ちないよう、ウスを並べてその上に梯子を渡し、そこで寝起きしました。

富岡は杉田へ半里、金沢へ一里といわれ、周囲からはなれた地域だったけれど、だからということ

なく、朝鮮人が井戸に毒を入れるといううわさが自然に入ってきて、竹ヤリや、抜き身の刀を持って警戒にあたりました。ボンボン蒸気船で朝鮮人がくるというので大騒ぎで警戒にあたりたり、屋根の上で怪しい物音がするというので槍でついたらネコだったり、大変でした。家はほとんど全壊、残ったのは半つぶれで、みんな気が立っていたんで、デマを信じてしまったんですね。朝鮮人がきらいだったとかいうことはありませんでした。

御真影
天皇陛下の御写真。当時は家庭や学校などに額にいれて飾られていた。

惨殺死体を 多く見た

福井光治さん

旭区・当時17歳

震災の翌日、学校に出ますと「朝鮮人が日本人を襲撃している」といううわさが入ってきました。もちろん、デマだったんですが、当時川島小学校の代用教員になったばかりの私は、それを信じて疑いませんでした。そして私がまず思ったのは、学校に飾

つてあった天皇陛下の御真影のことでした。民家に保管を頼んでまわったのですが、だめでした。それなら自分が死守しようと思ったものです。自衛団が組織され、実際、鎧兜よろいかぶとできた人もいましたよ。惨殺死体を数多く見ました。私の親類の者で、朝鮮人に似ているということで半殺しの目にあつたのもいました。

今でも、災害時のこの種のデマほどこわいものはないでしょう。正しい情報を流す必要性を痛感しています。

市電のなかには、焼かれて 骨ばかりになった死体が

北見新六さん

港南区・当時18歳

当時、東京都大田区の海苔問屋に奉公していましたが、ほとんど被害はありませんでした。ところが翌日になったら、「根岸の刑務所から囚人が脱走して悪いことをしている」といううわさが流れてきた

んです。主人の勧めもあって、実家の様子を見に行
くことにしました。自転車で行きましたが、瓦礫
の山で自転車ではほとんど通れなかったんですよ。
実家まで五時間か六時間かかったかな。途中、伊勢
佐木町通りに出たら、止まっている市電のなかでた
くさんの人が死んでいましたよ。焼かれて、骨ばか
りになってね。実家は無事でしたし、うわさのよう
なことはありませんでした。流言飛語はこわいです
ね。例の朝鮮人騒ぎにしても、まさぞえをくつた人
は気の毒だと思います。

つぶされた友人の上を 合掌して踏み越えた

山田浅造さん

金沢区・当時14歳

横須賀海軍工廠の製図班部屋で昼食後、横になっ
ていたとき、揺れがきました。あわてて机の下にも
ぐったが、外に飛び出そうとした友人は玄関のレン
ガにつぶされてしまい、自分たちが外に出るとき、

市民生活全般

新聞はすでに発刊されていて、大正十二年には報知新聞(発行部数、三十四万部)、国民新聞(発行部数、三十万部)、東京朝日新聞、東京日々新聞(現在の毎日)(発行部数、それぞれ二十四、五万部)、読売新聞(発行部数、十萬部)などがあつた。大震災前には一般家庭ではそれほど購読されていず、震災をきっかけに新聞は大衆化された。週刊誌は現在の週刊朝日、サンデー毎日が大正十一年に創刊された。ラジオ放送は当時はまだ行われていず、大正十四年三月にテスト放送、七月に本放送が初めて、行われた。電話は明治二十三年に開局し、当時の東京での加入者は百五十人余りだったが、大正十二年には四十三万人と大飛躍をとげた。公衆電話も明治末期には全国二百カ所に設置されていた。当時は自働電話と呼ばれていた。この時代の庶民の娯楽は芝居、寄席、活動写真、大衆文学(チャンバラ、ホームドラマ)などだった。大正六年頃には蓄音機が売り出され、流行歌も



次々生み出された。大正七年には児童文学雑誌、赤い鳥が発刊され、童

その上を踏み越えていかねばなりません。みな合掌して通りましたが、そのことはいつまでもつらい記憶として残りました。官舎の外へ出てみると、箱崎の重油タンクが燃えていました。

近くに火薬庫があり、そこに引火すると町中が火の海になるだろうとこわい思いをしました。近海の魚はくさくて、二カ月ほどは食べられませんでした。「横浜では死人が山に登った」と新聞の見出しが出てたね。多くの死者があとからあとから積み上げられて、先の死者が山に押し上げられたほどだったというこららしいですよ。

翌日には余震で金沢小学校がつぶれてしまいました。白山神社では幼児が崩れてきた岩の下敷きになり、次の日必死で探しまわった父親に奇跡的に救いだされたという話も聞いたね。農家だったから食料や、水に困るといふことはなかったです。むしろみなで助け合い、融通しあつたことが心に残っているね。遠くの親戚より、近くの他人といふことでしょうね。

竹ヤリを持って 押しかける

福田逸朗さん

栄区・当時13歳

大震災の翌日になって、朝鮮人が毒をまいたといううわさが立ったので、みんな竹ヤリをつくったり、窓の鉄格子を引き抜いたりして、朝鮮人の家に押しかけて行きました。この朝鮮人騒ぎのため、夜暗いとき、だれかと出くわすと、日本人同士は「山」「川」の合言葉で挨拶をしたんです。鹿児島の人や言葉になまりがある人は、とっさに返事できない。それでこいつは怪しいとなると、「君が代」を歌わせたものです。日本人ならだれでも歌えますからね。その話がデマだとわかったのは、三日目ぐらいじゃないかな。三日目に千葉の陸軍が治安に出てきましたが、「山」「川」の合図はとうぶん続きました。

話や童謡が流行した。「歌を忘れたカナリヤ」や「お手々つないで」「雀の学校」などはこの当時に生まれた。職業や商店も現在とは違ったものが多数あった。たとえば、煙突掃除屋。どの家でもかまどを使っていたので、なくてはならない職業だった。お湯屋と呼ばれた銭湯には、入浴中の人の背中を流す仕事をする人がいた。商店では洋品店を唐物屋（とうぶつや）と呼んでいた。靴屋もただ靴を売るだけでなく修理をするところが多かった。大都市には三越、松坂屋などのデパートもあり、東京などでは、それぞれが顧客獲得のために駅からの送迎自動車を走らせたりしていた。店を構えずものを売り歩く物売りの人達も活躍していた。炭屋、魚屋、油売り、水売り、



納豆屋、豆腐屋、甘酒屋、薬屋等、たいいていものは街を流して売り歩く人達から買うことができた。それぞれ独特の売り声や笛などを使って近くに来たことを家のなかの人に知らせた。大人の男性で、サラリーマンは背広姿、商店の商人はまだ着物姿が多く髪は断髪だった。女性はまだほとんどが着物姿で、髪は髪結い

路上をイモムシのように ころがる

柳下タマさん

保土ヶ谷区・当時9歳

子どもたちで、道路で遊んでいたときに地震がきました。みんなあつという間にコロコロとイモムシのようにころがされ、泣き叫んでいました。まわりの家はおぼれる、ものは飛んでくる、電線は切れるで、恐ろしいことになった、つぶされて死んだら大変だと思いました。いまだに忘れられません。

地震が治まってから、朝鮮人が子どもと女を殺しにくるといううわさが入り、地震よりも、その不安のほうが大きかったですね。朝鮮人から家族を守るために、近所のお父さんたちが家の前の竹やぶから竹を切ってきて、竹ヤリをつくっていました。まもなく兵隊がきて、デマだとわかり、その騒ぎも収まりました。

近所が助け合って あと片づけにあたる

塚本定雄さん

港南区・当時6歳

地震の翌日は道端に大きな蚊帳をつつて、近所の人二、三十人で一緒に入っていました。食料の支給はなかったけれど、堀ノ内は商店街なので、八百屋は野菜、魚屋は魚というようにいろいろ持ち寄り、雑炊やすいとんなどをつくりました。

けが人の手当もみんなでしたんです。私たち子どもも、包帯を巻くなど、いろいろ手伝いましたよ。あと片づけも近所の人が協力し合って、材料を持ち寄り、順番にバラックを建てました。映画館のなかに家財道具を持ち込んで、しばらく生活している人もいましたね。四、五日後には、店屋は再開していました。

何かあったときは、やはり近所の助け合いが大事ですね。



さんと呼ばれていた当時の美容師さんに、ひさし髪や島田(未婚)丸髷(既婚)などの日本髪に結ってもらっていた。しかし、大正四年には電気アイロンによるパーマができるようになったり、十一年になると若い女性の間でも断髪が流行したりして少しずつ洋装をする人も増えた。モボ、モガと呼ばれる人達が元町を歩いて話題になったりもした。



裏山からひいた水に 助けられた

関 ナカさん

磯子区・当時13歳

震災のときは、どれほど飲み水が大切かを知らされました。井戸が崩れたり、水がにごったりした家が多かったようですけど、私の家は裏山から竹のトイで清水を引いて使っていました。大震災でも清水が枯れることはめったにありませんからね。たとえば、当面食べものがなくても、水さえあれば、しばらくはどうか生き抜けます。今はどこも水道ですが、万一に備えて、水のことを自分たちなりに考えとくといいですね。

今でも霧がかかると 地震が心配に

小山竹松さん

鶴見区・当時15歳

尋常小学校を卒業して、家業の手伝いをしていました。その日、朝のうちは霧がかかっていましたが、そのうちに雨になり、また晴れ間がのぞいたころでした。地震は大きくて、座っていることもできないほどで、近所の畑に逃げて桃の木につかまっただけで、近くを歩きました。私の家は壊れませんでした。揺れがひどく、畑で野宿をしました。家のまわりでは火災は起きませんが、横浜方面から風について曇とか、障子とか、いろいろなものが降って落ちてきました。

今でも霧がかかると地震が起こるのではないかと、とても心配になります。

臨機応変の サバイバル・センスも大事

金子三郎さん

磯子区・当時7歳

地震のあった最初の晩は、余震のため家のなかじや寝られませんでしたが。しかたなく、サツマイモの苗木のあったところに四本棒くいを立て、ゴザをしき、蚊帳をつつて家族みんな横になりましたね。地震がドカッとくるのは避けられません。が、そのあとをどうしのぐかは、臨機応変りんきおうへんにやるしかないですね。季節がたまたま初秋だったからいいようなものの、もし冬だったら大変です。今ふうにいえば、サバイバル・センスも大事だね。

母を心配した親父は 自転車で都内の九段へ

矢澤友治さん

泉区・当時12歳

ちょうど母が都内の九段の病院に入っていて連絡がとれず、心配した親父は自転車に乗って、横浜から九段へ向かったんです。栗鴨^{つぎも}の知人宅に一度避難した母親は、そのあと一緒だった妹の手を引いて、横浜に向けてテクテク歩いてくるところだったそうです。幸運にも親父は都内に向かう途中、そんな母親にばったり出くわしたらしいです。当時、もちろん電話は不通でね。大きな災害があったときは、通信手段をどうするかが重要ですね。

地震の教訓から 縄梯子を用意

佐藤 綾さん

中区・当時9歳

私の家は現在の大学コーヒーのある相生町であり、当時、自転車と美津濃スポーツ用品を扱っていました。私は建てたばかりの母屋にいたために助かりました。店は二階が落ちてつぶれました。店のウインドウの飾りつけをしていた父と兄は、すぐ前の



羽衣町、市電の走る様子
商店の看板が右から横書きになっている。右手前の男の子は仕立て上がりの着物らしい荷物を肩に背負い、お使いに行く商店の小僧さんか？

横浜公園に逃げました。避難した公園には、樹木と広い道路があったので助かったのだと思います。

その晩は家族みなで野宿をしました。関内は市場から火が上がり、一晩で焼け落ちてしまいました。翌日、別なところに避難する途中で、私が地割れに落ちましたが、けがもなくすみました。至るところ死体でいっぱいでした。現在では多くの人を守ってくれた樹木を記念して、噴水のところに碑があります。今後、地震が起きたときには、しばらくはじつとして様子を見たほうがよいと思います。私は現在二階に住んでおりますので、縄梯子^{なわはしこ}を用意しております。

馬を洗う大きな桶に 飛び込んだ客人

酒井才一さん

泉区・当時19歳

たまたま家族みんなが土間で縄をなっていました。客一人がきてて、しゃべりながら仕事をしてた

ところへグラツとききました。みんなが庭へ飛び出したとき、その客が、馬を洗うのに使う大きな桶へザブンと頭から飛び込んでね。気でも狂ったのかと思いましたが、あとで聞いたところ、桶に入っていれば地割れに安全だろうと考えたとか。とっさのことなのに、よく気がついたもんだと感心しましたね。たしかに地割れはこわいですよ。

いとこの足が 地割れにはさまれた

吉村太市さん

緑区・当時14歳

あの日は、川崎のいとこの家に泊まりがけで遊びに行っていました。午前中は農作業を手伝って、午後からお祭りに行く予定にしていたのです。馬に飼葉かいばを与えていたら、ドスンときた。外に飛び出たら地面が大きく波打ってました。前に三坪くらいの池がありました。その水がきれいに空になってしまいました。なかにいた鯉こいなんかも一緒に外に放り出さ

まぶし

わらなどを束ねてつくり、よく成長した蚕かいこを移し入れて、まゆをつくらせるたよりとするもの。蚕のすだれ。

れてしまっていました。

地割れができて、いとこが割れ目に足をはさまれてしまい、それが閉じてしまったからなかなか抜けないんです。しばらくして私が引き上げたら、なんとか抜けましたが、危なかったですね。そういう経験をしましたから、「大きな鉄板を二枚ぐらいいは常に用意しておけ」と、若い者にはいっています。

気がついたら 一階にころがっていた

内田辰雄さん

旭区・当時14歳

二階で蚕かいこのまゆのまぶしをしていたのですが、ドカーンときて、気がついたら玄関から二十メートルぐらいのところ転がっていましたよ。どうやって二階から梯子を降りたのかまったくわかりませんでした。

幸い、家は傾いただけですみましたが、こわくて家に入ることなどできません。夕食は裏の竹やぶで

食べました。けれど、そこはまだ子どものことですから、赤飯が炊いてあって、なにか遠足にでも行ったような気分でした。土間に置いてあったかつおぶしが入っていた箱がなくなっていたので、「土間にできた亀裂に落ちたんだろう」と父や母と話したのを覚えています。「地震がきたら、外に出ないで丈夫な家具の下に隠れる」と子どもや孫には、日頃からいい聞かせています。

石ウスのかげに隠れて 助かった

山田秋平さん

旭区・当時13歳

私の家は土間が広く、大きな石ウスが置いてありました。グラツときて、とっさに、がんじょうな木組みで囲った石ウスのかげに隠れたんです。土壁が崩れ、もうもうと土けむりが立つなかで、初期振動のひとつときを過ぎました。ふだん子ども心に、もし地震が起きたら石ウスのそばに隠れようと思って

いました。潜在意識といいますが、それが役立ったようです。今日でも、いざつてときは常に考えとく必要がありますね。

落ちてきた瓦で 祖母がけがをした

成田新太郎さん

磯子区・当時8歳

あのときは祖父母と一緒にいて、家族みんなで裏の竹やぶへ逃げようとなりました。ところが運悪く、祖母は家を出るとき、落ちてきた瓦が足にあたってけがをしてね。一方、祖父は、立てずに家のなかで転がっていた。年のせいで、私ら子どものように、すばやく動けなかつたんでしょうね。けれども、かえってそれが幸いしたというか、けが一つしないですんだんです。地震のときすぐ飛び出すのは、場合によっては考えものだと思います。

集落の全部の家が つぶれなかつたヒミツ

小川好忠さん

旭区・当時11歳

私の住んでいた集落には、十六軒ほど家がありまして、どの家も、丘陵を削ったような場所に建っていたからなんです。もし、削った土で埋め立てたようなところに家があったら、そうはいかなかつたと思いますね。昔の人の知恵はすばらしいと思いますね。たとえ生活に便利でも、埋め立てたような場所には、決して家をつくらなかつたわけですから。今日、建売住宅を選んだりするとき、そんな点に気をつけるといいですね。

渚に近い砂地の家々が いつかにつぶれた

加藤兼吉さん

磯子区・当時12歳

私が住んでいたのは屏風浦のすぐ近くで、グラツときたとたん、入江の奥にあった集落はどの家もいつかにつぶれちゃった。すごかつたですよ。一瞬にして家が倒れたものだから、パーッと海が見渡せるようになった。ちょうど集落のあつたあたりは、入江の奥にできた砂地だったんですね。今は住宅の事情が厳しく、いろんな土地に家が建つてますが、自分の家がどんな地盤のところにあるのかは、日頃知っていたほうがいいでしょうね。

建てかけの家を 懸命に守つた

鈴木 潔さん

西区・当時19歳

親父は大工の棟梁で、私はある建築現場の監督をまかされていました。手がけた家は、屋根ができ、内部の造作にかかつたばかりでした。そこへガガーンときたのです。四人ほどの職人を指示していたのですが、なんとか建てかけの家を守ろうと、みんな

に号令をかけて、筋交を打ちつけさせたり、それはもう必死でした。地震がこわいなどと考えている余裕はなく、建築中の家を守りたいと、それだけででした。今思うと若かったんですね。

筋交
建築物の軸組みに耐震、耐風などのために挿入する材。

つぶれた家から 「助けてくれ！」の悲鳴

小山兵庫さん

泉区・当時19歳

私の家は半壊ですんだのですが、近所の家はほとんど全壊したようです。つぶれた家から「助けてくれ！」という悲鳴が聞こえるんですが、手の打ちようがありませんでした。こんなとき、鋸のこぎりでもあればよかったです。それを探し出すのが容易なことじゃない。とにかく、災害時にはだれもが正常でなくなっているのです。近所の男の人が素裸で訪ねてきたのにはびっくりしました。

あとになってつくづく思ったんですが、やはり鋸などの救助用具をどこか安全な場所に保管してお

く必要があるでしょう。また、消火器を各人が備えて、火が出たらただちに消すことが一番大事だと思いますね。

消防車はたった一台 男たちは消火に必死だった

榊原秀義さん

港北区・当時9歳

時計屋だった私の家は、神奈川宿の本陣があった地域で、地震発生とともに横浜方面から、どんどん燃えてきましたね。女子どもは近くの成仏寺じょうぶつじの境内へ逃げ、男たちは消火に必死でした。管内には消防自動車があった一台しかなかったため、そりやもう大変でしたよ。

大地震が起きたときは、まず炊事などの火元に気をつけなくちゃいけません。また、できるだけ早く類焼をくいとめる必要がありますね。地震で一番こわいのは、火災なんです。

腐つていく指から 指輪が抜け落ちていく

石黒徳衛さん

港北区・当時15歳

「ダダッ」と空気の裂ける音がしたように感じた瞬間、グラグラときました。無我夢中で外に飛び出しましたが、大地震のときは何も考えることができませし、歩くことだつてできませんよ。中目黒の会社に勤めていたんですが、同地は火災も起きず、広場もあつて、ほとんど被害はなかつたようです。倒れたレンガ造りの家の下敷になつた馬や、両国にあつた被服廠跡地に焼けただれた死体が積み重なつていたこと、また、川に無数の死体が浮かび、腐つていく指から指輪が抜け落ちていく光景などが生々しく思い出されます。まず火を出さないこと、また、日頃から災害時に冷静に行動することを考えておく必要があると思います。



麦田の市電のトンネル付近

左側に置かれていたのは大八車。右手前には女の子が小さな子を背負つて子守をしているのが見える。トンネルの山は山手。洋館が建ち並んでいるのがわかる。

使つていた七輪に とっさに水をかけた祖母

土屋重雄さん

西区・当時11歳

昼めしだったので、ちょうど家族がちゃぶ台につこうとしていると、グラツときて棚からガラガラものが落ちて、そりやもう大変だね。祖母はまだ台所で七輪を使つていたのですが、とっさに七輪を流しにのせて水をかけたんです。昔の人は腹がすわつていて、たいしたものだと思います。水をかけた七輪からは、もうもうと白い煙が立ちましてね。震災の記憶はいろいろありますけど、あの印象はいまでも忘れられません。

わらぶきより被害の 多かつた瓦屋根の家

杉山新一さん

磯子区・当時8歳

ちようと食事にかかろうというときでした。グラッと大きく揺れがきました。もう何が何やらわからず、気がつく到庭に飛び下りていたんです。

私の家は農家で、わらぶきでしたが、地盤がよく、少し傾いただけで、家族も全員無事でした。まわりの農家もわらぶきの家屋に被害はほとんどありませんでした。ただし瓦屋根の家はつぶれたところが多く、近所の旅館のおかみさんが、倒れた家の間にはさまって死んだことを覚えています。今は瓦屋根が大半ですので、地震がきたら大変だと思います。それに昔は堀割りがあり、水が豊富にあっただけで、今は道路になっていますから、火災の被害も大きいと思います。やはり、地震のときは火の始末を最優先すべきです。

黒煙たちこめる空に モクモクとキノコ雲が

小野一郎さん

港北区・当時16歳

当時、まだ学生で、杉並の実家にいましたが、ドカーンという大きな揺れで庭に飛び出していました。

上空を見上げると黒煙立ち込める空にモクモクとキノコ雲が立ち上がっていました。そう、ちょうど原子爆弾を落としたときのあれとそっくりの形です。

幸い、私の家は傾いただけでした。まわりの家も被害は少なかったようです。やはり、震災のときには火を出さないことが最も大切でしょう。火事になれば、それほど被害は拡大しませんからね。それと災害時にどのように冷静に行動するか、日頃からそのことについて考えておくべきだと思います。

体験を語ってくださいました方々
(掲載順)

岩本喜平さん

山本甚一郎さん

矢作親治さん

中川又吉さん

石橋寿六さん

漆原玄太郎さん

岩崎 肇さん

佐藤順平さん

田中金次郎さん

岩崎家寿子さん

高橋順蔵さん

小川名 丁さん

原 千代松さん

加藤まさ子さん

小松宇兵衛さん

石川鉦市さん

相田倉松さん

小出シズ子さん

瀧美徹弥太さん

金子富男さん

安西正治さん

笠渡卓英さん

持田 一郎さん

川畑孝蔵さん

徳久 芳さん

能倉トミさん

新井泰蔵さん

河原利助さん

市川菊次郎さん

三浦 豊さん

渋谷清太郎さん

河原 章さん

稲葉佐吉さん

高橋正三さん

鈴木 潔さん	佐藤 綾さん	山田 浅道さん	渋谷 将さん	吉原朝次さん
小山兵庫さん	酒井才一さん	福田逸朗さん	岩崎伊三郎さん	菊地道之介さん
榊原秀義さん	吉村太市さん	柳下タマさん	田辺清太郎さん	大須賀 清さん
石黒徳衛さん	内田辰雄さん	塚本定雄さん	高橋六三郎さん	福島秋好さん
土屋重雄さん	山田秋平さん	関 ナカさん	小松良雄さん	吉野一雄さん
杉山新一さん	成田新太郎さん	小山竹松さん	岡本新太郎さん	天野一雄さん
小野一郎さん	小川好忠さん	金子三郎さん	福井光治さん	斉藤 豊さん
	加藤兼吉さん	矢沢友治さん	北見新六さん	池田嘉代さん

第三章

大地震の教訓を

次世代に生かしてほしい

〈トーク&トーク〉



バラックの前にて(三春台)

地震の何がこわかったか

座談会その1 南区のみなさん

出席者（発言順）

岩田栄一さん（74歳）

相澤シゲさん（76歳）

山下鶴次さん（80歳）

阿部倉之丞さん（85歳）

司会　本日は関東大震災を体験なさったみなさんにお集まりいただきました。歴史の生き証人として、その体験を若い世代に伝えていただき、私たちの防災の心構えの指針にさせていただきます。まず、当日はどんなでしたか。

岩田　私は当時小学校二年生、八歳ですね。南吉田町、今は横浜橋商店街の野村外科病院というのがありますが、あの裏側の長屋に住んでました。ちょうどその日は学校の始業式で早く帰ってきていて、父親は職人だったんですが、仕事が休みでたまたま家におりました。一歳になる弟が、パンツいっちょうで家の前の道をはいずって遊んでいて、父親があやしていた記憶があるんです。

地震の起きた十一時五十八分というのはちょうどお昼のしたくどきで、入り口から「ごはんだよ」って、呼んだんです。弟が入ってきて、父親がそばにきて、そのときあつという間ですね、下からドーンときてね、気がついたときには縁の下に入りこんでいました。

今の家は柱をボルトでしめて、土台もしっかりしてありますが、昔は土台石の上に柱を置いただけ。屋根は瓦で重いですから、ドーンといったときにはずれてつぶれるんです。あのとき、縁の下にもぐり込んでよくはさまらなかつたねえ。地震の揺れがしまつたときにはもう頭から顔から土ほこりで真っ黒け。よくまあ助かってはいずつてきたと思う。

大きい地震は下からくる、あれはもう防ぎようがなかつたですね。この辺は火災がひどかつたんだけど、火事が起きるといのは子どもですから、そのときは気がつかなかつたです。家族の者は、けがもなく稲荷山のほうへ逃げました。

相澤　屏風浦に住んでおりました。家が半農半漁で、農業と海苔をやっておりました。その日は土曜日でしたね。私は小学四年生でした。地震のときは庭にいたんですが、揺れがひどくて起きようとしても、立つていられない。地割れが目の前でできていくし、こわかつたですよ。農家の大黒柱や大戸はしっかりしていても、倒れないんです。崩れた米俵にはさまれた姉さんとその子を、やっとの思いで助け出して大黒柱へ逃げ



道は地割れしているし、頭の上には煙がきいてるし
火ははつてくるしで、もう一日じゅう逃げどおし。

ました。

地震が通る道すじというのがあるんですね。同じ草ぶきの家でも、私の家はその道すじから外れていたおかげで、つぶれませんでした。火事もなく、磯子へ通じるトンネルがつぶれて、なかで娘さんが一人だめだったくらいです。

阿部倉之丞さん



山下 私はね、生まれたのは明治四十三年、もう小学校を出て、勤めてました。工場は南喜多町、今でいうと高砂町と新川町の間の松永ボタン工場です。ちょうどその年は父親が残した借金を返し終わったときで、これは返さなきゃよかった(笑)、という思い出がありますね。

阿部 明治三十八年生まれ、十八歳かな。大地震のときは福富町一丁目三十八番地、この住所はよく覚えてますね。ランプ屋に丁稚奉公してました。

ドシンと音がして、上からつるしてあったランプがガシャガシャ落ちてくる、そのうちに立っていられなくなつて、外にはいずっていきました。前の土蔵は崩れる、木は倒れてくるしね。主人が出てきて「大地震だ、子どもを頼む」っていわれて、着のみ着のまま

で飛び出したの。そのときは、またすぐもどってくるような気持ちがあったんだね。とんでもなかった、あんな。一日中、逃げどおしでした。

吉田橋のほうへいったら、瓦の家は崩れてる、みんななさいよ」っていつてくれてやっとな乗ったんです。伝馬船ね、なかにはもう人がいっぱいでした。そのうち火が迫ってきて、舟もあぶなくなってきた。

上上がったけど、小さい子を背負っているし、道は地割れしているし、頭の上にはガンガンと煙がきてるし、火ははつてくるしで、夢中で逃げたの。ほんともう、そのときはかりは生命はないと思った。桜木の公園で一息ついたんだけど、そのうち宮川町のほうからガンガン煙がきて、とてもいられない。十人ぐらいがグループになって、会ったり別れたり、別れたり会ったりして一緒に逃げました。桜木町の貨物線の土手のかげでまた一息ついて、そこは青草が背丈くらい伸びていたんだけど、それまでポーポー燃えだし、また逃げ出しました。もう一日じゅう逃げどおし。夕方になって公園にもどったら、倉庫で米とビール



岩田栄一さん

を配ってるというんだけど、小さい子をおぶって取りにいけなかった。そのころはビールなんて貴重品で、神棚にかざってお盆に飲むくらいだったんです。ビールが飲めなくて残念だった。(笑)でも、人間ってものはいざとなると食わなくても平気だね、食う気にもならなかったしね。道端に死んだ人もずいぶんいたけど、もう誰も目もくれません。やっと夜明けになって僕たちを探していた主人夫婦と再会したときはうれしかったですね。もう泣いてしまったねえ。

山下 この辺は火事がすごかったんです。もう、火を消すより逃げるほうが先でね、何万人って死んでいるんじゃないですか。

相澤 燃え残ったほうが少ないのね。

阿部 そう、お昼どきでお勝手の火があったんでね。

命が先だからね、火を消している人はいなかったね。

岩田 おふる屋さんからも火が出たでしょう。ああなったら手のつけようがないね。横浜じゅうが火の海でね。東京は竜巻がすごかったらしいけど、横浜は聞かなかったね。

山下 真っ赤に焼けたトタン板が飛んできたのを山の

上から見たよ。

阿部 ゴオーッとすごい地鳴りの音が聞こえたね。着のみ着のまままで逃げたんです。欲も得もなかったよね。死んだ人の懐にザラザラお金が入っている財布があったけど、目もくれない。今ならもらっちゃうけど(笑)、そのときはただ命だけが助かればよかった。

山下 ものを取りに帰った人が多く焼け死んだんじゃないかな。私は妻の畑にイモを何回か取りに帰ったけど。

相澤 主人が当時住吉町で丁稚奉公してましてね、店の人と布団をしょって関東学院の山の上逃げたそうです。そしたら布団を持って逃げた人は、それで焼け死んだ人が多かったようです。その家には子どもが七人いたんだけど、逃げる途中みんな別れ別れになって、翌日焼け跡で会えたそうですけど、親御さんは気が気じゃなかったでしょうね。

山下 家族が別れちゃっておたがいに探しあってね。治まってから焼け跡にそれぞれきて、あれはけっこう会えるもんだね。

岩田 桜木町と高島町の間はずいぶん高いコンクリ

コンクリートの塀に消し墨でたずね人の名前が
ぎっしり書いてあって、ずいぶんもんだった。



相澤シゲさん

私はY校に避難したんですが、前の小学校がつぶれて、その材料でバラックをつくりました。

トの塀があつてね、そこに消し墨でたずね人の名前がぎっしり書いてあつたね。すごいもんだつた。よくまあ、あれだけ書けたものだと思つた。次の日がすこかつたね、子どもを探して呼びあつたり、泣きわめく人がいっぱいいて。

阿部 そう、あのころは広報もない、指揮するものもいなかったし。

山下 役所なんかないと同じで、今みたいに食料を前もって確保しておくなんてできないよね。避難場所なんかもなかったし、原っぱか竹やぶね。

岩田 二日目くらいに配給がありましたよね。玄米おこわみたいの。ところが消化しないでトイレでみんなくだしちゃつたのを覚えてる。

三日目か四日目には家族で川崎の親戚の家に歩いて行きました。生麦で夜になってしまつて、知らない家に泊めてもらつたんです。その川崎の家の裏がナス畑で、配給のうどん粉とナスで朝昼晩。ナスのすいとん、あれは忘れられない。毎日、朝昼晩だもの。

山下 私はね、学校へ小さな袋を持って配給米をもらいにいった記憶があるんだね。

相澤 家のほうには横浜から人がどつと避難してきまして。畑のものを取って食べたりしてましたけど、私たちも困つたときにはおたがいさまで、好きなだけ持つていきなさいって食べさせてあげました。

山下 水は井戸を飲み水にしてたから困らなかつたですね。私はY校に避難したんですが、前の小学校がつぶれて、その材料でバラックをつくりました。

岩田 なんでも自分でやつたからね。いろんなことがうまくなつたよね。みなさんがよくかばいあつて、あとで困つたということはなかつたです。日頃のご近所づきあいが大変なんです。地震が治まつて、バラックができたころ、アメリカから粉ミルクの配給があつておいしいと思つたねえ。だからこのあいだのサンフランシスコの地震があつたときに、思い出して義援金を送つたんです。あのときにアメリカやほかの国に助けられた人は大勢いるんじゃないですか。

阿部 立ち直りはわりと早かつたね、みんな一生懸命だったから。銀行なんか早く始まつたし、経済的に混乱するということもなかつた。終戦後にくらべたら上等だつたらうね。



山下鶴次さん

山下 あのと、市の土木課がボーリングをずいぶんして地質調査をしましたね。区画整理なんかがされて街づくりはよかつたんじゃないですか。

相澤 家は海辺だったので、川で死んで海に流されて、浜に打ち寄せられた人の数がすごかつたんです。それを青年団が引き上げて、積み上げて油をかけて燃やし、その場で火葬して無縁仏のお墓に入れたんです。もう二山も三山もありましたね。地震そのものよりも、あとのほうがこわかつたですね。

岩田 いかだの上で焼け死んだり川で死んだ人が多かつたんですね。子ども心に覚えてるんだけど、まだ埋葬してない死体を積み上げてトタンをかけただけの山に、雨が降るとリンが出るんですよ。鬼火つていうあれ。

山下 ほんとに出るんですよ。ありゃ、不思議なもんだね。チロチロ燃えてね。

相澤 家は焼けなかつたんですが、また地震がくるといけないので、本家の広い庭に蚊帳をつつてむしろをしいて、しばらく野宿をしていたんです。そうしたら、夜になると朝鮮人がきて井戸に毒を入れるといううわ

さが広まってね。急いで井戸のふたをして、兄なんかも夜になると夜警に出かけちゃうし、こわい思いをしました。

岩田 朝鮮人が襲ってくるっていう騒ぎね。夜暗くて顔がわからなくて、どもつたら朝鮮人とまちがえられて殺されちゃったという話も聞いたしね。朝鮮人は日本語がうまくないから、言葉で朝鮮人かどうか決めたんだね。

山下 忠臣蔵みたいに「山」「川」の合言葉をつくつてたね。沖繩の人や地方の人の言葉が関東とちがうでしょう、朝鮮人と間違えられてやられちゃうんだよね。

司会 デマを打ち消す新聞とかの情報は。

山下 新聞は号外ぐらいなもんだからね。

阿部 電話なんて普通の家にはないし。もちろんテレビも。

岩田 うわさが伝わるのは早いねえ。それに一のこと
が五になるし、肝心なことはそのとおりに伝わらないね。

山下 避難したY校には銃なんかがあつたね。ニュースが入らないので、人にそういわれれば信じちゃいます。

浜に打ち寄せられた死体の数がすごかつたんです。
地震そのものよりも、あとのほうがこわかつたですね。



共産党が何かするといったうわさもあつたね。あのとき、大杉栄なんか殺されたでしょう。

岩田 流言飛語については、今は情報機関があるから心配は少ないんじゃない。

司会 もし、また大地震が起きたら体験者としてどうしたらいいと思いますか。たとえば「地震だ」というそのときには。

岩田 はって歩けないんだから、しょうがない。あんなとき歩いたら曲芸だよ。

相澤 昔は庭が広がったから、外へ出ればよかつたけど、今はねえ。机の下にもぐるとか、まず火の始末です。自分の家から火事を出さないようにね。

岩田 いまは何かあつたら大元のほうで消してくれるし、徹底してきているんじゃないですか、まず火の始末というのは。地震三原則を事あるごとに行っているし、九月一日には家庭防災の訓練をやっているし。

相澤 関東大震災でこりてるもんですから、ちよつとの揺れでも、飛び出そうと考えちゃうんですよね。揺れているときは戸だけは開かなくなるので、開けておきます。

山下 それから流言飛語っていうのが一番こわい。確かな情報を聞いて行動しないと。だからラジオは年中持つて、決まっている避難場所に逃げる。こんなことはもう徹底して頭に入っているんじゃないですか。

司会 でも、若い人は天災に対する感覚が鈍くなってるんですよ。地震といつてもすぐやむだろうと思うし避難場所も知らない人が多いんじゃないでしょうか。

相澤 私達は震災にあつて、戦争でひどい目にあつて、何があつてもさほど騒ぎませんが、若い人たちが何かあつたときに、耐えられるかどうか、そのほうが心配です。半狂乱になっちゃうんじゃないですか。

山下 今考えるよね、あわてるとだめ。ゆつくりとね、落ち着いて動くことです。

相澤 今は自動車が多くてね。混乱は起るでしょうね。家のまわりの青空駐車は多いですよ。

岩田 車はみんなガンリン積んでいるんだから、火がつけばバーンとなるし、逃げるとき人がよけて通らなきゃならないし、あれはこわいですね。あの青空駐車管理を老人クラブにまかせるわけにいかないのかと思ふね。

相澤 自動車の渋滞じゅうたいもおっかないですね。

司会 技術が進歩して、情報不足からくるこわさという面では不安は減つたけれど、反面、車社会になって別の種類の危険は増してきたということなんです。今日は貴重なお話をうかがい、地震に対処する心がまえを再確認できました。ありがとうございます。

地震の何がこわかったか

座談会その2 神奈川区のみなさん

出席者(発言順)

島根東吉さん (77歳)

小林時松さん (79歳)

大久保喜八さん (75歳)

司会 地震が起きたとき、皆さんはどうされていましたか。

島根 うちは一ツ谷通りの商店街で染物屋をやっていたんですよ。染物屋ですから、張り場といって染物を干すところがあった。三十メートルと二十五メートルくらいかな。おふくろが、「その真ん中に逃げろ」というので逃げて、そこにいました。地震がちよつとやんだときに畳をもってきて敷く。こうすれば地割れが起きて大丈夫でしょ。それから、竹や何かを柱代わりに立てて、その上に唐紙を乗せて夜露を防げるようにした。若い衆もいたけれど、それを全部おふくろが指揮してやったわけです。

司会 あのときのおふくろはえらかったと思う。
お父さんはどうされていたんですか。

島根 親父は外に出ていたんですよ。あとで連絡があ

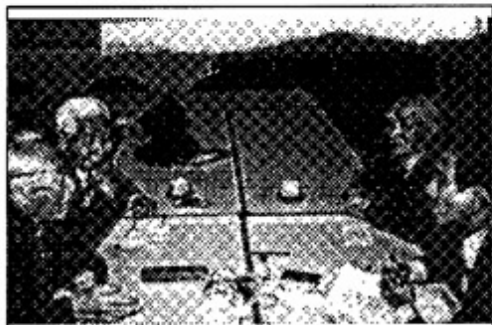
ってわかったんですが、横浜にある日清製粉ビルの九階建てのビルの工事現場から落ちて大けがをしたんです。昔は木で足場が組んであった。それに何度か引っかかりながら落ちて、最後はフイゴ場といって、要するに鍛冶屋さんだな、そのトタン屋根のところに着ちたらしい。だから、奇跡的に助かったわけです。

ご近所の方にかつがれて夕方に帰ってきましたが、「どうだ」と聞いたたら、親父がうつろな眼で「家か?」といったことを覚えています。近くに医者がいなければ、逃げてきたから何も医療器具は持ってない。「肩の骨を折っているけど、冷やすほかに手がない。どこかへ行って氷を探してこい」というので、店の若い衆が氷屋から買ってきた。氷は一貫目(二三・七五キログラム)一円、当時としては高かったですよ。それでも買ってきたわけです。

司会 家は大丈夫だったんですか。

島根 つぶれなかったけど、何しろ一日に二百四十六回余震があつて、休む間もなく揺れるんだから、こわくて家に入れないですよ。畳や唐紙を持ち出すのが精いっぱい。

小林 うちが石川町の商店街で八百屋をしてましたね。母親が「地震だよ。こっちにおいで」といって、私を抱えるようにして店の外に出た。出て、電柱につかまったんですよ。その瞬間に目の前が暗くなっちゃ





った。向かいのコークス屋が倒れてきたわけです。

島根 埋まっちゃったわけだ。

小林 「向こうを見てごらん」という母親の声が聞こえるから見ると、明かりが見える。「コークスと石炭ばかりだから、足が痛いだろうけど、ガリガリやると崩れるから、明かりのさしているほうへ出るんだ」というからやめたわけですよ。それに、私の叔父が大勢若い衆を連れてきて、前のつぶれた家を上から壊したんです。だから、出られたわけです。

表の通りに出てみたら、前の山が崩れて、焼けた家が落っこつてくる。左を見ると日光堂というパン屋が燃えている。山のほうは危ない、ということまで川のうちへ逃げたわけです。何とか川べりに出たのはいいけれども、子どもがいる。どうやって渡るか。そうしたら船があった。みな、船に乗ったのはいいけど、今度は漕ぐものがない。

島根 エンジンはないんだし。

小林 私は小さいときから泳ぎをやってきましたから、ヒモを持って、向こう岸に渡ったわけです。向こうにも人がいるから、みなで引張った。そうやって渡って、松影町通りを通って、大通りに出た。そして、今の野球のグラウンドのあるところの公園に逃げた。当時はグラウンドに柳が植えてあって、丸太ん棒に穴を開けて、網を通して、それが囲いになっている。なかに入

ると芝があった。この芝なら大丈夫だろうというので、みな逃げてくる。そうすると、家具とか夢中で持ってきたものをここへみな置いてしまったわけです。

島根 それが一番こわいんだよ。

小林 でも、燃えてきた。風下だから、火が横にはいずつてくる。川幅なんかなんでもない。一回、二回くるうちに芝が枯れて真っ赤になる。三度目くらいになると、これが燃えちゃうんです。想像もつかないくらい強い風ですから、置いてある荷物に火がつく。

島根 火炎放射機と同じですよ。

小林 息ができない。苦しいから、みな倒れちゃう。一度倒れたら、立てませんよ。ここで倒れてそのまま亡くなった方は、すごい人数ですよ。

島根 倒れて死ぬという人はまだいいほう。立ったまま死んでいる人がいる。

小林 だからいちいち顔をのぞき込まないと、生きていくのか死んでいるのかわからない。私も倒れたんですが、母親に襟首をつかまれて、引きずられて行ったのを覚えてます。それで藤棚が吊ってあるところへみな逃げた。そこは一段下がって、水道管が破裂したから、水たまりになっていたんです。私のおなかの上くらいまでありましたよ。

司会 そこへお母さんと一緒に逃げたわけですか。

小林 ええ。ほかの家族とはバラバラだったんですが、



小林時松さん

隣りにフトンをかぶっている人がいたので、「すみません。入れさせてください」といって、顔を見たら、それが親父(笑)。そして妹がいた、兄がいたと。逃げるなら公園、というのが、みな頭の頭にあっただんでしょね。

島根 それと同時に、「あっちに逃げれば大丈夫だ」と誰かがいうのね。それにつられて行く。風上とか風下じゃない。人の案内で行っちゃうわけですよ。

小林 そうそう。で、そこに逃げた人は助かったわけです。落ち着いてくると今度は恥ずかしくなる。なぜかという、女も男も裸同然なんです。消すの間合わなくなるから、無意識に脱いじやうわけ。「何かないかな」と見回すと、水たまりに着物がいっぱいあるから、それを着る。人のもの、自分のもの、関係なし。私なんか、大人の紋付き羽織を着せられましたよ(笑)。

司会 大久保さんは根岸にいらしたそうですが。
大久保 家の裏ががけなんです。地震のゴーという音とがけの崩れる音と、それから地響き。ズッシーンと、まず一発きた。農家だから、一尺二寸(約三十六セ

ンチメートル)の大黒柱があって、僕はそこにかじりつきましたよ。

司会 家は大丈夫だったんですか。

大久保 ええ。農家は土台の石が玉石といって丸い石なんです。樫の柱の下にそれが入っている。揺れても、それがクッションの役目をするんです。昔の人の知恵ですね。金がかかりますから、今の建築ではやっていませんけど。だから、あの辺は全然つぶれなかった。

司会 火災も起きなかったんですか。

大久保 農家は茅ぶきだから、火事に対しては非常に神経質ですよ。一つの例として、ごはんなんか炊く釜場や風呂場は別棟ですよ。まず火を消す。だから、火事は全然起きなかったですよ。でも、あとが恐ろしいわけだ。余震はあるし、いろんな騒動があるでしょう。とにかく、家に入れないわけです。絶対大丈夫だという自信もあるけれど、こわくて入れない。半月は入らなかった。

司会 裏のがけが崩れたというお話ですが。

大久保 根岸はがけが多いんですよ。ふつうはがけ崩れというのは、下にスーと落ちるでしょ。そうじゃな

女も男も裸同然。着ているものに火が付くから
無意識に脱いじやうわけ。

食べものは分けあって食べてたね。あれは大正時代の人間のいいところ。思いやりがあった。



島根東吉さん

くて、振幅が起きる。横にグラグラ揺れるわけです。

司会 はっきり見えるわけですか、揺れてるのが。

大久保 そうそう。横振れがあつて、そのうちに頂上

が吹っ飛んじやったわけ。地震学上有名な話ですが、磯子の皆楽園。あそこに旅館があつて、これが吹っ飛

んだ。ずいぶん女中さんが亡くなりましたよ。翌年の

一月十五日の丹沢山の地震。これも大きかったけど、

そういう経験があるから、そんなにあわてなかつたね。

司会 大震災の経験が生きているんですね。

島根 安政二年に大地震があつたでしょ。それを経験

した人が町内において、その人が地震のときに町内を駆けずりまわつて、「火を消せ。火を消せ」つて、飛んで歩いてた。だからこの周辺は火事が起きなかつたの

だと思ふな。今は道路はアスファルトでしょ。あれが燃えたら熱くて歩けない。どんなはきものをはくかとい

うのが問題ですよ。

小林 ゴム底のものをはくことが一番だ。今の電柱は、

コンクリートになってますね。あれが折れたらどうなるかなと思ふ。それから地震のときはテーブルの下

に隠れるといつていうでしょ。あれは嘘。

島根 出られやしないよ。「鋸とか釘抜きを持って机

の下に入れ」というのが鉄則でしたよ。

司会 小林さんは、その後どうなされたんですか。

小林 両親が「ここにいてもだれも助けにこない。どつか逃げる場所があるはずだ」といって、市役所の

前の通りに出たんです。出たら橋がかかつていた。

島根 鉄の橋ですよ。港橋。

小林 港橋か。関内の駅を降りて、文化体育館のほう

へ行くでしょ。あそこに橋がかかつていたんですよ。

島根 木が燃えて鉄骨だけ残っている。

司会 骨組みだけが残っていたわけですね。

小林 厚い板だし、まわりに燃えるものがないから、

トロトロと燃えている。それじゃなくてもこわい。穴が開いているしね。だから燃えてないところをはいず

つて行くわけです。渡ったら右側に果物屋があつて、スイカやメロンが転がり出している。見た瞬間にのど

が渴いてきた。スイカを割ったんですよ。そうしたら

ゆだっちゃつてて(笑)。

島根 川のなかは人の死骸でいっぱいでしたよ。万世

橋のあたりは死んだ人間で埋まつた。



大久保喜八さん

小林 今の新山下の橋。海との境なんか死骸でいっば

いだったんです。熱いから川のなかに顔を突っ込む。

突っ込むと、船の油やなんかがいっぱい流れてくる。

島根 その蒸気を吸って、息が止まっちゃうわけだ。

小林 潜ってから水面に出ると、頭にその油がくっつ

く。水の上に油が流れているから、これに火がついち

やう。今度は消せない。それで、みなまいっちゃった。

島根 焼けているのは首から上だけですよ。

司会 窒息死ですね。

大久保 僕の親戚の人が住吉町にいたんですよ。その

人が行方不明になった。三、四日たって、どうも弁天

池にいるらしいと。それで兄貴なんかが行ったんです

よ。そうしたら見つかったけれど、もう半死半生です

よ。橋がみんな落っこっちゃってるでしょ。それで石

川町の西の橋ですか、あそこの橋げただけがまだどう

やら残ってた。そこから根岸までおぶってきた。

島根 昼間だって煙や何やかやで真っ暗。太陽がただ

赤く見えただけ。

小林 臭いもすごいし、それはもう浅ましいものです

よ。それじゃ人のものをふんだくって取っちゃうかと

**地震も恐ろしかったけれども
それより恐ろしいのはデマですよ。**

いうと、それはしない。これは不思議。

島根 分け合って食べてたね。あれは大正時代の人間

のいいところ。思いやりがあった。今はどうか。

大久保 うちの畑にあるものは全部盗まれましたよ。

でもみな被災者ですよ。「困っている人に家のものを

使ってもらうのは結構なことだ」と親父がいつてまし

た。当時は、そういう思いやりもあったね。

小林 私の田舎は下平間しもひらま(伊勢原市)なんです。そ

こに避難しようと歩いてたら、煮豆屋に会ってね。親

父がいろいろ買ったわけ。八百屋だから腹掛けをして

いて、震災の日の売り上げが入っていたわけです。そ

うしたら、中村町の橋を渡ったところで、根岸の刑務

所を釈放された囚人がぞろぞろ歩いている。その人達

に親父は分けてあげましたよ。

大久保 地震も恐ろしかったけれども、それより恐ろ

しいのはデマですよ。治安警備も遅かったね、一週間

後ぐらいですよ。兵隊さんに一部屋提供し、それでやっ

と安心して家のなかに入れました。それまでは庭の蚊

帳のなかに入るのは子どもと女だけ。男はみな、その

まわりで寝た。こわくて家のなかに入れないんだから。



島根 そう。一番こわいのは流言飛語ですね。子安に

イギリスの石油会社があつて、ドラム缶が外に山積みになつてた。それが破裂するんですよ。その音がこの辺でも聞こえるんだ。町内のある男が「あれが百八つ鳴ると、この世はおしまいだ」と。大人も子どももその人のいうことを真剣に聞いてたね。私は子ども心にも勘定してたよ。朝鮮人騒ぎにしてもデマでしょ。朝鮮の人たちだけでなく、日本人のなかにも間違えられて殺された人がいるんだ。

大久保 横浜は国際都市でしょ。外国人が多い。関東大地震の轍を二度と踏まないようにするために、外国人への配慮というのが非常に大事だと思ひますよ。

島根 それから食べものね。うちはたまたま焼けなかつたから翌日から食べられたけど、三日間くらい食べられなかつた人は結構いましたよ。「三日間の食料をたくわえろ」ということは、そのとき得た教訓ですよ。もし地震が起きたら、自衛隊が食料を持ってきてくれるか。おそらくはトラックは通れないですよ。

小林 ヘリコプターじゃなきゃこられないですよ。でも、降りられるところがどれだけあるかな。

大久保 昔は農家が多かつたから、まだよかつた。広い場所もあつたしね。

島根 いざパニック状態になつたら、パン屋とか食料品屋の商品は二時間でなくなりますよ。みんな持って

っちゃう。

大久保 だから、これからは最小限の備蓄は必要だと思ひますよ。

島根 なかでも一番大切なのは水ですよ。私の家には四斗樽(四十二リットル)という大きな樽が十二本あつた。染物屋をやつていた関係上、それに毎朝、必ず水を汲むわけ。その四斗樽の水が、まだあるだろうと思つて、近所の人がかかるわけですよ。だけど噴き出して、ほとんど残つてなかつたね。

小林 平塚あたりでもそうだったね。井戸が枯れるところが随分ありましたよ。

島根 今は井戸なんてほとんどないし、あつても、まともに飲めるところが、どれだけあるかな。水道管が破裂したら、どうしようもない。水の確保は大切ですよ。

司会 電気もだめでしょうね。

島根 電線は全部切れちゃうでしょうね。

小林 ガス管も破裂しちゃう。

司会 そうなると、料理もできない。

島根 だから、うちでは携帯用のガスボンベのスペアを買つて置いてある。

小林 トースターとか電気冷蔵庫とか全部使えなくなるわけですからね。

司会 いざというときに困らないように、日頃から準備しておくことが必要ですね。貴重な体験談をいろいろ聞かせていただいて、大変参考になりました。

もし、いま

地震が起きたら……

出席者

並木憲司さん (90歳)

森竹啓子さん (38歳)

並木憲司さんの
震災体験



二十一歳のとき。生家は本牧元町でよろず屋と質屋を営んでいました。店は米、醤油や乾物、荒物、下駄、郵便切手などなんでも売っていて、漁師町では重宝ちゆうぼうされていました。地震があつたときは店先において、いきなり揺れがきて逃げる間もなく畳に突っおしてしまいました。ゴォーという音が治まって顔を上げようとしたら、真っ暗で何も見えなかった。つぶれた家の真ん中にいたんです。あたりを見回すと、少し光りが差し込んでいるところがあり、そこからはい出してやっと外に出ました。息子はてっきり下敷きになったと思っていた母は、私の無事な姿を見てうれし涙をこぼしました。父はすでに亡く、母と弟との三人家族でしたが、弟も外に逃げて無

事でした。家の近所はみんなつぶれて、亡くなった方が続出しました。私の家の被害状況は、店のある母屋はつぶれましたが、物置や離れなどのボロ家は不思議につぶれずに残りました。

すぐあちこちから火が上がって、母を連れて海岸へ出たら、大勢の人たちが海岸に放心したように座っていました。火が広がってきて、このままではみな燃えてしまふと思ひ、みなで消そうと声をかけ、海水のバケツリレールで、一部は消し止めました。生家はそのちよつと前のところで燃えずにすみました。



並木薫司さん

中区本牧三の谷の並木薬局店主
人として現役で商売に励む。震
災当時は本牧元町でよろず屋と
質屋を営んでいた。写真・文章
などで地震の記録を残したが、
空襲で消失。生粋の浜っ子。

すぐ困ったのが水、食料、電気 そして暴徒化する人々

森竹 震災が起きたら、電気、水道はすぐ止まってしまつたのでしょね。

並木 ええ。電気も水道もだめ。水は、当時は井戸のあつた家が多かつたですから困りませんが、明りのほうが。で、客がすぐ押し寄せてロウソクとマッチを買いきたんです。でも店はつぶれちゃつていたので、出入りの職人たちの手伝いでうずもれた品物を取り出し、みんなに分け始めたらすくなくなつてしまいました。

森竹 食料はどうでしたか。

並木 漁師たちが税関の倉庫に米がいっぱいあるから取りに行こうということになり、船を出して外米を袋ごと積み込んでもどり、村のみなで分けたら二、三日はもちました。下町で焼け出された人たちは、ふろしきとか小さな袋にこぼれた米を拾っているのを見て、かわいそうに思いましたね。私たちは船で行って積んできたんです。

森竹 お米のほかには何か食べものがありましたか。

並木 野草をよく食べましたね。イタドリとか、葉の

あるものを。地震から一週間ぐらいたつたところに、どこからか、イモの粉と称するものを売りにきて、みんなそれを買って水でこねて焼いて食べたところ、下痢をしまして。赤い粉だったんですが、それは赤土だったんですね。私は食べなかつたんですが、そんな事件もありました。

森竹 食料は困るでしょうね。私も子どもが乳幼児の頃は、ミルク缶をよけいに買っておくなどしていたのですが。

並木 当座の食べものとして二、三日分の備えは、今でも心がけていますね。

森竹 昔はいざというとき、草をとったり魚をとったりできたでしょうが、今のような都市では庭さえなく、あさりをとる浜もありませんね。備えておくことは大切でしょうね。ところで、関東大震災って何か前兆はなかつたのですか。

並木 いえ、身近にあつたんですよ。震災の二日ぐらい前だったでしょうか。見たことのない魚が波打ちぎわにいっぱい泳いでいて、子どもでも手づかみできたほどでした。海中になんらかの異変があつたのでしょね。魚は弱々しく泳いでいましたが、今思うと、これが前兆だったと思います。今のような予知ができる



森竹啓子さん
磯子区東町在住。テキスタイル
デザイナー。一児の母。体や心
の健康を大切にするライフスタ
イルを求めて活動中。

科学は当時はありませんでしたが・・・。

森竹 ラジオはなかったのですか。

並木 ええ。まだ放送が始まっていませんでしたね。

森竹 電話もなかったころだし、新聞はどうでしたか。

並木 活字版も揺れてひっくりかえって、新聞を出す

どころじゃなかったでしょう。

森竹 すると、口コミ以外の情報がまったくないわけ

ですね。警察はどうでしたか。

並木 巡査は姿を見せませんでしたね。パトカーもな

かったころですし。ですから無法地帯になって、私の

村でも暴徒化する人がいて、家の蔵のなかのものを略

奪だつしようとはしました。蔵のなかはお客さまから預かっ

ている着物類があつて、ここに預けといたから焼けな

いですんだと感謝されたものばかりでした。襲ったの

は顔見知りの人ばかりでしたが、そういうことが起こ

ったんです。母の指示で私が近所の検事さんに相談に

行ったら「震災が起きたからって、そんなことは許さ

れない」と怒り、その夜に横浜地方裁判所と書かれた

ちようちんを持って蔵の前に立ってくれ、略奪しよう

と現れた人たちに「大震災が起ころうと、法はあるん

だ。どろぼうなどは決して許さん！帰れ」と一喝した

ら、逃げてそれっきりこなくなり、助かったことがあ

りました。それから朝鮮人の迫害はかわいそうなこと
でした。デマにのせられて「朝鮮人殺せ」といいなが
ら追い回している人がいました。災害の混乱のなかで
平常心をなくしてしまうのでしょね。

何を備えたらよいか

森竹 地震がきたら、どう逃げるのがいいんでしょう
か。

並木 突然きますからね。すぐ外へ出るというのが安
全でしょうね。逃げ遅れると危ないですから。

森竹 私の祖母は、地震のときは外に出るなといっ
いたんです。屋根瓦が頭に落ちるからと。

並木 屋根瓦だとそうですね。茅ぶき屋根のころは、
外に出なければつぶされたんです。

森竹 外にいたら大きな木につかまれといっていました
ね。それからよくトイレみたいな柱が何本もあるとこ
ろは安全などといいますが。

並木 ただ家が倒れれば横倒しになってしまいますか
らね。逃げ遅れても安全だとすれば、がんじょうな机
の下とか、大きな台の下でしょうね。昔は家が開放的
なつくりになっていましたから、どこからでもすぐ外



に出られました。しかし、マンションなどではドアが一つというわけで、外に出るのが大変。耐震上ではしっかりしていても、タンスなどは倒れてくるでしょうから、固定止め具をつけておかないと危ないですね。

森竹 ガラスもこなごなに割れたりして危ないでしょうね。

並木 そうです。私はガムテープを二つぐらい用意して、いつでも目につくところにかけてあるんです。いざというときには、ガラスに貼ることがありますから。

森竹 いざというときの備えですが、リュックには何を入れておけばいいのかと考えてしまいます。水、食料のほかに衣類もあるでしょうね。子ども用におんぶひももいると思いますが。

並木 最低限のものは用意しておいたほうがいいでしょうね。ロウソク二、三本、マッチ、米、缶詰などを二、三日分はそろえたいところです。そして何よりも大切なのが水。私はふだんから一、二日分くらいの水には困らないよう、ポリバケツに水を満たしておき、ときどき替えておきますね。また長いゴムホースを用意してあります。ふだんは使いませんが、火事があったときは消火に役立つようにと考えています。

森竹 私はおふろの湯も流してしまわずに、翌日使う

までためておくようにしています。

並木 それもいいですね。

森竹 水洗トイレが困るでしょうね。

並木 こればかりは対策がないですね。田舎の広々としたところならともかく、街なかでは大変。これはあまり話題になりませんが、災害が起これば必ず起きてくることですね。

森竹 いろんなものがないと、きっとパニックが起きるでしょうね。サンフランシスコの地震でも商店街などでパニックが起きたと聞きますし。私も子どもに飲ませるものがなかったら、ジュースの自動販売機をこじあけたりしてしまうかもしれませんし(笑)。コンビニエンスストアが襲われたりということも起こるでしょうね。震災やその後の第二次大戦での空襲を体験された方は、やはりしっかり備えていらつしやるようですね。私たちの世代もぜひ見習いたいと思います。貴重なお話をありがとうございました。

家族で話し合おう 地震のこと

出席者

富沢さん一家

富沢 実さん (87歳)

さださん (81歳)

長男

嫁

孫

孫

孝さん (42歳)

和子さん (37歳)

恭子さん (11歳)

一也さん (9歳)

富沢実さんの
震災体験



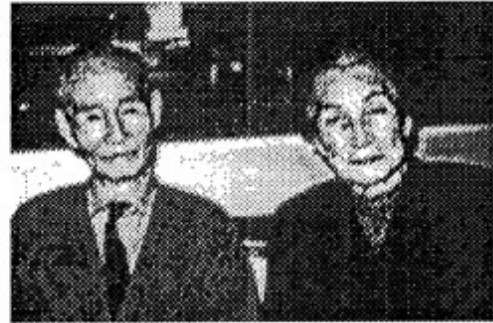
.....
そのとき私は東京商科大学商業教員養成所一年の夏
休みで、高座群大和村深見宮下にある父の経営する製
糸工場にいました。生繭の看貫として、目方を計る作
業をしていたときでした。揺れがきてすぐ外に飛び出
しましたが、歩行することもできない揺れで、地面を
はうようにして出ました。工場は半倒壊して復旧に三
カ月もかかる大損害を受けました。その後の一週間は
みんな庭に蚊帳をつつて寝ました。
.....

大勢の人のあとに
ついでいかなうかと

実 大震災でも家族八人が無事だったのは何よりだっ

.....
震災当日の晩は横浜の空が真っ赤に焼け続けまし
た。翌々日には嫁いでいる二人の姉の無事を確かめに、
自転車で川崎町と東京渋谷ににぎりめしを持って訪ね
ました。途中の道路わきで死体を三体ほど見て、眼を
そむけました。家族は両親をはじめ八人でしたが、み
んな無事でした。食料はアメリカから救援物資として
大量の小麦粉が送られ、すいとんをつくって飢えをし
のいだのを覚えています。
.....

.....
たが、みんな大変な体験をしたものだった。
さだ 私はちょうどそのときは郷里の三重県宇治山田
において女学校二年でしたよ。よいお天気の日で、お弁
当を外で食べようと出たところ、グラリと揺れたの。



富沢さん一家は三世大家族。実さん、さださん夫妻は長く教職に就いていたが、現在はそれぞれ文筆、短歌をライフワークにしている。

震度三くらい感じ。二、三日たってから東京で大震災があったことを知ったわけです。

実 地震があっても、とにかく落ち着くこと。それから大勢の人たちの後について行くなどということだね。大勢の人たちの動き方がすべて正しいわけじゃないからなんだ。

さだ 今は避難場所が決められてますからね。家族がバラバラなところに行ってもまずそこに行くことね。

和子 今、子どもたちは月一回の避難訓練を受けているんですよ。親に連絡があつて学校へ子どもを引きとりに行く訓練です。万一のときみなバラバラだったり、家が倒れたりした場合は、この地域の避難場所の程ヶ谷カントリーで待ち合わせることに決めています。学校では、もし震災が起きたら、どうしろつていわれているの？

恭子 まず机の下にもぐって、先生が校内放送で指示をしてくれるのに従うことになっているの。前に一度、給食の時間に地震があつたときも、校内放送で地震ですって知らせてくれました。

一也 そのとき、ぼくたちは全然気がつかなかった。動き回っていたからかもしれないけど。

和子 お父さんは前に地震があつたとき、仕事先からすぐ電話をくれましたよ。

孝 そのときはすぐ電話ができたけど、二、三年前のちよつと大きめの地震のときは、電話がまったく通じなかつたね。だから大震災になると電話はあてにできないだろうね。

和子 車を運転中に地震があつて、降りてもすぐ揺れているときがあつたの。そういうときは車を止めてキーをつけたまま逃げなきゃいけないですよ。

さだ その場その場で臨機応変の対応ができればいいんですよ。

孝 ラジオが一台あれば、どこにいてもすぐ情報がつかめるからいいね。二人とも起震車は乗ってみたのだったかな？

一也 ぼくはまだ乗ってないな。

恭子 私も。でも聞いて少し知っている。電話なんか落ちてきちゃうんだって。

孝 そうか。じゃあ今度一緒に乗ってみようか。地震の揺れがどんなふうにくるのかが少しつかめるからね。

いざいざいざいざ

話をしておくことが大切

実 小さい地震がちよくちよくあれば、みな警戒する



孝さんは自営の広告業を営み、和子さんは忙しい主婦業のかたわら、趣味の刺しゅうを楽しんでいる。一家が皆で集まり、いろいろなテーマを話し合うことを習慣としている。

ようになって、かえっていいけどね。でも大震災の教訓は、今でもあちこちに生きていような気がするけどね。

和子 私は鹿児島出身なので、噴火による地震をたびたび体験したんです。そこでは「すぐに飛び出すな」っていわれてました。竹やぶは根がはっついていて安全だから、そこへ逃げるようにと教わったものです。台風もよく来ましたから、缶詰などを買い置きしていたし、水は井戸から使っていましたね。

さだ そういう災害への体験は、うちの場合でいうと、備えることで生かされてますよね。

和子 非常用の持ち出し袋は用意してあるんです。子どもが小さかったころはおむつと飲みもの、おんぶひもを入れてました。今は水と乾パン。このまえ子どもたちと試しに乾パンを食べてみたんです。けっこう食べられたわよね。

恭子 うん。まあまあ。でもあれを毎日となるとちょっとね。

一也 ほくも。おいしいってものじゃないしね。

和子 あと日常的な心がけとしては、寝るときは枕元に服をそろえておくことでしょうか。私の父から戦時中の教訓として厳しくいわれたことで、すぐ逃げられるようにということです。今、二階が寝室ですが、何

かあったら外にふとんを投げて飛び降りようと、話し合ったりしています。

孝 いざというときどうするかって話をみんなですておくことが大事なんだよね。ところで、大きな地震がきたら、何を持って逃げる？

一也 熱帯魚かなあ(笑)。

恭子 私はわからないな。この前の地震のとき、たしかお父さんは水槽のことが心配だったんだよね(笑)。

実 最近ではサンフランシスコ大地震があったね。あれを見て思うに、都内では、大深度地下鉄とか地下弾丸道路の建設構想があるけど、人命を考えると安全性はどうなのかと思えてならないね。大地震のような自然の猛威に対して、科学技術は勝ち目が無いのじゃないかという気がしてね。それを知ったうえで、自分たちで今できることを考えなきゃいけないんだと思うね。この家は昭和四十年に建てたけれど、井戸を掘ったのもいざというときのためだし、現在のような鉄筋・鉄骨造りにしたのも簡単には崩れないようにと思っただけだ。大震災のときは茅ぶき屋根がほとんどだったけれど、震災の直後にはトタン屋根に変わるというふうには、体験は生かされるものだ。災害はいつくるかわからないから、それを地震のないときも忘れてはいけないと思うね。



あとがき

本書は、関東大震災を体験した方々の貴重な体験談を集め、次世代に語りつぐ証言集として編集しました。

すでに、横浜市民の多くは関東大震災を知りません。

関東大震災が起きた六十七年前と現在とは比較にならないほど、私たちをとりまく環境は激変しています。

第一に人口が増え、住宅も密集しています。車が増え、幹線道路が市内の縦横にはりめぐらされています。食料を自給できず家庭はほとんどありません。さらに、



家族一人一人の通学、通勤などの行動半径は驚くほど広がっています。

そんなことを考えると、ここに出てくる話は別世界の出来事のように感じられるかも知れません。しかし、大地震がどういふものであったかは理解できたことでしょう。不幸にして地震やパニックにより、尊い命を失われた方々にご冥福をお祈りするとともに、二度とこのような不幸が生じないように、市民の皆様と力をあわせてまいりたいと決意をあらたにしております。

この本がきっかけになって、地震に対する正しい知識を得たり、家族でいざという時の話し合いをしたり、災害への備えなどに結びつくことになれば、幸いです。最後に、各区の老人クラブ連合会のみなさまをはじめ、取材にご協力いただいた方々に厚くお礼申し上げます。

平成二年九月

横浜市総務局長 根本和夫

参考文献……脚注には以下の本を主に参考とした

末尾の()内の数字は刊行年(西暦)

竹内重雄 著 「大正風俗スケッチ、東京あれこれ」

国書刊行会 (87)

小田貞夫 著 「横浜エンシヨ」有隣堂 (74)

金原左門 著 「昭和への胎動」(文庫版 昭和の歴史I)

小学館 (88)

斉藤秀夫・半沢正時監修

「横浜思い出のアルバム」横浜市 (79)

横浜市民局市民情報室広報センター編集

「さらめく大正時代」(市民グラフ No.58)
横浜市 (86)

高村直助・岡本 勇・下山治久・大口勇次郎監修

「図説・横浜の歴史」(横浜市) (89)

写真提供・協力

池田嘉代

高橋美知枝

横浜迎賓館

横浜市民局市民情報室

横浜市民局市民情報室広報センター

語りつぐ関東大震災 横浜市民84人の証言

発行日……平成二年九月一日

発行……横浜市総務局

〒231 横浜市中区港町一―一
☎〇四五(六七二)二二七二

企画・編集……横浜市総務局災害対策室

制作協力・デザイン……株式会社ベイス

高橋 晃・漆原由希子
村田佳子・麦島順子

編集協力……株式会社エディタースサード
コンフリート

イラスト……丹羽基之(本文)

三木淳史(脚注)

印刷……

横浜市広報印刷物登録第〇〇〇〇〇〇号 類別・分類B1BEE000